

---

# 異端者の狩獵物語

豊島将紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異端者の狩猟物語

### 【Nコード】

N9530Q

### 【作者名】

豊島将紀

### 【あらすじ】

それは“狩人”と呼ばれる職業が存在する世界。古来より、人々は大自然の元に村や街を作り栄えてきた。襲い掛かるのは天災だけではない。牙獣や飛竜、そして想像もつかない様な未知なるモンスターたち。村や街は“狩人”を雇う事で平穏を保っている。そんな中、“狩人”としてのライセンスを持ちながらも、どの村にも街にも所属しない1組の男女がいた。“異端”と“可憐”。これは、その2つ名を持つ男女の物語である。（第2章完結・第3章準備中）

## 主な登場人物（前書き）

登場人物については、  
章ごとに別ページにて更新版を掲載させていただきます。

## 主な登場人物

レイリー

銀髪。クエスト達成率10割を誇る伝説の放浪ハンター。

一匹狼だったが、とある事情により現在はアリサと行動している。

“異端”“救世主”と称されしその腕はギルド・グランドマスターも認めるほど。

武器は片手剣と弓の同時携帯という変則的なスタイル。

気配に非常に敏感であり、相手の“呼吸”を探る事で次の行動を予測し戦う。

アリサ

金髪。スレンダー体型。レイリーと共に行動するハンター。

武器は双剣。レイリーを溺愛しており、全てにおいて彼を優先する。

“可憐”“双騎姫”と称されし剣技は凄まじく、ギルドマスターにも後れを取らない。

## プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する人物・団体等は全て架空のものです。

原作会社様の権利等、侵害する意図は一切ございません。

## プロローグ

ズウウウン

一際大きな音を立てて、目の前の巨体が沈む。男はそれを表情一つ変えずに見つめていた。がさがたと音が聞こえる。どうやらギルドの使い達がやって来たらしい。

「お仕事ご苦労さん。」

こいつの処理、頼んでいいか？」

「もちろんですニャ」

先頭を歩いていたアイルーがそれに答える。指差し1つで、後ろに従っていた他のアイルーたちが、わらわらと巨体に群がった。ロープで体を固定し、用意していた台車に手際よく運んで行く。

彼ら（？）はギルドから正式に雇われている『A・G・S』（アイルーギルドサポーターズ）の面々だ。各々が青いギルドの制服を身に纏っている。先頭で指示を飛ばしていたアイルーのみが、赤い制服。これは昇格したアイルーの証。つまり、このグループのリーダーという事を意味していた。

「流石はレイリーさんですニャ。討伐時間が1時間を切ってますニャ。」

噂通りの腕前のようで」

「どこから聞きつけた噂かは知らんが、この程度の相手ならこの時間は普通だ」

レイリーはそう答えると、弓を背中に戻しながら、地面に刺さっていた剣を抜き取り腰の左サイドに収めた。その仕草に、リーダー格のアイルーは目を細めた。

「相手のスタイルに合わせ、武器を使い分けるのはハンターの基本。それでも、1クエストに2つの武器を携えて行けるのは貴方だけ

ですニヤ」

「皆がしなだけさ」

「本来なら、それが非効率的だと知っているからですニヤ。それでも貴方は違う。」

それが貴方のスタイルにとって、最も効率が良い」

「褒めてもマタタビはやらんぞ」

そう言つて、レイリーは長い白銀の髪を翻して踵を返した。

「後は頼む」

「了解しましたニヤ。報酬金の方は、後にギルドから。」

またお願いしますニヤ」

その言葉に、レイリーは一度足を止めた。ゆっくりと振り返る。

「いや、もうこの地でのクエストは受けないだろう」

「？ どういう事ですかニヤ？」

「いつまでも無所属でいる、というのもあれなんだな。」

雇われる事にしたんだ」

「ほう？ いったいどちらで？」

興味津々で尋ねて来たリーダー格のアイルーを見据え、レイリーは口を開いた。

「ユクモ村だ」

## プロローグ（後書き）

初めまして、豊島将紀と申します。

ずっと書いてみたいな、と思っていたのですが…。

遂に手を出しちゃいました。

初めての事ですので、至らない点が多々あると思いますが、  
これからよろしく願います!!



## 第1話 邂逅

「レイー!!」

帰ってくるなり、開口一番。自分の名前を叫ばれた。

「なんだアリサ。うるさいぞ」

鬱陶しそうな顔を隠そうともせず、レイリーはそう答えた。

「貴方、いったい何処へ行ってたのよ?!

起きたら貴方が居なくなっていてびっくりしたわ!!」

眩いばかりの金色の髪を振り乱して叫ぶ。

彼女はアリサ。レイリーとチームを組んで早10年になる。

組む、と言っても向こうから強引に付いて回っているだけなのだが。

「言っただはずだぞ。時間を深夜に指定されたクエストがある、と。

俺はそれに行っていただけだ」

そう言うつと袋包みを放る。

ガシャっという重い音を立てて、それはアリサの手中に収まった。

「……………随分と重いわね。何を狩ったのよ」

「迅竜」

「はあ?! なんで私を連れていけないのよ!!」

「お前が寝てたんだろう」

レイリーの冷静な対応に、うぐっつとアリサが声を詰まらせる。

「それに、前にナルガは嫌いって言ってなかったか?」

「貴方の為なら、私はどんなモンスターだろうが相手にしてやるわ」

「左様か」

レイリーはその言葉に淡白な返事を返して、テントの荷物をまとめ始めた。

「ちょ、ちよつと。何してんのよ」

「何って、荷物をまとめてる。

ここをベースにするのはもうやめだ」

「聞いてないわよ?!」

「言っていないからな」

生返事を返しながらも、レイリーの手は止まらない。

「……何処へ行くの？」

「ユクモ村だ。そこで少しの間雇われる事になった」

「聞いてないわー!!」

「言っていないからな」

「あー!! もう!!」

アリサは金色の髪を掻き毟り、奇声を上げると自らの荷物をまとめ始めた。

「おい」

「何よ?!」

くわつとレイリーを睨む。

「まさか、付いてくる気じゃないだろうな」

「貴方が行く場所になら、何処へだつて付いていくわよ!!」

「……………はあ。好きにしる」

レイリーは諦めたかのように、自分の作業に戻った。

レイリーとアリサの出会いは今から10年前。

受けたクエストはバラバラ。違うクエストを違う依頼人から受けて、たまたま出会った。

その日のレイリーは、いつもとなんら変わらずに自分の受けたクエスト早々に終わらせ、のんびりベースキャンプへ戻っていた。その帰り道、やたらと騒がしい音を聞きつけ、何気なしにそこへ足を向けてみると、そこには腹を空かせた1匹のリオウスと満身創痍の少女。金色の髪はボサボサ。装備も泥だらけ。体にも無数の傷が付き、血が滲んでいた。

レイリーは1つ溜息を付いて、背中に使っていた弓を取り出し、何の躊躇いもなく矢を打ち放った。それは見事にリオウスの眼球を捉え、レウスはその痛みで咆哮を上げる。

「きゃああああ?!」

その真下に居た少女は耳を押さえて蹲る。

「おいおい」

その仕草に若干の苛立ちを感じながら、レイリーはレウスとの距離を詰めた。

片目が潰され、平行間隔を失っているのだろう。レウスはふらふらとよるめきながら、強引に尻尾を振り回し始めた。真下に居る少女は運良くそれを逃れてはいるが、時間の問題だろう。

レイリーは走りながら再び弓を構えた。狙いを付け、5本の矢を同時に打ち放つ。それは寸分の狂いも無くレウスの尻尾に突き刺さった。大地を揺るがす程の咆哮が響く。

「叫び声上げる暇があったら、とっとと逃げろ。民間人かお前は」  
「え？」

泣き顔のまま、少女が顔を上げる。それと同時にレウスの尻尾が、座り込んでいる少女とその脇に立つレイリーに迫ってきた。

「きゃあああああ?!」  
「うるせえよ」

レイリーはそう呟くと、弓を地面に落とし、その手で左の腰ベルトに装着されていた片手剣を抜き放った。瞬間。尻尾がレイリーたちを捉えるより先に、レイリーはレウスから尻尾を切断していた。

「……い、一撃？」

厳密には、弓で一部にダメージを集中させていたからこそだったが、途中まで視界を閉じていた少女にはそのように映ったようだ。レイリーはその間違いを正すこともなく、懐から閃光玉を取り出した。

「……そ、それって」

「アンタのクエストは失敗だ。俺がこいつを倒してやる義理はねえからな」

少女の返答も待たず、レイリーはそれを放った。眩いばかりの閃光が周囲を襲い、残された片目の視界すら奪われたレウスは、驚きのあまりその場で転倒してしまった。

「ここから抜ける。お前も来い」

「で、でも」

「なんだ。まだやりたいってんなら置いて行くが」

「そ、そうじゃなくて!!」

少女は顔を赤らめ、俯いたままこう言った。

「こ、腰が抜けちゃって」

「は？」

結局、レイリーはギルドのアイルーが救助できるところまで付き添ってやり、近くの村まで少女を搬送した。既にうんざりしていたレイリーは、その場で別れを告げて行こうとしたところ、少女に腕を掴まれた。

「あ、あの。私アリサっていいいます。先ほどは助けて頂いてありがとうございました。」

貴方のお名前、教えて頂けませんか？」

以来。なぜかレイリーが行くところ行くところに、アリサは付いて来るようになった。

最初はまるでストーカーのように後ろからちよこちよこ付いて来るだけだったが。

ある日、状況が一変した。

「私、今日から貴方のパートナーになるわ」

「いらん」

そう宣言してから、寝食まで共にするようになった。レイリーは確かに断った筈だったが、どうやらそれは、アリサの脳内で勝手に都合がいいように変換されてしまったらしい。もはや拒絶するのすらも面倒で。レイリーがそれを黙認して仕事をこなす間に、2人は世間一般に知れ渡る公認のチームとなってしまうていた。

2種類の武器を自在に操り、どんな敵でも殲滅する“異端”レイリー。そして、流れるような所作で敵を圧倒、粉碎する“可憐”ア

リサ。2人の請け負った仕事は、組んでからのこの10年間、一度も失敗に終わった事は無い。どの村にも街にも所属せずに放浪する2人組は、狩人たちの中でも一種の伝説と化していた。

「それにしても、どういふ風の吹き回しかしら。」

雇われるだなんて。貴方らしくないわ」

「別になにも。ただ、少し気になる情報を仕入れてな」

「なにかしら？」

それは雇い主からのもの？」

「いや、雇い主とは別件だ。」

雇い主はユクモ村付近に出没し始めたらしい、

雷狼竜という向こう特有のモンスターの討伐依頼。

それと近隣の警護だったが。俺が気にしているのは、その周囲の目撃情報だ。

アリサ、お前……」

レイリーは一度手を止めて、アリサを見た。アリサもそれに倣ってレイリーを見つめる。

「お前。天候を自在に操れる龍がいるって言ったら……。信じるか？」

「ええ。貴方が言うのなら」

「……………」

「……………」

レイリーは無言のまま、荷造りの作業に戻った。

「それで？ それは古龍観測所が記録しているクシャルダオラとかとは違うのかしら？」

アリサも作業を再開しながら問う。

「あいつ等は天候を操っているわけじゃない。」

自身の身体に、それに似た様な状態を纏えるだけだ。

俺が言っているのは、文字通り。天候を操れる龍だ」

「…まさか。」

自在に雨を降らせる事が出来るなんて言わないわよね」

「そのまさかって事だ」

驚愕しているアリサを尻目に、レイリーは自分の作業を早々に終えるのだった。

レイリーは、ギルドに引越しの依頼を出していた。

これまでに手に入れてきた素材や装備を、全て持って移動するのは不可能。最低限の身支度だけ整え、ギルドには全て任せて出発した。幾つかの帆船を乗り継ぎ、ユクモ村に一番近い山の麓で下してもらおう。

「助かった」

「いいって事よ。こつちもいい商売だった」

いくらかのお金を支払い、礼を言う。そのまま別れて、山へと足を踏み入れた。

「雲行きが怪しい。一雨来るかもしれないな」

「最悪。何も準備してないわ」

「嫌なら帰れ」

「何処へよ」

アリサのもつともな問いに答えを持ち合わせていなかったレイリーは、そのまま黙って歩き続けた。

どれくらい経つたろうか。耳を澄ませば、からからと乾いた車輪を転がすような音が聞こえてきた。アリサと目を見合わせる。後ろを振り向くと、アイルーがカーグアに台車を引かせながら、こちらへ向かってくるところだった。

「旦那がた。この道を通ってるって事は、この先のユクモ村に用かニヤ？」

「そうだ」

「乗っていくかニヤ？」

今日は仕入品が少なく、まだスペースが空いてるニヤ。

お代はとらないニヤよ」

「いいのか？」

「人間2人くらい余裕ニヤ」

「お邪魔させてもらおう」

車輪に足を掛け、台車に乗り込む。上からアリサに手を差し出した。

「いつもは冷たいけど、こういうときは紳士なのよね」

「減らず口よりも体を動かせ」

アリサの茶々を払い、台車の上に招き入れる。

「待たせた。頼む」

「ちゃんと掴まっててニヤ」

がらがらと、台車が動き出した。

ぼたぼたと、音がし始めた。空を見上げると、どんよりとした灰色の雲が広がり、徐々に落ちてくる水滴の量が増してくる。

「降ってきたな」

「そうね」

雨は瞬く間に勢いを増した。ばしゃばしゃと車輪から泥水が舞い散る。遠くから雷鳴も聞こえてくる。どうやら本降りになってしまったようだ。1匹と2人を乗せた台車は、それでも止まることなく山の崖付近に差し掛かった。木々が一掃され、遠くまで見渡せるようになる。レイリーは雷鳴が響いた方を見やったときに、“それを視界に捉えた。

黒き雨雲が空を覆い尽くす中、その部分だけがはっきりと異なる様相を呈していた。黒い雲が、“それ”を中心にして渦を巻くように広がっている。中心から紫色の閃光が走る。一瞬だけ露わになった“それ”にレイリーは目を見開いた。

「アリサ！ あいつだ

「レイ！...」

レイリーが声を出すのと、アリサが叫ぶのは、ほぼ同時だった。

普段とは異なる、その緊張を孕んだ声に、レイリーが振り向いた瞬間。

目の前で、青き稲妻が走った。



## 第2話 鬼門番と村長と宿舎

「レイー!!」

アリサの叫び声とほぼ同時に、青い稲妻が走る。気が付いた時には、もう台車から放り出されていた。雨によってぬかるんだ地面に叩き付けられたが、直ぐに体を起こす。そこには。

「……………雷狼竜」

初見だったが、一目見て分かった。見間違えようもない。体中を青白い閃光が駆け巡る。電光虫が周囲を飛び回り、雷狼竜を不気味に照らし出していた。四足で天を貫くが如く立ち尽くすその姿。まさに君臨していた。

それを視界に捉えつつ、そつと得物に手を伸ばす。

(ここで片付けてしまえるのなら、それに越した事はないが…)

そう考えた直後、バチバチと嫌な音を立てて、近くの木が燃え上がった。

「……………っ?! そうか、感電するのか!!」

下は水浸し。雨によって体はずぶ濡れ。どう考えても戦える状態じゃない。そう見切りを付けた直後、下の方から自分を呼ぶ声が聞こえた気がした。

レイリーは迷わず、崖から下へと飛び降りた。丁度タイミング良く、ガーグアが引く台車が下を通った。がしゃんと大きな音を立てて着地する。台車はそのまま勢いを殺す事無く走り続ける。雷狼竜は空を見上げたまままだ。どうやら逃げ切れたらしい。というより、相手にされなかったと言った方が正しいのかもしれないが。

「良かったわ。レイ。貴方が無事で」

アリサが心底ほつとしたような口調で呟く。

「お前は良く振り落とされなかったな」

「何を言っているの? 貴方が庇ってくれたんじゃない」

まったく身に覚えが無い。条件反射だったのだろうか?

「直ぐに降りて加勢しようと思ったんだけど、前で直ぐに道がUの字になっているのが見えて。

加勢するより、このまま台車で賣方を待っていた方が良いと踏んだの」

「賢明な判断だ」

レイリーは崩れるように台車に座り込んだ。

「少なくとも、この天候であいつは狩れない。

逃げ切れたのは、運が良かったな」

レイリーはもう一度振り返った。雷狼竜の方ではない。空を。

「何か見えるの？」

アリサは何気なしにそう尋ねた。

「何も見えなかったか？」

「雲と雨ならいくらでも」

「そうか」

それつきり。レイリーは目を閉じ、一言も発しなかった。

「着いたニヤ」

からからという音が止まる。台車は村の門の前で停車した。

「世話になったな」

レイリーは台車から降りると、アイルーにいくらか差し出した。

「お代はいらニヤいと言ったはずニヤ」

「お互い運良く生き延びた。これはそのラッキー料だ。

取っついてくれ」

そう言ってレイリーはアイルーにお金を握らせた。

「旦那。良い人間ニヤね。

じゃあ、有難く頂戴するとするニヤ」

アリサに手を貸し、台車から降ろす。それを見届けると、アイル

ーはまたガーグアに合図を送った。

「また会おうニヤ。旦那がた」

「ああ」

「ありがとう」

2人で台車を見送る。先の曲り道で台車が見えなくなったところで、改めて村の門に向き直った。

「これはまた。立派な鳥居だな」

「ほんとね」

目の前には気の遠くなるような程の階段が続いていた。どうやら、山そのものを村にしたらしい。この階段を中央通路として、左右にそれぞれ村の家並みが広がっているようだった。

「さて、行くとするか」

「ええ」

「ちょっと、その2人組。止まりな」

階段を上り始めて直ぐ。鳥居の下に居た時から、なんとなく目線は感じていたのだが、まさか呼び止められるとは思っていなかった。頭にタオルを巻いた坊主頭の男は、うさん臭そうな目で2人を見回した。

「何か用か？」

「それはこつちのセリフだ、アホめ!!」

「なにアンタ。レイを侮辱するなら私が」

「お前は余計ややこしくなるから黙ってる」

早々に坊主頭の男に食って掛かるうとしたアリサを押し留める。

「このユクモ村に用がある。通してくれ」

「あいや待たれい!!」

通してくれないらしい。既に横ではアリサがぶるぶると体を震わせているが、ここで暴れさせるわけにもいかない。レイリーは溜息を付きながら、坊主頭の男を見やった。

「で？」

「てめえら、オイラが何者か知らねえようだなあ。」

泣く子も黙る、ユクモ村の鬼門番・ラクロウとはオイラの事よ!

「!!」

「鬼門番？ 何だ。もうこの村にはハンターがいたのか」

「いいや！ いねえ！ オイラは対人専用の門番！！」

モンスターたちは専門外だい！！」

「……何それ。いらんないじゃない」

「いらんとは何じゃー！！！」

アリサの死ぬほど冷たい視線を受けて、門番・ラクロウが吠えた。

「ええい、ともかく怪しい奴め！！」

このユクモ村の鬼門番が居る限り、ここは通しゃあしないぜ！！」

「……レイ。斬っていいわよね」

「よせ」

レイリーはアリサを手で制すと、一枚の紙をラクロウに差し出した。

「何だあ？ この紙きれは」

「お前が今必死になって守ろうとしているユクモ村・村長からの依頼書だ。」

本日付けで、少しの間だがこの村専属のハンターとなるレイリー

だ。よろしくな」

「…へ？」

ラクロウが力の無い声で答える。依頼書とレイリーを交互に見比べ、その動作を10回近く繰り返し返した後、急に叫びだした。

「あ つ?! “異端”レイリー!!!!!!」

「ほう。俺を知っているとは。光栄だな」

その叫び声に顔色一つ変えず、レイリーはそう答えた。

「じゃじゃじゃじゃ、じゃあー!! 隣に居る女はもしか

」

「分かったらさっさと退いてくれるかしら。邪魔なのよ、貴方」

自己紹介もせず、虫を追い払うかのような所作でアリサが答える。

「で？ 通っていいかい、門番君？」

レイリーの一言に、ラクロウはがくがくと頭を振った。もちろん

上下に。

それを確認して、レイリーとアリサはようやく1つめの広場（階段だったので踊り場？）に出られた。後ろから「ようこそお越し下さいました！！ 兄貴！！ 姐さん！！」と言う声が聞こえたが、2人とも何事も無かったかのように無視した。

どうやらここはアイテムや武器関連を扱う店が立ち並んでいる場所らしい。他のハンターたちもちらほらと見受けられた。

「なによ。本当にハンターいるじゃない」

「これは湯治を目当てとしたハンターたちだろう。ユクモの温泉は傷に良いと聞く。」

お世辞にも交通の便が良いとは言えないこの村に、客の足が絶えないというのはそういう理由がある」

「へえ」

レイリーの解説を受けながらアリサがうんうん頷いていたところ、1人の女性から声が掛かった。

「あの……。この村は初めてですか？」

よろしければご案内致しますが」

「ああ。この村の村長に会いたいんだが」

「…？ 失礼ですが、貴方がたは？」

「本日付けでこの村のハンターになったレイリーだ。」

よろ

「そしてアリサよ。よろしく」

レイリーの言葉を遮るように、アリサが前に立った。

「おい」

「何よ」

「え…。え？ で、でも確か村長様は、雇ったの1人って…」

「何ですって？ ちゃんと確認なさい。」

この人の傍にはいつもわた

「済まない。細かな事はこちらで調整する。」

悪いが村長のところまで案内してもらえるか？」

アリサを押し退けて村の娘に向き直る。

「は、はいっ。こちらです」

顔を赤らめ、ささっと目を逸らして娘が歩き出す。

その仕草にアリサがむっとした表情を見せる。

「どうかしたか？」

「知らないわ！」

アリサがそつぽを向いたのを見て、レイリーは肩を竦めた。アリサの機嫌が急に悪くなるのは、よくある事だ。レイリーは構わず、村の娘に続いて階段を上り始めた。

「ほう」

「む」

村の娘に連れられて、2つめの広場に出る。その広場に足を踏み入れたところで、向こうも気が付いたのだろう。席から立ち、流れるような所作で一礼してきた。紫を基調とした着物に、目を見張るほどの真つ黒な黒髪。耳が左右に伸びているのは竜人族の証。艶やかな表情を浮かべた美女が、そこに居た。村の娘が駆け寄り、レイリーたちの事を伝えようとしたところを笑顔で頷く。そして、改めてレイリーたちに向き直った。

「お初に。ようこそ、ユクモ村へ。」

我が村のハンター・レイリー様。

お待ち致しておりました」

その言葉に一礼して返す。

「失礼ですが、ギルドカードを拝見させて頂いてもよろしくて？」「構わない」

懐からカードを取り出し、その女性に手渡す。女性はそれを受け取り、しげしげと眺めた後、満足そうに頷いてカードをレイリーに差し出す。

「間違いありませんね。“救世主”レイリー。」

この度は私どもの依頼をお受け下さり、誠にありがとうございました。

す」

「そちらの2つ名は久しぶりに聞いたな」

女性からカードを受け取り、元の場所にしまう。ギルドカードは、ハンターたちを一括で管理するギルドが発行する、ハンターの正式なライセンスだ。ここには氏名他、その者のハンターとしての経歴やモンスターの討伐数などが詳しく記載されている。1クエスト毎にその地その地のギルドに預け、クエスト終了とともに記録を書き換える。よって、その人間のハンターとしての経歴は、そこに事細かに記されているという事だ。

「私はこの村の村長兼、あちらに見えます集会浴場の女将をしています、

アゲハと申します。以後、よしなに」

「レイリーだ。よろしく頼む」

村長に目で促された集会浴場の外装を見やりつつ、レイリーは自己紹介した。

「それで、其方のお方は？」

アゲハがアリサを捉える。

「済まない。こちらの手違いだ。この女まで付いて来るとは思わなかった」

「そんな言い方無いでしょ?!」

アリサが食って掛かる。

「“双騎姫”アリサ様ですね。お噂はかねがね。

では、貴方もこちらに？」

「ええ。当然でしょ？」

「お前は黙ってる」

何を根拠に胸を張っているかは知らないが、放っておくと面倒だ。レイリーは早々に仲介に入る事に決めた。

「村長。繰り返すが、こちらの手違いだ。

従って今回の依頼にあたり、諸経費・報酬等は、当初の予定通り、1人分で構わない。

ただ、1つだけ頼みがある。宿だけは欲しい」

「あらあら。困りましたわね」

「？」

村長が悩ましげに、頬に手を当てながら溜息を付いた。

「恐れ入りますが、こちらでご用意させて頂いたのは、

レイリー様の為の宿舎一軒のみですの。

他は旅行者の方々で満室でして……」

「それは困ったな」

「……一軒？」

困った表情で唸るアゲハとレイリーを余所に、アリサがその単語に興味を示した。アゲハは、その問いに頷きながら、レイリーとアリサ、2人の後方を指差した。その先には一軒の家。

「あちらの宿舎をお好きにお使い頂いて構わないよう手配致しておりますの」

その言葉を聞いて、アリサはピーンと来たかのように笑顔で向き直った。

「なら平気です。私、レイと住みますから」



**第2話 鬼門番と村長と宿舎（後書き）**

こんにちは、豊島将紀です。

第2話になります。

お楽しみ頂ければ幸いです。

何かご意見ご感想等ありましたら、是非お願いします。

### 第3話 青熊獣の襲来

「どういうつもりだ」

「どうもごも無いわよ。いつも一緒に住んでたじゃない」

「ちゃんとした宿舎があるところは別々にしていたはずだが」

「ちゃんと“空いてる”宿舎が無かったんだから仕方ないわね」

本当に「仕方ない」と思っている奴は、鼻歌交じりに喋らない。

そう口にするのも億劫で、レイリーは深々と溜息を付いた。

「やっとちゃんとしたベッドで寝れると思っていたんだがな」

手荷物に携帯寝袋が入っているかを確認しながら、レイリーはそうばやいた。

「何言ってるのよ。あのベッドで一緒に寝るに決まってるじゃない」

「……………お前はもう少し、女としての恥じらいを持って」

「あら。私に異性を感じてくれるのかしら？」

アリサは悩ましげなポーズを取りながら、そうレイリーに問うた。形の良い胸を強調するように腕を組む。レイリーはそれを見て、頭痛を覚えそうになった。

「まあ。生物学上では、俺とは違う性のようだな」

「何よ、その言い方。面白くない」

「光栄だ」

素っ気ない返事をしながら、先ほどアゲハから頂いた物に目を通す。この地伝統の『ユクモノ』と名の付く防具を2式（結局、アリサの分も頂戴した）、そして集会浴場のご優待券。『ユクモノ』関連の武器も一式揃えるかと問われ、レイリーはそれを拒否した。前にこの地に居座っていたハンターの中古品だそうだが、今自分たちが持つ武器に適うとは思えない。まずは村の皆と親しんで欲しいというアゲハの気概を組んでこそ防具は頂いたが、本来ならそれも拒否するつもりだった。

「何、この防具。ただの旅人の服じゃない」

「あながち間違いで無いな。」

ユクモノカサは旅人を表す記号としても用いられている」

「へえ。レイ、貴方ほんと物知りね」

「旅の目的地の情報くらい勉強しておけ」

「大丈夫。私にはレイがいるし」

「左様か」

自信満々に言い切るアリサに呆れ果て、これ以上この話題を続けるのは止めにした。

「さて。着替えたら自慢の大浴場とやらに行ってみるか」

「うそ。本当に着るのこれ。木こりにでも転職するつもり？」

「郷に入りては郷に従え。」とある太古の国に伝わる掟だ」

「どこの国よ」

そう言いつつ、2人はお互い背中を向けあい、何の躊躇いもなく服を脱ぎ始めた。客観的に見れば、どちらも異性相手に動揺する事無く、淡々と着替えているのは凄い光景だったが、あまりに長い年月を共に過ごしてき2人には、特に特別な事では無かった。

「さて、行くとするか」

「ええ」

軽く身支度を整え、銭湯へと足を向ける。どうやら集会浴場に直接繋がる宿を一軒提供してくれたらしい。そんな気遣いに感謝を覚えながら向かおうとしたところで、何やら物騒な叫び声が外から聞こえた。

「……………聞こえたか？」

「何の事かしら？」

アリサは明後日の方向を目で追いながら、そう答えた。

「お前はもう少し、この村のハンターという自覚を持って」

「この村のハンターは貴方でしょう？」

私は貴方のハンターよ」

「言ってる」

レイリーとアリサは急遽行先を変更し、連絡通路ではなく宿の正面出入り口から外へ出た。先ほどまでアゲハと話していた場所に、人だかりができています。2人はその人混みを掻き分けて、中央へと歩み寄った。そこにはアゲハと、汗だくになった少女3人。必死に何かを訴えているようだが…。

「どうした？」

レイリーは何かあったか確かめるべく、割って入る事にした。

「あら、レイリー様」

村長が向き直る。同時に光明得たり、という顔をした。

「来て早々に申し訳もございませんが、

1つ頼まれ事をさせて頂いてもよろしくて？」

レイリーはそれに答えるより早く、自分のギルドカードを放った。慌ててそれを受け取ったアゲハが目をぱちくりとさせてレイリーを見やる。

「場所と相手を教えてくれ」

「あ、あの…！」

少女のうちの1人が声を出した。

「村から出て、左にずっといったところの溪流です。

そこで、おつきいクマが……」

「アオアシラですわ」

村長がフォローを入れる。

「最近、この近隣に頻繁に姿を見せるようになっておりましたの。溪流の水辺、もしくは木々が生い茂る森の中で良く目撃されておりました。

「お願いしてもよろしくて？」

「引き受けよう」

「ありがとうございます。報酬は」

「細かい話は後でいい。アリサ、行くぞ」

「持ち物は銭湯セットだけでいいのかしら？」

「お前が洗面用具で青熊獣を倒せるというのなら、それで構わない

だろっ」

言うが否や、レイリーは宿に引き返した。

「来て早々、慌ただしい村で申し訳もございません。

どうか、お気をつけて」

アリサがそれに続こうとしたところで、アゲハが頭を下げた。一瞬、きよとんとしたアリサは、直ぐに勝気な笑みを見せて、皆が居るこの場でこう告げた。

「早めにギルドへ連絡しておいて下さい。

依頼達成した後、ギルドの後始末役が来るまでの間って、結構暇なんです」

レイリーたちは宿に戻ると、急いで得物に手を伸ばした。とは言え、まだギルドの引越業者はこの地に辿り着いては居ない為、ここに来る時に携帯していた装備しかない。レイリーは、昔ポツケ村で一角竜を倒した時に貰った片手剣『マスターブレイド』と、黒角竜の素材から作られた『角王弓ゲイルホーン』。完全に攻撃力重視の武器“両方”を体に装着した。アリサは、かつてその功績をギルドから称えられた時に受け取った双剣『ギルドナイトセーバー』。水属性を持ちつつも、単体攻撃力としては申し分無い双剣を背中に装着した。

「いくか」

「ええ」

言葉少なげに、両者は宿から飛び出した。

美しく澄んだ水が流れる。鮮やかに紅葉した木々が揺れる。遠くでは鳥の鳴き声が聞こえてきた。溪流。他の地ではあまり見られないその美しさに、アリサはしばし目を奪われた。

「素敵なところね。ゆつくりと散歩を楽しみたい気分だわ」

「依頼が熊狩りじゃなけりやな」

レイリーは先ほどから意識を集中して、辺りの気配を探っている。ぼんやりと、自分たち捉える視線を感知した。その視線の先を辿って見る。

「ジャギイたちだな」

「？ 初めて聞く名ね。牙獣種かしら？」

「鳥獣種だ」

「ああ。ようはランポスって事ね」

「あまり甘く見ない事だ。」

奴らは賢く、強い社会性を持って大集団で生活するって話だ。

下手を打って連携を取られれば、苦戦するやもしれん」

「平気よ。貴方が負けるハズないもの」

無責任な信頼を押しつけられてしまった。

「でも、そう数は居ないわよ」

「そうだな。居て4、5匹か。だとすると

セリフを言い切る前に跳躍した。アリサも逆方面に跳んで逃げる。

先ほどまで歩いていた場所には、既に戦闘態勢に入った5、6匹のジャギイたちがおり、こちらを見て唸っていた。

「なるほど。挟み撃ちだったか」

獣相手に感心しながら、片手剣に手を伸ばすと、

「待って、レイ。私にやらせて頂戴」

それを遮るかのようにアリサから声が掛かった。

「別に構わないが。結構な数がいるぞ？」

「問題ない」

そう言いながら、アリサは背中に掛けていた2本の剣を抜いた。薄い水色と薄い紫色。相反する2つの輝きを放つそれを構える。好戦的な空気を感じ取ったらしい。ジャギイたちはアリサに目を付けた。それを見て、アリサは妖艶な笑みを浮かべた。

「おいでなさい。私の剣技、見せてあげる」

瞬間。ジャギイたちは一斉にアリサに跳びかかった。それを目で捉えながらも、アリサは引こうとはしない。剣をゆつくりとした動作で掲げる。

「舞い散って？」

乱舞・“乱れ桜”」

アリサを中心として、突如おびただしい量の鮮血が飛び散った。

頭。腕。足。尾。様々な部位がバラバラになって宙を舞う。もはや、どれがどの部分に繋がるのか見当が付かない数のジャギイのパーツが、アリサの周りに転げ落ちる。茂みに隠れていたジャギイが次々に飛び出してくる。それに応戦の構えを取ったアリサを尻目に、レイリーは背中からゲイルホーンを抜いた。ギシギシと力強い音を立て弦を引く。

「ちよつとレイー!!」

こいつ等は私の獲物よ!!」

「ああ。そいつ等はやるよ」

そう言った瞬間。圧縮していた力を解き放った。ガオンツという凄まじい音と共に放たれた矢は、アリサとジャギイたちが争う場所を素通りし、茂みの中に突き刺さる。ドキュツツという湿った音が響いた。

「え？」

思わずジャギイたちも動きを止める。茂みから飛んできた“モノ”が、アリサの足元へ転がった。

「……………鳥獣の首」

「言ったはずだ。そいつ等は“強い社会性を持ち大集団で生活する”と。」

社会性のある集団には絶対必要なものがある。

規律を守らせ、指示を与えるリーダーだ」

尚も動かぬアリサとジャギイを一瞥して、レイリーは再び弓を構えた。

「ドスジャギイ。こいつが死んじまったんだ。」

今日でお前等の社会も崩壊だな」

複数の矢を弦に装填して引き抜く。ががががつというけたたましい音と共に、アリスの周りを囲うジャギイたちが、血飛沫を撒き散らして消し飛んだ。

「まあ。規律が無くなって崩壊するんじゃない、文字通り誰も居なくなつて崩壊するんだがな。

いや、この場合は消滅、か？」

そう言いながら、レイリーはゲイルホーンを仕舞う。

「何時までつつ立ってんだ。いくぞ」

「……………いつから気付いてたの？」

「別に、最初から居場所に気付いていたわけじゃない。

お前を襲うジャギイたちの声の中に、1つだけ違う音色があった。それを聞き分けて発信源を探しただけだ。

もついいだろう。今日のメインは熊狩りだ」

レイリーに続いてアリスが歩き出す。ギルドナイトセイバーを仕舞いながら、アリスは改めて痛感せざるを得なかった。自分は未だにレイに追いつけていない。レベルが違いすぎる、と。

草木を掻き分けて森に入る。先ほどまでは水辺を探索していたのだが、居るのはジャギイの残党ばかり。早々に青色の“合図玉”（これはギルドにモンスター討伐を知らせるもの。上空へ立ち上る煙によって、アイル・ギルド・サポーターズ『A・G・S』の面々に場所を示す。合図玉には2種類の色があり、赤が依頼されたクエスト完了の知らせ。青がそのクエスト過程で、別のモンスターを討伐した時に用いられる。白や黒の色を使わないのは、モンスターとの戦闘によって生じる火災などの煙と混同しないようにする為。）を放つて場所を移す事にしたのだ。「こんな広いフィールドで熊一頭探すなんて無茶だと思うんだけど？」

「黙つて周囲の気配を探れ」

「貴方じゃないんだから、そんな芸当できないわよ」

レイリーが“異端”と称される理由は、何も武器装備を2種類同



時携帯できるからだけではない。(それだけでも十分に凄い事なのだが。)レイリーは生き物の“呼吸”を肌で感じる事ができる。呼吸を感じるという事自体は、大して凄い事では無い。人や獣の息遣いくらいなら、誰でも感じる事が出来る。ただ、レイリーは一般人が捉えるよりも遙かに多い情報を、そこから感じ取ることができた。それは、その生き物の気配に所作、そして精神状態等にまで発展する。思考が読めるところまでは超能力者ではないのでできない。が、「次はくをしてくるかも」くらいなら読める。これだけの情報が得られるだけでも、戦いの中では大きなアドバンテージとなり得る。探知に先読み。それが“異端”と言わしめる程の戦闘力を有する、レイリーの1つの能力だった。

「日が暮れるまでに終わるんでしょうね。」

「こんなの」

「しっ！ 黙れ」

アリサの言葉を遮り、レイリーが木の陰に身を潜めた。アリサも黙ってそれに倣う。

「居たの？」

木の陰から、こっそり前方を伺おうとするアリサに、レイリーは頷いた。

### 第3話 青熊獣の襲来（後書き）

こんばんは、豊島です。

第3話を掲載させて頂きました。

ご意見ご感想、お待ちしております。

## 第4話 “サンプル”

「……あれがアオアシラ」

「その様だ。」

実物を見たのは初めてだが、間違いようが無いな」

明らかに他の熊とは違う、厚い甲殻。殺傷能力に優れる腕の刺。何よりその美しい青毛。青熊獣は2人に見られているとも知らずに、せつせと八チの巣から八チミツを抜き出すのに精を出している。

「ふむ」

特に問題は無さそうだと、ゲイルホーンに手を伸ばしたところで、アリサに制された。

「何だ？ また私に任せてじゃないだろうな？」

「違うわ。」

せつかくだし、アイツがどういう動きをするのか見たいの。

軽く戦ってみない？」

「おいおい。ここで頭をぶち抜けば直ぐ済むんだぞ」

「それは分かってるわ。」

けど、この地に暫くの間留まるのなら、今後も相対する可能性が高い。

その時の、万が一の為に。出来るうちにサンプルは取っとくべきでしょ？」

「……一理あるな」

アリサの意見にレイリーが頷く。

「ならそうするか。初めの一発は、牽制程度に留めておこう」

「そうして」

アリサに答え、レイリーは改めてゲイルホーンを抜いた。矢を弦に掛け、ゆっくりと引く。ぎしぎしと音を立てるが、極力鳴らぬようスピードを落とした為、アオアシラには気付かれずに発射の準備が整った。

「あいつの持つている八子の巢を打ち抜く。

後は好きに応戦しろ。俺も勝手に動く」

「了解」

アリサの返事を聞くと同時に、レイリーは矢を打ち放った。

アオアシラは思わず引っくり返ってしまった。なにせ、突然手に持っていた八子の巢が吹き飛んだのだ。中に詰まっていた八チミツが弾け飛び、アオアシラの全身と周囲の木々をべとべとに汚す。アオアシラはすぐさま態勢を整え、自分に攻撃を浴びせた方角を見る。そこには隠れもせず、堂々と立ち尽くす1人の人間が居た。

「グオオオオツ!!!」

怒りの咆哮を上げる。その威嚇を受けながらも、レイリーは怖気づいた表情を見せる事無く、むしろにやりと顔を歪めた。端正な顔立ちのレイリーがするその表情は、同じ人間なら恐怖を覚えてしまうであろうものだったが、既に怒り心頭なアオアシラはそんな事は構わずに狙いを定め、レイリー目掛けて突進して来た。

「食事中失礼。」

確かに、最初にお前を狙ったのは俺だが、

もう少し周囲に気を配った方がいいと思うぞ？」

そのセリフを吐いた直後、アオアシラの左サイドからアリサが襲い掛かった。

「はあっ!!!」

双剣でアオアシラに斬りかかる。それに寸でのところで気付いたアオアシラは、甲殻が発達した腕の部分で受け止めた。ガキンツと鈍い音が鳴る。やはり強度はなかなかのものらしい。刃は食い込むことなく、押し戻された。

「やっぱり、硬いわね」

アリサに狙いを変えたアオアシラは、2本足で立ち上がり、その両の手をアリサ目がけて振り回し始めた。アリサはそれを最小限のステップで回避しながら、再び双剣を構える。

それを見計らって、レイリーはアオアシラの右後ろ足に照準を定め、ゲイルホーンを打ち放つ。ザシュツと肉を裂く音が鳴る。鮮血が飛び散り、痛みにアオアシラが唸る。身体を支えていた片足を貫かれ、アオアシラはよろよろと後退した。

その一瞬の隙を突いて、アリサが再び斬りかかった。

「演舞・“舞夜桜”<sup>まごひやく</sup>」

アオアシラの甲殻が発達していない部位。すなわち青い体毛が生い茂る部分のみを的確に捉えた刃が、幾重にもアオアシラを襲った。ズババババツと音を立て、アオアシラの至る部位に深い傷を付けていく。

「む！ アリサ！！ 下がれ！！」

レイリーの声を聞き、アリサが後ろへ跳躍する。ぎりぎりのところで間に合った。アオアシラが至近距離にいたアリサを、その刺の付いた腕で抱き込もうとしていたようだ。対象に避けられ、そのままバランスを崩したアオアシラは、前のめりに地面に倒れる。

前足を立て、再び立ち上がろうとしたところをレイリーの無数の矢が貫いた。腕を覆う硬い甲殻が、一点集中の攻撃を受けて砕け散る。軸足の力を失ったアオアシラは、横に転倒した。

「決める！！ アリサ！！」

「終劇・“神楽”<sup>かぐら</sup>」

アリサの目にも止まらぬ双刃は、アオアシラが抵抗を見せるより先に、その喉を切り裂いた。

「カツ！！」

叫び声を上げることも適わず、アオアシラは絶命した。

合図玉を空に向けて放つ。一直線に空へ向かって伸びたそれは、鮮やかな赤い煙の柱を生み出していた。

「討伐完了」

空を見上げながらレイリーが呟く。

「レイ。貴方素材は剥ぎ取らなくていいの？」

砕けた甲殻や爪、そして青い毛を回収しながらアリサが問う。

「必要無い。この熊から良質な物が作れるとは、到底思えん」

「いろいろな装備品が作れるって、凄く魅力的だと思っただけど」

「欲しいなら俺の分も回収して構わない。」

お洒落には興味無いからな」

「あら残念」

そう言いながら、アリサは持てる分だけの素材をかき集め始めた。

しばらくしてAGSの面々が現れた。赤いギルドの制服に身を包

アイルー・ギルド・サポーターズ

んだアイルーを先頭に、青い制服を着たアイルーたちがぞろぞろとやって来る。レイリーとアリサの前に立つと、赤い制服を身に着けたアイルーが一礼した。

「お仕事ご苦労様ですニヤ。」

私はユクモ村周辺のサポートを担当するコットンと申しますニヤ。

ユクモ専属ハンター・レイリー様とアリサ様。

以後よろしくお願ひしますニヤ」

「ああ、よろしく」

「よろしくね」

お互い挨拶を済ませる。それと同時に、後ろに控えていた面々がアオアシラに群がった。手際よく配送の処理をしていく。それを見つめていたレイリーとアリサに、コットンが声を掛けた。

「そういえば、先ほどドスジャギイも討伐されましたかニヤ？」

「ああ。したな」

「勝手ながら、そちらも既に処理をさせて頂きましたニヤ。」

「ついではその事で1つギルドからお願いを預かっておりますニヤ」

「何だ？」

レイリーの問いに一礼して、コットンはギルドからの「お願い」を話し始めた。

「遺体処理の際、ほぼ無傷のドスジャギイの頭も回収致しましたニヤ。」

無傷の生首は非常に貴重ですニヤ。

出来れば1500Zほどで譲って頂けないかと」

「構わん」

「ありがとうございますニヤ。」

では、後ほどユクモ村の集会浴場へお越し下さいニヤ。

お代はそこでお渡ししますニヤ」

「分かった」

レイリーはそう答えると、座っていた切り株から腰を上げた。

「じゃあ、後の処理は任せていいな？」

「はい。確かに承りましたニヤ」

再度一礼するコットンを見届け、レイリーはアリサを呼んだ。

「帰るぞ、アリサ」

「ええ、分かったわ」

ずっしりという表現がぴったりくるほどの袋を抱え、ふらふらとアリサも立ち上がった。それを見かねたレイリーは呆れた表情を隠そうともせず、少し強引な所作でその袋を奪い取った。

「自分が運べない程の量を剥ぎ取るな」

「ごめんなさい。でもね。」

私、レイが優しい事を知ってるの」

「ほざけ」

レイリーとアリサは並んで帰路に着いた。

「クエスト完了。依頼内容の完遂を確認致しました。」

レイリー様、ありがとうございます」

アゲハが深々とお辞儀をする。そして自分が座っている席の横に置いてあった布袋を手に取り、レイリーに差し出した。

「こちらが報酬金となります。」

お受け取り下さいませ」

「ああ」

カシャンと音を立てて布袋が手渡される。

レイリーはその場で袋の中身を確かめ、顔をしかめた。

「金額が少々多いようだ。」

あのレベルの牙獣種で、この金額は割に合わんな」

アゲ八に向かって布袋を差し出す。その仕草に、アゲ八はクスリと笑った。

「あらあら。」

これまで幾人ものハンター様をお相手して参りましたが…。

報酬金が多いという苦情は、初めての経験ですわ」

他の人間は知らん。

ともかく、これだけの金額は受け取れんな」

「いいえ、少し理由をお聞きになって？」

突き返そうとするレイリーを制し、アゲ八がにこやかに笑った。

「確かに。」

アオアシラ一頭の討伐だけでは、その金額は少々多いです。

ですが、貴方はその道程でドスジャギイも討伐されましてよ？」

「知っている。」

だが、依頼内容以外の成果を判断するのはギルドだ。

あんた等村の人間がする事じゃない」

「ええ、存じております。」

ですから、それ一回きりですわ。

今回は到着後間もないところで無理を言っただけで依頼した内容なので  
す。

少々のおマケとして、お受け取り下さいませ」

「……………そうか。ならば有難く頂戴しておこう」

「はい。クエスト達成お疲れ様でした。」

今度こそ、当村自慢の集会浴場をお楽しみ下さい」

「ああ、そうさせてもらおう」

レイリーはアゲ八に別れを告げ、アリサの待つ自宅へと戻って行  
った。



「お帰りなさい」

レイリーが自宅に戻ると、アリサが駆け寄って来た。

「それで？ 報酬金はどうだったの？」

「予想以上に貰ったさ。」

まあ、あの程度のクエストにしては。だがな」

そう言っアゲ八から受け取った布袋を、テーブルに置く。

「青熊獣の素材で何か作りたいなら、この金を使っていいぞ」

「遠慮しておくわ。私だってお金くらい持ってるもの」

「そうか。じゃあ、いつも通りこの報酬金は半分ずつでいいな？」

「ええ」

レイリーからお金を受け取る。アリサはそれを大切に自分の財布に仕舞った。

「さて。じゃあ集会浴場へ行ってみるか」

「そうね。」

そう言えば、さっきギルドのアイルーから交渉を持ちかけられてたわね」

「ああ。」

ま、それは帰りで大丈夫だろう。行くぞ」

「わかったわ」

レイリーとアリサは洗面用具を手に持ち、ようやく浴場へと足を向けた。

## 第4話 “サンプル” (後書き)

ご意見感想頂けると嬉しいです。

## 第5話 集会浴場

「ようこそいらっしやいましたニヤ!!」

番台に坐したアイルーは、その手に握っていた扇子を広げ、開口一番そう叫んだ。

「お話は何っておりますニヤ。」

当村専属ハンターのレイリー様にアリサ様!!

私はこの集会浴場の番台を務めるアオバと申しますニヤ。

以後よろしくお願いしますニヤ!!」

「よろしく」

「よろしくね」

レイリーたちの返答を聞き、アオバが頷く。

「当浴場は24時間営業ですニヤ。」

いつでも気が向いた時、ごゆるりとお寛ぎ下さいニヤ。

また、当浴場は混浴となっておりますニヤ。

こちら番台の更衣室にて湯浴み着にお着替えの上、ご利用下さい

ニヤ

「わかった」

「あら残念。私はレイとなら裸の付き合いでも良かったのに」

しれっとそうのたまうアリサに、レイリーは白い目を向けた。

「聞いてなかったのか? “混浴”だ。」

お前が他の男どもにも痴態を曝け出したければそうすればいい」

「貴方以外に見られるなんて死んでも嫌よ」

「……………ならつべこべ言わず着替える」

もはやつつこむ気力も失せ、レイリーはそれだけ告げると更衣室に入る。アリサもそれに倣い、唯一男女で分かれている場所である更衣室に入ってしまった。

お互い湯浴み着姿で更衣室を出る。そこでアオバから声が掛かっ

た。

「当浴場では、皆様に楽しんで頂けますよう、色々なサービスをご用意してますニヤ。

晩酌セツトにガーグアのオモチャに浮き輪。

お好きな物をお供にいかがかニヤ？」

「……………普通に晩酌セツトだけくれ」

「あ、私ガーグアのオモチャで」

「おい」

ウキウキとオモチヤを受け取るアリサを見て、レイリーは本日何度目か分からぬ溜息を付いた。

番台を抜けて温泉に足を踏み入れる。美しい青色の源泉に、思わずアリサは息を飲んだ。

「これは期待以上だな」

「そうね。それに誰も居ないわ。貸切ね」

2人でお湯に足を付ける。程よい温度を感じ、そのまま体を浸けた。

「良い湯だ。話で聞くのとは訳が違うな」

「そうね。あ、私が注いであげるわ」

レイリーが晩酌セツトに手を掛けたのを見て、アリサがそれを奪った。

「じゃあ、頼む。…………とと、それで十分だ。

お前にも注いでやる」

アリサが構えたお猪口に同じように酒を注ぐ。お互いに顔を見合わせ、こつんとお猪口をぶつけ合った。

「乾杯」

「今日もお疲れ様」

注がれた透明の液体を揃って飲み干す。その熱は、疲れた体に染み渡るように体内から広がっていった。

「ふう。うまい」

「ええ、そうね。はいレイ。お代わりよ」

「ああ」

レイリーが注がれた液体を再度飲み干す。それを横目で見ながら、アリサは先ほど拝借したオモチャを取り出した。確かにガーグアの形をしているが、どこかでこれの黄色いタイプを見かけた様な気がする。気のせいだろうか。ガーガー音を鳴らしながら水に浮かべて遊ぶアリサを見て。レイリーは何となく、自分の心が穏やかになるのを感じた。

「お、こりゃ旦那がた!!」

えらっしやい! ニヤ!

あっしはしがなないドリンク売りでござんすニヤ!」

レイリーたちが温泉に満足し、更衣室に足を向けたところで横から声が掛かった。

「こちら、特製ドリンクをお売りする、

ドリンク売り場でございます!

温泉といえばドリンク!

ドリンクといえば温泉!

ね? 旦那! ニヤ!」

「……それ何処のルール?」

「いや、そういうのは気分の問題だろう」

アリサの囁きに、レイリーが答える。

「旦那がたのお話は耳にしてませあ!

本日はお代は無しで! ニヤ!

ささ、グイツと一杯いつてくだせえニヤ!!」

そう言っってドリンク売りが2本のドリンクを差し出してくる。ラ

ベルには『ユクモミルクコーヒー』と書かれていた。

「有難く頂こう」

「ありがとう」

「これから臍原に頼んませあ!!」

ドリンクを有難く頂き、レイリーたちは着替えを済ませ、浴場を

後にした。

「おいおい、チミたち。こっちこっち」

番台から出て直ぐ、丁度真正面にある受付カウンターに座っていた酔っぱらいの老人が話し掛けてきた。

「何アイツ」

「よせ。おそらくギルド関連のお偉いさんだ」

「…うそ」

「嘘なんか付くか。」

あのカウンターはギルド出張所のものだぞ。

そこであんなデカい態度取れる人間は限られてる」

唾然とするアリサを放置し、声を掛けてきた老人の元へ寄る。

「チミが“異端”レイリーだな？」

ギルドでもチミの話題には事欠かんよ。

ひよひよひよ」

「…光荣だな」

酒臭い。既に相当酔っぱらっているようだ。

「んで？ そちらの麗しの御嬢さんは“可憐”アリサだなあ。」

まったく、有望な人材を困い損ねたと、ギルドのお偉いさん方は

お冠よお！！」

ぐいっつと酒を呷る。

「うい〜。」

さあて、アンっ！！」

「は、はい！！」

カウンターから、ちらちらとこちらを伺っていた受付嬢が立ち上がる。自分の座っていた椅子に躓いて転びそうになりながらも、呼んだ老人の元へと寄って来た。

「お、お呼びでしょうか」

「おうよ！！ レイリーたちに金を渡したってくれ！！」

「あ、はい！ 分かりました！！」

一度カウンターの裏に姿を消し、ごそごそと何かを漁った後、受付嬢が再び顔を出した。レイリーと目が合い、ぼつと顔が赤くなる。急に今までの3割増しであたふたし始めた。

「…どうかしたか？」

「い、いえ！ 何でもありません！！」

「……そうか」

思いつきり噛んでいるが、可哀想なので聞かなかった事にした。早く本題に入ってくれと切り出そうとしたところで、ぐいつと腕を引かれる。アリサの柔らかな胸の谷間に引き込まれ、レイリーは顔をしかめた。

「何の真似だ？」

「本題に入って頂戴」

レイリーを空気の如く無視して、アリサがそうのたまった。

「あ、え、え？」

「ええつと？」

受付嬢が老人を見やる。

「本題に入れっちゅうねん！！」

「は、はいいつ？！」

酒瓶を振り回して叫ぶ老人を避けながら、改めて受付嬢がレイリーたちに向き直った。

「わ、私はここの受付嬢として、新しくやってきましたアンと申します！」

「別に貴方の名前は聞いてないわ」

「ひっ？！」

「よせ。アリサ」

敵意剥き出しで威嚇するアリサを宥める。

「すまん。こいつ、たまに情緒不安定になるんだ」

「何よその言い方！！」

アリサが憤慨して叫ぶ。

「で、用件を話してくれ」

先ほどの趣向返しとばかりに。今度はレイリーがアリサを無視して話を切り出した。

「は、はい。」

先ほどAGSから、アイル・ギルド・サポーターズドスジャギイの頭の納品を受け付けました。

こちらが礼金です。お受け取りください」

ギルドの紋章入りの巾着袋を受け取る。その場で中身を確認した。

「1500z。確かに確認した」

「ありがとうございます。」

そして、こちらがレイリー様のギルドカードです。

お返し致します」

自分のギルドカードを受け取る。裏面を見てみると、今日の情報が新しく加えられていた。それを確認して、懐へと仕舞う。

「あの、あとアリサ様も本日クエストに参加されたんですね？」

よろしければギルドカ

ひっ?!」

「アリサ」

「きゃ?! あんっ!!」

ちょ、ちよつとレイ!!」

相も変わらずアンを威嚇するアリサを押し留め、彼女が着ていた服に手を突っ込む。驚きの表情を見せるアリサを無視し、ギルドカードを引き抜いた。

「クエスト内容と討伐対象は俺と同じだ。」

更新を頼む」

「……あ。は、はい」

自分が着ている受付制服よりも真っ赤な顔でそれを受け取り、アンは更新の手続きを取る為、再び奥へと引っ込んでいった。それを見届けて、レイリーはアリサを睨んだ。

「いったいどういふつもりだ？」

お前が変に威嚇するからややこしくなるんだ」

「貴方、私が面倒くさい女だって思ってるでしょ」

「ああ、その通りだ。分かっているなら気を付けろ」



「ふんっ」

ツンと顔を背けるアリサに物申そうとしたところで、再び老人から声が掛かった。

「ひよひよ。」

まあ仲が良くてなによりだ。

これからはここの出張所でもちよくちよくクエスト受けてくれやあ。

チミたちなら既に上位行けるんだからよう!!」

そう言つて老人は酒瓶を、カウンターの奥に座るもう1人の受付嬢に向けた。レイリーとアリサがそちらを見やると、座っていた受付嬢はゆっくりと一礼する。どうやらこちらは新入りではないらしい。物腰が凄く柔らかだ。

レイリーがそんな失礼な事を考えていると、カウンターの奥からぱたぱたと忙しない音が響いてきた。奥からアンが戻ってくる。

「お、お待たせ致しました。」

こちらがアリサ様のギルドカードになります」

「ん」

素っ気なくアリサが受け取った。受け渡しの際、指先が少し触れた時、びくつとアンの肩が震えたのが分かった。早々にアリサに苦手意識を抱いてしまったようだ。

「クエスト達成ご苦労さん!!」

んじゃ、またな!!」

「ま、また、お願いします!!」

「又のご利用をお待ちしております」

三者三様の見送りの言葉を受け、レイリーとアリサは連絡用通路から自宅へと戻ることにした。

ぐっぐつと弦のしなりを確かめる。レイリーはゲイルホーンの整備を終え、用意されていた装備用具入れにそれを立て掛けた。

「終わったの?」

それを見ていたアリサが尋ねる。

「いや、今度はこつちだ」

レイリーはマスターブレイドに手を伸ばす。

「貴方、今日それ使わなかったじゃない」

「外へ持ち出した以上、手入れは怠るな」

お前も自分の物をきちんと手入れしておけ」

「私の剣、水が出る仕様だから平気よ」

付着した血糊なんてその場で落ちるわ」

「……そういう問題じゃないだろう」

「研いだわよ。とつくに」

「……なら最初からそう言え」

レイリーはマスターブレイドから目を離す事無く、そう吐き捨てた。

「ねえ。レイ？」

「何だ」

急に艶っぽい声を出すアリサを気にも留めず、レイリーは剣を研ぎながら聞き返した。

「一緒に寝ましようよ。ベッドの方が温かいわよ？」

私が温めてアゲル」

「寝言は寝て言え」

「けち」

「……何の話だ」

整備を終えた剣を鞘に納め、装備用具入れに立て掛ける。そのまま部屋の明かりのところへ歩み寄った。

「消すぞ」

「いらっしゃい、レイ？」

アリサの発言に耳を傾ける事無く、レイリーは部屋の明かりを消した。

第5話 集会浴場（後書き）

ご意見ご感想頂けると嬉しいです。

## 第6話 アクシデント

耳元で聞こえる安らかな寝息でレイリーは目を覚ました。身体は一切動かさず、目線だけでその音の発信源を捉える。そこには、昨日ベッドを譲ってやったにも関わらず、わざわざ自分用の寝袋を引っ張り出してきたらしいアリサが、レイリーの横を陣取って眠っていた。朝日を受けて輝きを放つ金色の髪が数本、アリサの綺麗な顔に掛かっており、女性特有の色っぽさを醸し出していた。

レイリーはむくりと上半身を起こすと、アリサを起こさぬようそと寝袋から這い出し、簡単な身支度を済ませる。音を立てぬよう注意しながら自宅の扉を開け、外へ出た。

「あら、お早いですのね。」

「昨晚は良くお眠りになれました?」

「ああ。お陰様でな。いい宿を貸してもらった」

既にアゲハは、彼女の定位置と言っても過言ではない、いつもの椅子に座って紅葉を眺めていた。

「アンタこそ早いな。」

「村長というのはこんな時間に起きてないといけない職なのか?」

「もちろんです」

アゲハは即答した。

「この時間。既に村の男は山へと入り木を切り、畑を耕し、食料を捕える。」

女は炊事に洗濯、そして掃除。

皆が働いているのに、自分だけが楽をしてはなりません」

「それは皆が生きる為に行っている事だろう」

「そうです。そしてそれが村の繁栄に繋がる。」

その一端の利益を頂いている以上、それは私の為でもあるのです」  
「立派な考えだ」

レイリーはアゲハの完璧過ぎる回答に手を上げ、降参の意を示した。

「それで？」

レイリー様はどのようなご用件で？」

「今日、ギルドから引越しの品がここに届く予定になっていてな。軽く様子を見に出てきたんだが、早過ぎたな」

「ああ。その件でしたら私も伺っております。」

「ギルドからは、本日の昼過ぎが到着予定時刻だと」

「そうか」

「……ところで、レイリー様？」

「何だ？」

「どことなく伺うような声色で問いかけるアゲハに先を促す。」

「昨日ユクモ村へ来られた際、」

「ジンオウガと対峙されたなんて事はありませんでしたよね？」

「……どこからその情報を聞きつけた」

「こちらに物資を配送していたアイルーからですの。」

「旅人を2名村に送る際に襲われた、と」

「ああ、なるほど」

納得した。確かに、あの場に居たのは2人と1匹。四六時中傍に居るアリサが漏らして無いという事は、消去法であと1匹しかない。

「そうだな。確かに対峙した。」

「が、戦ってはいない。すまないな。状況が悪かったんだ」

「いえ、決して責める意図でお聞きしたわけではありませんので。」

「そうですか。よくぞご無事でお着きになられましたね。」

流石はレイリー様。この村にお呼びしたのは間違いでは無かったようです」

「感心したようにアゲハは頷いた。」

「いや。あの時は奴に闘争心が無かったからに過ぎない。」

「本気で襲ってきていたら、結果は違つたらう」

「その場その場の運氣も、ハンターの実力の1つですわ。」

防具の中ではそういった類を上げる物も存在するようですし」

「金火竜の話をしているのか？」

希少種にはまだお目に掛かったことはないな」

「そう。ゴールドルナ・シリーズですわね」

「あれを生産出来た輩は、ハンター史上まだ3人だけのはずだ。」

そういった能力を上げるといふ話は只の逸話だと思っていたが」

「少なくとも、ご利益がありそうな色はしてましてよ？」

「はは。それには同感だ」

「そうそう。今日の夜は、空けておいて頂けませんこと？」

ユクモ村の皆が、貴方たちの村入りを祝いたいと申してますの」

「ほう。それは有難いが」

「村長！！」

レイリーとアゲ八が談笑していたところに、突如声が掛かる。2人してそちらの方を見やると、村人がこちらに向かって駆け寄ってくる場所だった。

「どうかなさったの？」

その只ならぬ気配を感じ取り、アゲ八が腰を上げる。ここまで走って来たのだらう。村人は、息も絶え絶えに汗を拭くと、村長を見やった。

「こ、古龍観測隊の気球船が、救難信号を発しているのを見掛けたんだ！！」

どうすりゃいいのかと、ここまで戻ってきたんだが…」

「まあ！ この近隣に古龍が？」

「いや、それは無いな」

慌てた様子のアゲ八と正反対に、冷静な表情で話を聞いていたレイリーはそう答えた。

「古龍の周囲に及ぼす被害は甚大だ。」

目視できる位置で観測隊が救難信号を上げているなら、

この村周辺がこれほどまでに静かでいられるはずがない。

おい、その救難信号を出していた観測隊の居る方角はどっちだ」  
「あ、あっちだ」

村人が指差した方角を見て、レイリーは舌打ちした。

「……………やはり頼むべきでは無かったか」

「と、申されますと？」

怪訝な顔でレイリーを見るアゲハに、向き直る。

「済まないが、少しの間村を空ける。」

おそらく観測隊が目撃したのはギルドの引越し部隊が襲われたところだ」

「おいおい、まさかアンタ行く気か？」

「そのつもりだが？」

「あの一帯は溪流を抜けたさらに先だ。」

地面の大半が水で沈んじまってる水没林の領域だぞ」

「問題ない」

それだけ告げると、レイリーは踵を返した。

「レイリー様」

後ろから声を掛けられ、立ち止まる。

「お気を付けて」

「ああ」

自宅へと戻る。アリサはまだ夢の世界から帰還していないようだ。一度寝るとなかなか起きれない。これはアリサの数ある短所のうちの1つだと、レイリーは理解していた。

急いで身支度を済ませる。ユクモノの服に袖を通し、ゲイルホーンとマスターブレイドを定位置に装着した。ギルドが襲われた現場にまだモンスターが居座っているとは考えにくいが、万が一の事もある。レイリーは準備を終えると急いで自宅から飛び出した。

「兄貴!!!」

ユクモ村の正面玄関である鳥居まで駆け下りたところで、自称鬼

門番・ラクロウから声を掛けられた。

「お前か。」

「済まないが急いでるんだが」

「分かっております!!」

「これをお使い下さい!!」

ラクロウが指差した方を見やると、ガーグア2頭が引く台車が控えていた。

「借りていって構わないのか？」

「村長からのお達しです!!」

「問題はありません。」

「伝言で、無事お帰り下さい、と」

「分かった」

レイリーは急いで台車に乗ると、ガーグアに繋がれた手綱を引いた。ガアガアと鳴きながら、ガーグアが走り出す。後ろからラクロウが叫んだ。

「兄貴!! お気を付けて!!」

「兄貴はやめろ」

レイリーは振り向きもせず、それだけ吐き捨てて村を出た。

(……………何だ? この異様な気配は)

レイリーは溪流に入ってすぐ、警戒を高めた。先日訪れた時より、周囲に落ち着きがないように感じられる。虫や小鳥たちの“呼吸”からも、ざわめきを感じ取った。

「目的地に着く前に、一戦交える羽目になるかもな」

レイリーはそう呟くと、後ろ手にゲイルホーンを抜いた。

「ん?」

その直後、前方より慌しげな足音が聞こえてきた。それも1つや2つじゃ無い。レイリーが目を凝らそうとした直後、遙か前方の茂みから複数のブルファンゴが飛び出してきた。“猪突猛進”の名の通り、一直線にこちらへ走って来ている。



「こちらも道を譲ってやる程、時間に余裕は無いんだが……」

そう言いながらゲイルホーンの弦を引いていたレイリーは、牽制矢を放った。ブルファンゴたちの手前に着弾したそれは、軽く地面を抉ったものの意図した効果は発揮せず、ブルファンゴたちは容赦なく突っ込んで来る。

それを見たレイリーはゆっくりと息を吐くと、

「警告はした」

ゲイルホーンから無数の矢を打ち放った。生々しい音を立て、直線状に次々とブルファンゴの顔に突き刺さる。貫く矢の勢いに負けたブルファンゴたちは、顔を貫かれたまま後方へ吹っ飛んでいく。全てを狩るつもりは無い。ただ自分の進む直線状にいる奴を始末すればいいだけだ。

しかし、向こうは完全に戦闘態勢に入ったらしい。突如行先を変更したかのように、レイリーが乗る台車を目掛けて襲って来た。

「仲間の敵討ちができるだけの知性も力も、

お前たちにあるとは思えないんだがな」

レイリーはそう呟くと、新たな矢に手を掛けた。

「失せる

さみだれ  
“五月雨”」

おびただしいまでの鮮血が舞う。文字通り目と鼻の先まで詰めていたブルファンゴたちは、その残酷なまでの矢の量と威力に、片っ端から消し飛んだ。怯えて足を止めようとしたガーグアの手綱を強引に引き、走る事を強制させる。レイリーが作り出したブルファンゴたちの群れの抜け道を通り、台車がそこから抜け出す。生き残ったブルファンゴたちは急ブレーキを掛けてリターンし、レイリーが乗る台車に、再度アタックを掛ける構えを見せた。

が。そこまで。走り出すよりも早く、レイリーの弓がブルファンゴたちを打ち抜く。20頭近くいたブルファンゴの群れは、瞬く間にレイリーによって全滅させられた。

「悪く思っな。少々急いでてな」

それだけ告げて前方に視線を戻したところで、レイリーは顔をし

かめた。

「……………やっぱり、道は譲ってやるべきだったか」

レイリーの視線の先。そこにはブルファンゴよりも一回り大きく、体毛を逆立てながら威嚇する、猪たちの長が居た。

第6話 アクシデント（後書き）

感想頂けると嬉しいです。

## 第7話 “チェイス”

手綱を引く。ガーグアに指示を出し、強引に台車の向きを変える。間一髪。あと少し反応が遅ければ、正面衝突していただろう。それほどまでに速く、ドスファンゴはレイリーとの距離を詰めてきた。

対象に避けられた事を悟ったドスファンゴは、素早く方向転換して再度突進を開始する。レイリーはそれを見て、ベルトからマスターブレイドを抜いた。鈍い音を立てて、片手剣とドスファンゴの牙が交わる。レイリーは力任せの突進に合わせ、うまく方向を変更させた。強引に軌道を逸らされたドスファンゴは、そのまま木に激突する。

レイリーを乗せた台車は止まらない。今のドスファンゴの衝突で多少揺らぎはしたものの、ガーグア2匹は転倒する事無く、なんとか立て直していた。それに対してレイリーは、心の中で賞賛を送りながらドスファンゴを見やる。

ドスファンゴは先ほどと同じ位置に居た。どうやら木に自慢の牙が刺さり、抜けなくなっているらしい。懸命に抜こうと足をばたつかせている。それを見たレイリーは、再度ゲイルホーンに持ち替えた。

「抜けた後、また襲われるのは面倒だ」

矢を打ち放つ。寸分違わず、矢は狙い通りに着弾した。木の側面を抉り、ドスファンゴに命中する。

「ブオオオオオッ」

悲鳴が轟く。遠目でも確認できた。どうやら牙が一本砕けたらしい。しかし、それと同時に突き刺さっていた木からも解放されていた。多少よろけたものの、態勢を整えたドスファンゴは、怒り狂いながら再びレイリー目掛けて突進してきた。

「……………まだ実力の差が分らないのか」

その行動に呆れ果てながら、レイリーはゲイルホーンの照準をド

スファンゴへ向ける。その直後、自分の近くで“呼吸の乱れ”を感じ取った。瞬間、新たな咆哮が左から放たれる。それに瞬時に反応したレイリーは、目で確認するよりも早く、ゲイルホーンを声にした方向へ打ち放った。丁度茂みから姿を現したそれは、突如襲い掛かった矢に反応できず、右目を貫かれて転倒した。

それを確認する事無く、台車に後方から接近していたドスファンゴの左前脚を打ち抜く。足の力を失ったドスファンゴは、そのまま右目を貫かれて転がっていたもう一匹のドスファンゴに躓いて倒れる。2匹が立ち上がるより先に、レイリーはそれぞれの頭に1発ずつ矢を打ち込んだ。的確に打ち込まれたそれは、両者の生命を奪い、そのままドスファンゴは動かなくなった。

「よりにもよって二枚看板の群れだったか。少し危なかったな」

2匹目が横から突如現れたのは予想外だった。反射的に放った矢が、2匹目のドスファンゴの目を的確に捉えられたのは、正直運が良かったとしか言えない。1発目であの勢いを殺せなかったら、おそらく台車ごと引っくり返されていただろう。レイリーは武器を仕舞いながら舌打ちした。

「ったく。余計な手間取らせやがって。目的地に着く前に矢が無くなっちまうかもな」

ガーグアは速度を緩めることなく走り続ける。途中、猪の群れに襲われるというハプニングはあったものの、概ね予想通りのスピードで進んでいた。徐々に湿度が高くなってくる。肌がじっとりとした空気を感じていた。

「……水没林か。ようやくだな」

ガーグアの走る音に水気が混じる。下を見ると、既に少量だが水が張っていた。

「さて、観測隊の救難信号は何処からだったのか……」

来る途中、それなりに空は気にしていたのだが、観測隊の飛行船

は目視で確認できなかった。村人の情報を元に、ひとまず水没林を目指していたものの、ここから先は一切の手掛かりがない。どうしたものかと考えていると、周囲から伺うような視線を感じ取った。

「…………正直。これ以上のトラブルはご免なんだが」

茂みをちよるちよるする姿を捉える。オレンジ色の身体が、一瞬見え隠れした。

「毒狗竜だな。」

「毒を貰うと厄介だが…」

こちらを伺っているだけで、特に戦意は感じられない。やろうと思えば、このままやり過ぎす事もできそうだ。それはレイリーにとって好都合だった。

「別に狩猟目的ではないからな」

レイリーは緊張は緩めぬまま、そのまま無視して先を急ぐ事に決めた。

しばらく進むと、ほのかに火薬の臭いがした。自然に漂ってくる類のものではない。レイリーは手綱を引いてガーグアを止め、台車から降りた。バシヤツという音を立てて、地面に着地する。水位は、足の踝近くにまで上がっていた。

「お前たちはここで待て」

ガーグアを軽く撫で、待機させる。左手でマスターブレイドの柄に触れながら、レイリーは歩き出した。激しい水の音が聞こえる。近くに滝があるのかもしれない。

緩やかな傾斜を上がり、草むらに入る。徐々に大きくなっていく水の音を聞きながら、レイリーは茂みを掻き分けて進んだ。水の音に比例して、火薬の臭いも強まる。レイリーが警戒の度合いを強めたところで、少しひらけた場所に出た。

ドドドツという音が響く。案の定と言うべきか。前方は崖になっており、水が流れ落ちていた。どうやら、ここはかなり高度が高いらしい。

その場に辿りつく前に、レイリーは不自然な痕跡を発見した。ところどころに地面に穴が開いており、周囲の草木が焦げている。その付近には、抉れた曲線の後もあった。その場に屈みこむ。

「……車輪のスリップした跡」

その抉れた先を見据える。その跡は、崖へ一直線に続いていった。

「……………おいおい。最悪だな」

レイリーは思わず舌打ちしながら立ち上がった。崖の近くまで歩み寄り、下を見下ろす。相当な高度だった。おそらく落ちれば即死だろう。霧が掛かってしまっただけ確認はできなかったが、恐らく絶望的だ。荷物も、それを運んでいたギルドの使いも。

そう思ったところで、レイリーはマスターブレイドを引き抜いた。背後から自分を伺う気配を感じ取ったからだ。

「誰かいるのか？」

レイリーは振り返りながらそう問うた。茂みのせいで姿は見えないが、少なくとも急に襲ってくる気配はない。レイリーはその隠れているモノに対して、“理性的な”気配を感じ取った。レイリーに声を掛けられ、茂みからゆっくりと姿を現す。

「……………お前は」

「……………あ、あの」

人間だった。青いギルドの制服に身を包んだ女性。しかし、ぼろぼろ。既に満身創痍といった風情だ。

両サイドを髪留めで結んでいるピンク色の髪は、葉っぱや泥で滅茶苦茶。ギルドの制服もところどころ穴が開いており、かなり斬新なファッションになっていた。ところどころで血が滲んでいる。女性はふらふらとレイリーに歩み寄って来た。

「……………き、救援でしょうか？」

「俺の物資のな」

「……………も、持ち主でしたか。」

申し訳ございません。実は

「それ以上言わなくていい。大体理解した」

つまり。落ちた、と。そういう事だ。レイリーはうんざりした表情で、寄って来た女性を見た。頭の高さはレイリーの肩くらい。背丈はかなり低い。女性というよりは少女といった方がしっくりくるが、ギルドの制服を身に纏っているのだから、それなりの年齢ではあるだろう。背中には、女性の背丈にも匹敵するであろう長さの太刀が装着されていた。前屈みになっている女性は、その背丈に不釣り合いなほどに成長している胸を強調する形となっているが、それは傷が痛む故の所作だろう。完全に無意識のようだ。

レイリーはそれを指摘することもなく、女性の顔を見据えて口を開いた。

「……………で？」

お前以外の隊員はどうした。

死んだのか」

「い、いえ」

どうやら違うらしい。女性は頭を横に振った。

「……………まさか、

物資運搬をお前1人でこなしていたわけじゃないだろうな？」

「ち、違います！！

い、いえ…。ち、違わないのかも」

「はつきりしろ」

「は、はいい。

実は、このエリアに来るまでは3人で行動していたんです。

けど、急に救援要請が入って…。

このエリアを抜ければ目的地は直ぐだからって、先輩たちが……………」

「それで、1人になったところを襲われたのか？」

「……………はい」

レイリーは苛立った感情を隠そうともせず舌打ちした。その所作にびくつと目の前の女性が怯える。

「も、申し訳ございません！！

大切なお荷物をつ！！」



「謝罪は後ほどギルドから聞こう。」

「アンタは別に悪くは いや、悪いか」

「す、すみませんすみませんすみませ あいたあっ!!」

「!!」

ギロリと睨まれ、女性はペコペコと頭を下げたところで、女性は悲鳴を上げた。どうやら急に体を動かした事で、傷に響いたらしい。

「痛むのか?」

「あ、いいいいえ!!」

「平気ですかっ つつっ!!」

両手を広げてぶんぶんやったところで、肩を押さえて蹲った。

「……はあ。」

「おい、アンタ。服を脱げ」

「……へ?」

「……ええええええええええっ?!」

急に大声で叫ぶ。その声にピクリとも表情を変えず、レイリーはもう一度口にした。

「聞こえなかったか?」

「服を脱げと言ったんだ」

「いやいやいや?! あの?!」

「ちよつと、イキナリそんなコト言われてもワタシわああ?!」

「五月蠅い女だ。」

「とつとと傷口を見せろ。」

「応急処置程度ならしてやるよ」

「へ? って、きゃあ?!」

「見かねたレイリーは、女性を強引に引き寄せ、服を剥いた。」

「ああああああああああのおお?!」

「じつとしてる。直ぐ終わる」

「そう言いつつ傷口を見る。肩にはぱっくりと裂けた傷があったが、そう深くは無いようだ。骨にも異常が無い。真っ白な肌に付着した鮮血は既に乾き始めており、少し黒ずんでいた。レイリーは腰のポ

シエットからフキンとガーゼ、そして包帯だけ取ると、軽く傷口の周りを拭いた後、ガーゼと包帯で素早く傷口を塞いだ。

「かなり鋭利な物で斬られたようだが、それが逆に幸いしたな。

この程度なら、直ぐに塞がるだろう」

女性から手を離してそう告げる。対して女性は口をぱくぱくさせたまま微動だにしない。

「何を呆けてる？」

「さっさと服を着ろ」

「……………あ、え？」

「きゃあ?!」

ようやく状況を飲み込めたのか、女性は真つ赤な顔で身だしなみを整えると、顔を俯かせて黙り込んでしまった。レイリーはそれを気にする事なく、使い終わった道具をポシエットに戻す。

「まあ、死人が出なかつたのは何よりだったな。

これからユクモ村に戻るが、アンタはどうする?」

「……………」

「おい」

「ひゃ、ひゃいつ!!」

レイリーの呼びかけに、女性は直立不動の姿勢を見せて応える。

「だからこれから」

「そこまで言いかけたところで、レイリーは言葉を切った。

「ど、どうされたんですか?」

レイリーを纏う空気が変わる。それを察した女性は、怪訝な顔をしてそう尋ねた。レイリーはそれに答える事無く、背中ofゲイルホーンを抜いた。

「何をするにしても、先にこいつを始末してからだな」

「……………え?」

レイリーの視線を辿って、女性が振り返る。

「ひっ?!」

「……………で、出ました」

それを目撃して、女性が1歩下がる。無意識の動作だろうが、モニスターを前にして、だ。ハンターの横に立つギルドのメンバーが身を引くとはどういう見だと思ったが、レイリーはそれを口にはしなかった。矢を弦に引っ掛けながら、レイリーは不敵に笑った。

「今、虫の居所が悪いんだ。」

やる気なら覚悟しろよ?」

レイリーの忠告に、ロアルロドスは咆哮でもって応えた。

第7話 “チエイズ”（後書き）

感想等、頂けると嬉しいです。

## 第8話 水獣の領域

相手の咆哮と同時に、レイリーは矢を装填した。照準をロアルロドスに合わせたところで、隣の女性が慌てたように話しかけてきた。「た、戦うんですか?!」

「他に良い提案があるなら言ってみる」

「そ、それは………逃げる、とか」

「走って逃げられる相手じゃない」

逃げたけりゃ、その崖から飛び降りる」

「し、死んじやいますよ?!」

「つまりは、そういつた手段じゃないと逃げられないって事だ」

「現実逃避じゃないですか!」

「それは今のお前だ」

話を早々に切り上げ、レイリーはロアルロドスに向けて矢を放った。

「きゃあ?!」

至近距離で矢を放たれ、その轟音で隣に居た女性が耳を押さえる。しかし、レイリーは女性には目もくれず、ロアルロドスの動きに目を見張った。放たれた矢は、ロアルロドスに命中することは無かった。右前脚を的確に打ち抜くはずだった矢は、ロアルロドスの機敏な動きによって、寸前のところで回避されていた。動きが予想以上に素早い。横に転がる事で、見事にレイリーの攻撃から身を守っていた。

「やるな」

遠距離では埒が明かないと早々に見切りを付けたレイリーは、マスターブレイドに構え直して駆け出した。それを見て、ロアルロドスも身構える。レイリーは目と耳に意識を集中し、ロアルロドスの次の動きに狙いを定めた。

「あ、危ないっ!」

女性の声と、ロアルロドスが一瞬にして接近してきたのはほぼ同時。体当たりの要領で突っ込んできた相手に、レイリーは跳躍でもって応えた。黄色い体が衝突する前に地面を蹴る。そのまま宙で態勢を整え、相手の襟巻の部分に手を突き、飛び越える形でやり過ぎす。

……つもりだったのだが。思いの他襟巻に手が食い込み、勢いが殺された為ロアルロドスの上で着地してしまった。ブシュツという音と共に水飛沫が上がる。

「流石、水獣と呼ばれているだけの事はある。

こつやつて水を蓄える事で、陸地での生活にも適応していたというわけだ」

ロアルロドスは頭の上に乗られた事に、相当な嫌悪感を抱いたらしい。左右に思いつ切り振り出した。

「うおつと」

レイリーはそれに振り落とされるより先に、マスターブレイドを襟巻に突き刺した。鋭い咆哮が轟く。痛みには耐えかねたロアルロドスは、そのまま横に転倒した。盛大に水柱が上がる。巨体が勢いよく倒れた事で、地面が揺れた。

レイリーはマスターブレイドを引き抜き、ロアルロドスから一度距離を取ろうと後ろへ跳躍しようとした。しかし、それより早く。ロアルロドスの口から吐き出された水弾が、レイリーの足を捕えた。

「おつ?!」

その特殊な粘液に足を掬われ、レイリーは仰向けに転倒する。その時には既に、ロアルロドスは態勢を立て直し、尻尾で薙ぎ払う構えに入っていた。

「……ちい」

一撃は覚悟せねばなるまい。そう思った瞬間だった。

「抜刀術・巻ノ型

“辻斬り”!!!」

ピンク色の物体が、突如レイリーとロアルロドスの間に割って入る。ズバンツと小気味の良い音を立て、ロアルロドスの尻尾が切断

された。レイリーを捉えていた尻尾の先端が無くなり、それを振り抜いていたロアルドロスの攻撃は失敗に終わる。尻尾と攻撃の手応えを無くしたロアルドロスは、バランスを失ってその場で再度転倒した。

「や、やりました！！」

「馬鹿野郎、気を抜くな！！」

「きゃんっ?!」

まるで褒めると言わんばかりにこちらを振り返った女性を一喝するが、間に合わなかった。ロアルドロスの尻尾の付け根の部分が女性に直撃し、2〜3m吹っ飛ぶ。それを好機と捉えたのか、すぐさま態勢を整えたロアルドロスは、標的をレイリーから女性に変更し、飛び掛かった。

「ひっ?!」

女性は思わず目を瞑る。その直後、バシュツという大きな音が響いた。次いで何か大きな物が近くに落ちる音。水飛沫が上がり、それが女性に直撃する。

「わっぷ?!」

「な、何ですか?!」

予想していた衝撃が来ない事に不信感を抱きながら目を開ける。そこでは数本の矢が襟巻に刺さり、痛みで身を振っているロアルドロスが暴れていた。

「恐怖で目を瞑るな。」

「瞑るのは、覚悟を決めた時だけにしておけ」

声が出た方に目を向ける。そこには、自分の直ぐ横で弓を構えるレイリーの姿があった。

「あ、あのっ」

「話は後にしてくれ」

その言葉を発した時には、既にロアルドロスは起き上がっていた。頬をぶくっとならませる様を見た瞬間。レイリーは、ロアルドロスが次に何をしようとしているかに気付いて舌打ちした。

「くそっ」

「きゃあっ!!」

レイリーが女性を抱きかかえたのと、ロアルドロスの口から無数の水弾が発射されたのは、ほぼ同時だった。先ほどレイリーの足元を掬ったものとは少々異なり、今度のは遥かに威力が高い。明らかに、相手を殺傷する為のものだった。

1人だったなら、回避できたかもしれない。しかし、その場に居た女性を庇うという選択をしたレイリーに、そのような芸当は出来なかった。背中に2発水弾の直撃を喰らい、女性をその場に置き去りにしたままで、後方に吹っ飛ばされる。

「かあっ?!」

背中からの強烈な衝撃に咽る。

「レ、レイリーさんっ?!」

庇った女性が遠くから自分を向いて叫んでいる。なぜ自分の名を知っているのか。そんな疑問が頭に浮かぶよりも先に、レイリーは震える手でゲイルホーンに矢を装填した。力の限り叫ぶ。

「伏せろっ!!!!」

そのセリフと同時に5本の矢を発射する。女性には、きちんと声が届いたらしい。その場で前屈みになって伏せた。その上を跳躍していたロアルドロスに全弾が命中する。突然訪れた激痛に耐えかね、ロアルドロスは空中でバランスを崩し、そのまま地面へと転がり落ちた。

「きゃあああああっ?!」

突然目の前に落ちてきた物に、恐怖の叫び声上がる。女性を飛び越える形で落下したロアルドロスは、そのままの勢いでレイリーの近くまで地面を抉りながら滑ってきた。

「……………あまり手間を掛けさせるんじゃないよ」

自分の足元まで滑ってきたロアルドロスに、レイリーがそう呟く。その時には既に、ゲイルホーンの照準がロアルドロスの頭を捉えていた。



「じゃあな」

その一言で、全てに片が付いた。

「だ、大丈夫ですか?!」

ロアルドスの死体を迂回するようにして女性が寄って来る。レイリーは咳き込みながら、ロアルドスを見やった。

「……………予想以上に苦戦した」

「す、すみません。」

私が足を引つ張っちゃってて…」

その言葉を聞きながら、レイリーは尻尾の断面を見る。

「良い太刀筋だ。」

これだけ見れば、かなりの技量を持っているはずなんだが…。

真面目にやってたのか?」

「…や、やってましたよう。」

ただ、私。モンスターとか相手にすると、どうしてもあわあわしてしまつて…」

じゃあ何でギルドなんかに入隊したんだ、という疑問を寸前のところで堪える。身体の所々が軋む。もしかしたら、骨にひびくくらい入っているかもしれない。レイリーが顔をしかめたところで、女性がおずおずと話しかけてきた。

「あ、あろう」

「……………何だ?」

「え、えと。た、助けて頂いてありがとうございます!」

私、ギルド見習いのマリーと申します!」

ぴよこんと頭を下げて自己紹介する。それでふと思い出した。

「……………そう言えば、何で俺の名を知っていたんだ?」

「え? 何でつて…」

マリーは首を傾げながら、そのくらい分かりますよという顔をしました。

「だって、先ほど配送荷物の持ち主だって言っただけじゃないで

すか。

配送先の方の名前くらい知ってますよ!！」

「配送する荷物は無くしたようだがな」

「……………す、すみませえん」

がくりと頂垂れる。かなり喜怒哀楽の激しい女のような。レイリーは、もうこの事について触れるのはやめる事にした。この女を責めても、荷物は返ってこない。

「さて」

軋む体に鞭を打ち、なんとか立ち上がる。レイリーは、自分を伺うような視線を向けてくるマリリーに向き直った。

「お互い無事でなによりだ。」

これから俺はユクモ村に戻るが、アンタはどうする?」

「あ…。えつと、その…」

かなり歯切れの悪い反応を見て、レイリーはマリリーの解答に見当が付いた。

「ひとまず、一緒に来るか?」

「よ、よろしいんですか?」

1人この場に取り残されるのは嫌だったのだろう。ずいっと体を寄せて、マリリーが問うてくる。レイリーはその所作に若干引き気味に頷いた。

「こつちだ」

レイリーはマリリーを率いて、先ほど台車を待機させた所まで戻って来た。そこで呆然と立ち止まる。マリリーはその動作に首を傾げた。

「どうされたんですか?」

「やっぱ殺しておくべきだったか」

「ええつ?!」

ずざざつとレイリーから距離を取る。

「阿呆か。お前じゃねえよ」

そう言いながら屈んで、木片に手を伸ばす。所々に血と毒が付着

していた。

「ここで台車を待たせていたんだが、毒狗竜たちの餌になってしまったようだな」

「ひっ?! じゃ、じゃあ人が…」

「人力車じゃねえよ」

「壮大な勘違いをしているマリーに溜息を付く。その瞬間、レイリーは周囲のざわめきを敏感に捉えた。」

「……………ただ。」

「場合によっちゃ今からその惨劇が起こるかもしれないな」

「……………え?」

「マリーが疑問符を発した直後、周りの茂みから次々とオレンジ色の鳥獣が飛び出してきた。フロギイだ。2人を囲うように牽制する。ざっと見て、30は居るだろう。」

「きゃあああつ?!」

「突然現れたそれに、マリーが叫び声を上げる。レイリーは矢に手を掛けようとしたところで、気付いた。」

「……………あと、3本」

「立て続けに訪れたモンスターとの戦闘で、ゲイルホーンに用いる矢が残り3本になっていた。どれだけ強い弓だろうが、矢が無ければ話にならない。レイリーはゲイルホーンは諦め、マスターブレイドに手を掛けた。」

「アンタは俺の陰に居ろ。動くな」

「……………え?」

「お互いが満身創痍なのは分かっている。だからこそ、自分でやった方が勝率が高い。そう踏んだレイリーは、半ば強引にマリーを抱き寄せた。」

「あ、あう。……………レイリーさん」

「顔を真っ赤にしながら、マリーがレイリーの背中に顔を埋める。」

「……………そこまでしろとは言っていないんだが」

「マリーの行き過ぎた行動を諫める前に、周りのフロギイが次々に」

鳴き出した。攻撃態勢に入ったようだ。怪我と後ろのマリーによってかなりの行動を制限されつつ、レイリーは身構えた。フロギイが飛び掛かろうとした瞬間。

聞き覚えのある女性の声が響いた。

第8話 水獣の領域（後書き）

感想等、頂けると嬉しいです。

## 第9話 豪胆

「乱舞・“桜花燦爛”」  
おつかさんらん

その声が耳に届いた時。レイリーとマリーを囲っていたフロギイの約半分は、既に絶命して宙を舞っていた。鳴き声が響くより先に鮮血が飛び散る。流れる金色の髪が、瞬く間に駆け抜ける。それを呆然と見つめるマリーを尻目に、レイリーはゲイルホーンを抜いた。矢は残り3発。だが、アリサが助太刀した以上3発で十分だと見切りを付けた。矢を装填しながら周囲を伺う。フロギイも、以前倒したジャギイと同じで集団で行動する事が多い。これだけの統制の執れた動きをしている以上。どこかで指令を出しているリーダーが居るはずだ。

「きゃあっ?!」

ズバツという音を立て、フロギイが斬り捨てられる。アリサではなくレイリーとマリーを狙ってきたフロギイに、レイリーが矢で応戦した。残弾数を考えて打つのではなく、矢で斬り裂く。フロギイが足元で動かなくなるのを確認すると、レイリーは改めて矢を装填し直した。

「…あ、ありがとうございます」

「……………」

マリーの震えるように呟かれたお礼も無視し、神経を周囲に尖らせる。しかし、周囲にはそういった気配がまるで感じられなかった。(……………おかしいな。)

頭が居ない集団で、これだけの連携が執れるはずは  
そこまで思考を巡らせたところで、ようやく察知した。レイリーは躊躇う事無く、ゲイルホーンを真上に掲げて打ち放つ。バチュツという何かに当たる音がした。

「来い」

「え？ わわっ?!」

マリーを強引に引つ張り、横へ回避する。その直後、今まで2人が立っていたところに1匹の毒狗竜が落ちてきた。周囲でアリサが応戦しているものより、明らかに大きい。

「ド、ドスフロギイ?!」

マリーが叫ぶ。

「まさか俺たちの真上に居たとはな。

隙でも伺ってたのか?」

レイリーはゲイルホーンの照準をドスフロギイに合わせながらそう呟いた。ドスフロギイは木の上で足を貫かれ、おまけにそのまま受け身の取れぬまま落下したせいで、うまく身動きが取れないらしい。ジタバタと足掻く様子を見ながら、レイリーはゲイルホーンを打ち放った。

アリサが到着してものの30秒程で片が付いた。レイリーたちを中心として、大小様々に切り刻まれた死体が水に浮かぶ。

「レイ!!!」

双剣を鞘に仕舞い、アリサが駆け寄ってくる。

「また勝手に居なくなっただわね!!!」

「寝ていたお前が悪い」

「起こさない貴方が悪いわ!!!」

「自分の責任を他人に押し付けるな」

駆け寄るなり文句を垂れるアリサに、うんざりしたようにレイリーが返した。その仕草に違和感を感じ取ったのか、アリサが突然服を掴んできた。

「……貴方、怪我してるのね?」

「よく分かったな」

「何してんのよ!!!」

私を連れて行かないからこうなるのよ!!!」

「やめる。傷に響く」

肩を掴んでがくがく揺するアリサを引きはがす。  
「ともかく、疲れた。」

早く帰りたいんだが、台車が破壊されてしまった」

「……私も借りてきたから大丈夫よ」

後ろ手に指差す。そこには台車と共にガーグアが控えていた。

「助かる。あまり動きたくは無いな」

「……………それで？ その女は何」

アリサがギロリとマリーを睨む。

「あ、あの。私、マリーっていいいます」

「貴方には聞いてない。黙ってなさいよ」

「ええっ?!」

「無茶すぎるだろう」

アリサの理不尽な怒りに、レイリーは頭を抱えそうになった。

「この女はマリー。そこで拾った。」

これからユクモ村まで連れて行く」

「ひ、拾ったあ?!」

「ひ、酷いです！ レイリーさん!!」

「貴方は黙ってなさいって言ってんでしょが!!」

「はううっ?!」

アリサに恐れをなしてレイリーの後ろに隠れる。そのマリーの仕草を見て、アリサの眉はますます吊り上がった。

「貴方ねえ」

「五月蠅い。ピーピー喚くな」

「レイ、貴方。」

モンスターの鱗を拾うのとは訳が違うのよ」

「知ってる」

「知ってそうにないから説明してるのよ!!」

「俺たちは怪我人なんだ。」

もう少し優しく接する事はできないのか？」

「貴方がその落とし物の所有権を破棄すれば、この上なく優しくで



きると思っわ」

「そ、そんなあ?!」

「黙ってなさいって何度も言わせないで!」

「ひえええ」

「……………もう、お前の接し方はこのままでいい。帰るぞ」

「ちょっと待ちなさい、レイ!!」

「捨てないで下さいよう、レイリーさん!!」

呆れ顔で台車へと向かうレイリーに、美女2人が続いた。

「か、帰って来たぞお!!!!」

ガーグアが引く台車を視認し、門番・ラクロウがそう叫ぶ。ユクモ村の鳥居付近は、直ぐにざわざわとし始めた。

「騒がしいな」

「そうね」

「あわわわ」

それを見て三者三様の反応を示す。直に、ガーグアはその門前まで辿り着いた。すぐさまラクロウが寄って来る。

「お疲れ様でした、兄貴!! 姐さん!!」

「その呼び方はやめると言った」

「気安く私に話しかけないで」

「そ、そんなあ!!」

そんな冷てえ事言わないで下さいよ!!」

ラクロウは情けない声でそう言うと、もう1人台車に乗っている人間を見付けた。

「その女は誰ですかい?」

「あ、あの。私マリーです。」

「よ、よろしくお願ひします」

「お? お、おう。」

俺はラクロウ。このユクモ村の鬼門番よ!!」

「わあ！！ 凄い方なんですわね！！」

「へ？ おおお？」

「おおうう！！ 俺はこの村じゃあかなり偉い人間よ！！！！」

「怪しい奴じゃあ無さそうだ！！ 通りな！！」

「ありがとうございますっ！！」

「…………… 何で門番が手玉に取られてるのよ」

「ぐだぐだ言わず、とっとと降りろ。」

「許しが出たんだ。まずは村長のところへ行く」

レイリーが台車を降りながらそう答える。レイリーが手を差し出すが、跳ね除けられた。

「貴方怪我人でしょう。結構よ」

「あ、ありがとうございますっ。」

「レイリーさん」

そうアリサが言っている横で、マリーがレイリーの手を借りた。

「貴方ねえっ！！！！」

「はうっ？！」

「いいからとっとと降りろ」

「あわっ？！」

ぐいっつと強引に引つ張られ、為すがままに降りたマリーは、そのままバランスを崩してレイリーの胸元へ飛び込んだ。

「おおっ？」

「ラクロウが物珍しそうな目でそれを見る。」

「もしかして兄貴。その女は」

「そんなわけないでしょう！！！！」

「へぶしっ？？！！」

誰が答えるより先に。ラクロウがそのセリフを言い切るより先に。アリサの手刀がラクロウの喉を的確に捉えた。その痛みに耐えかね、ラクロウが蹲る。

「うおおおおおおおっ」

その姿を見る事も無く、アリサはマリーをレイリーから引っぺが

した。

「貴方、さつさとレイから離れなさいよ!!」

「ふえええっ?!」

「……………めんどくせえ」

隣でぎゃーぎゃー騒ぐアリサを無視して、レイリーは階段に足を掛けた。

「アンタ、本当に行つて戻つて来たのか。

それにあの嬢ちゃんはギルドの方だろう?

凄いな。救出までしてくるとは」

野次馬として見に来ていた村人の1人が声を掛けてくる。レイリーには、その人物に見覚えがあった。

「アンタか。

アンタの情報のお蔭で、スムーズに場所を特定できた。

感謝している」

「いや、なに。気にするな。

それにしても荷物が見当たらないようだが、駄目だったのか?」

「ああ。谷底に真つ逆さまだ」

「それは難儀だったなあ」

「そういう運命だったという事だ」

それだけ告げて、レイリーは階段を上りだした。後ろから声が掛かる。

「俺はこの村で居酒屋やつてんだ。

時間あつたら、今度飲みに来てくれよ!

サービスしてやつから!!」

レイリーはそれに手を挙げることで答えた。

「お疲れ様でした。

これほど早くお戻りになられるとは。

流石はレイリー様ですわね」

村長はいつもの場所にてこやかに待っていた。

「荷物は無くなったがな」

「ちらりと治療棟を見やる。そこでは今頃ギルドメンバー・マリーの治療が行われているはずだった。」

「被害は如何ほど？」

「金はギルド・バンク（ギルドの銀行の事）に預けてあったから平気だったが。」

「装備用具は、ほぼ全ただ。ゲイルホーンにマスターブレイド。」

「そしてアリサのギルドナイトセーバーのみが残っている。」

「後はここまで来る時に着ていたリオソウルとハートの防具くらいか」

「……それは、相当深刻な被害ですわね」

「中にはかなり貴重な剣もあったんだがな」

「レイリーは苛立ちを隠そうともせずそう告げた。」

「その事につきまして。」

「ギルドが是非、謝罪をと。」

「本日の夕刻、集会浴場の方へ顔を出して欲しいそうすわ」

「ほう。これだけの失態を犯しておきながら、」

「こちらから出向けとはいいい度胸だ」

「……レイリー様」

「レイリーの怒気を敏感に察知したアゲ八が、心配そうな声を出す。」

「その声色を聞いたレイリーは、冷たい視線でアゲ八を見た。」

「村長。」

「村の体裁を保つ為に無礼な行動はなどと考えているなら、」

「早めに俺とアリサの専属契約は切っておく事だ。」

「俺やあいつが村や街に所属してこなかった訳。」

「それには手癖の悪さも含まれている」

「レイリーはそれだけ告げると、アゲ八に背を向けた。」

「お待ちになって」

「その言葉に足を止める。」

「話は最後まで聞くものですわよ」

「なんだ？」

振り返る。

「私が申し上げたかったのはそうではありません。

今回の件につきましては、完全に貴方がたが被害者です。

ですから、多少の粗相は見逃されるでしょう。

ですが、ご自身の立場を危ぶませるほど暴れてはなりませんよ？」

そう言っアゲハがパチツとウインクする。それを見て、レイリ

ーは思わず固まってしまった。

「はは。アンタもなかなか豪胆な性格だな」

「そうでなければ、村の長など務まりませんことよ」

「わかった。礼を言う」

笑いながらそう告げて、レイリーは自宅へと足を向けた。

「で？　つまりはこの女が私たちの荷物を崖から落としたってわけね？」

「まあ。そうなるか」

「ひいひいひいっ？！」

すみませんすみませんすみません！！！！」

そろそろ日が沈もうかという頃。治療を終えたマリーがレイリ

ーたちの宿屋に顔を出した。レイリーから今回の顛末を聞いていたア

リサは、マリーが入ってくるなりドスのきいた声を上げる。

「あの中にはねえ！！ 私たちのこれまでの全てが詰まっていたのよ！！」

それを貴方があ！！！！」

「そこまでにしておけ」

今にも泣きだしそうなマリーを尻目に、レイリーはそうアリサを諫めた。

「何よ？！　この女を守るっつていつの？！」

あの中には

「

「よせと言った」

「っ!!」

レイリーの苛立ちを含んだ声色に、アリサが口を嚙む。

「明日、もう一度あの場へ行く。」

崖の下を探索してみよう。

運良く被害を免れた物もあるかもしれない」

「……………分かったわ」

「あ、あのっ?!」

マリーが身を乗り出した。

「わ、私も付いて行っては駄目でしょうか?!」

「駄目に決まってるでしょ」

「はっっ?!」

「お前は黙れ」

マリーの意見を即座に切り捨てたアリサを制する。

「ギルドの仕事は運搬作業が失敗した時点で終了している。」

お前がこれに付き合う必要は無いんだが」

「お、お仕事とかそういうんじゃないやありませんっ!!」

今回ののは、完全に私の失態です!!」

それなのに、レイリーさんは私を助けてくれました!!」

その御恩を少しでもお返ししたいだけですっ!!」

「…ふむ」

「そ、それにつ…レイリーさんのお役に少しでも立ちたいですしっ」

「どういう意味よ、それは!!!!」

「ひゃいつ?!」

「うるせーな」

強引に2人の間に割って入る。

「いちいち目くじら立てるな。」

これからギルドの謝罪を受けに集会浴場に行く。

とりあえず2人とも来い」

「……………分かったわよ」

「は、はいいい」

怒りを隠そうともせず、返事をするアリサと、これから起る悲劇を察知して怖々返事をするマリィ。その2人の対照的な姿を見て、レイリーは苦笑した。

第9話 豪胆（後書き）

感想等、頂けると嬉しいです。



## 第10話 条件2つ

「初めまして。」

私はこの地域一帯のギルドの管理を任されており、シルベリアと申します。こちらはビリーとアルカ。

私の部下でございます」

「レイリーだ。アンタが出てくるとはな」

シルベリアから差し出された手を掴む。ギルドの紋章を携えた黒の制服。これは、ギルドマスターたる正当な証。ギルドでその名を名乗れるのはわずか10名。その上にはギルドの総管理者であるギルドグランドマスターが坐すのみ。それを着た白髪の男が、ギルドという組織の中でも11人の権力者のうちの1人であることを指していた。

「この度は私の管理不届きでこのような惨事を招いてしまいました。まずはお詫び申し上げます」

シルベリアが頭を下げる。

「失礼致しました」

それに倣って2人の男、ビリーとアルカも頭を下げた。しかし、ビリーと紹介された男が直ぐに頭を上げる。レイリーの後ろをギロリと睨んだ。

「おい、何をそつちで突っ立っている!!」

こつちへ来て謝罪をしないか!!」

「ひっ?!」

は、はいいいっ!!」

どうやら、同じく当事者であったマリーがこちらに居たのが気に食わなかったらしい。ビリーに呼ばれ、急いでそちらへ向かおうとしたマリーを手で制す。代わりにレイリーがビリーに歩み寄った。

「アンタがこの女と共に荷物を運んでた男か?」

「ああ、そつだ　　がっ?!」

相手の返答を聞き終わる前に、レイリーの膝がビリーの腹部を襲った。まさかいきなり蹴り上げられるとは思っていなかったのだろう。ビリーは完全にノーガードでそれを受け、その痛みに蹲った。

「がはっ?! げほっ!!」

「ギルドマスター・シルベリアが出向いた事に免じて。

それ1発で勘弁してやるよ」

「貴様、いきなり何をするか!!」

その横に立っていたアルカがレイリーを組み敷こうと手を挙げる。しかし、その手がレイリーに届くより先に、レイリーの横に控えていたアリサの足が、アルカの顔を捉えていた。無様に蹴り飛ばされたアルカは、何の受け身も取れずに床に転がった。

「汚い手でレイに触らないで」

それを文字通りに見下しながら、アリサが告げる。

「げほっ!! 貴様らあっ!!」

「やめないか!!!!!」

そのまま大喧嘩に発展しそうになったところを、シルベリアが遮る。

「し、しかしっ?!」

「お前らにこの方々へ手を出す権利があるのか!!」

「うっ」

「……………」

攻撃を受けた2人の顔が歪む。

「またしても、私の部下が粗相を。」

「ご無礼をお許し下さい」

「あわわわ」

シルベリアが再度頭を下げる。後ろであわわわしているマリイを無視して、レイリーは侮蔑の視線をビリーとアルカに投げかけた。

「まさかこんな女1人に荷物番を任せて他の任に就くとは…………。」

貴様らの目はよほど狂っていると見える」

「…………ギルドに入隊した以上、そこに男も女もない。」

好き勝手に放浪している貴様には分からんだろうがな。

俺たちは

膝を付きながら話すビリーのセリフを遮るように、レイリーは手をパンパンと叩いた。

「ご高説は結構だ。俺の論点はそこじゃない。

別に女1人残した事を責めてる訳じゃない。

性について論じようとしている訳でもない。

俺が言っているのは“荷物番さえ満足にこなせないような女”に、

“その技量すら把握できていない”貴様らが、

お客様の大切な荷物を任せっきりにした事だ」

「そ、そんな酷い事言わないで下さいよう!!」

後ろで泣き声を上げるマリーに構う事無く、レイリーは悔しげに顔を歪めているビリーに目を向けた。

「言っている意味がお分かり頂けたかな？」

え と。……すまん、名前を忘れた。誰だお前は」

「き、貴様っ……………」

「よせと言っているだろう!!」

飛び掛かるうとしたビリーをシルベリアが一喝する。

「お前らは下がれ」

「な、何だと?!」

「言わせておけばっ?!」

シルベリアではなくレイリーからそう告げられ、ビリーとアルカは顔を真っ赤にして叫んだ。

「お前等と話す事なんざ何もねえよ。

この地から直ぐに失せる。俺の前に二度と顔を見せるな」

「……そのように。」

この者たちは、配属先を変更致しましょう」

「マスター?!」

「お前たちが、どれだけだけの損害をレイリー様とアリサ様。

加えてギルドに与えたと思っている。」

処罰は追って通達する。下がれ」

「…っ、そんな」

「早く消えてくれない？」

貴方たちの顔を見るだけで気分が悪いわ」

尚も縋り付こうとする2人を、アリサが凍てつくような視線で制した。

「下がれ」

再度シルベリアから命じられ、ビリーとアルカが青ざめた表情で集会浴場から出て行く。それを見届けて、シルベリアは溜息を付いた。

「……あの者たちも、腕は良いのですが」

「何だ。他にも問題があったのか？」

「いえ。………そうですね。」

クライアントの貴方がたなら聞く権利もおありでしょう。

あの2人は勤務に誠実ではない者でして」

「というと？」

「サボるのですよ。簡単に言えば。事の顛末は聞かせて頂きました。救援要請を受けて等と言っていたようですが、

今日そのような要請を出しているところはありませんでした」

「おいおい」

「何よ。じゃああの人たち……」

「そうです。」

単に運搬任務から逃げ出す口実を作りたかっただけのようで」

「そんなぁ……」

マリーが情けない声を上げる。気持ちは分からなくもないが……。

「そんな奴らを俺の依頼に割り当てたのは納得できんな」

「申し訳もありません」

シルベリアは言い訳もせず謝罪した。

「“異端”レイリーの名は、ギルドの隅々にまで行き渡っておりますから。」

「この任務ならば忠実にこなすものと思っていたのですが…」

「読みが甘かったな」

「そのようで」

「そんな常習犯なら、なぜ処理しておかなかった？」

「今まで確たる証拠が掴めなかったのです。」

周到に規則を破る奴らでして。

今回は運搬クエストとして、少々気を抜いていたのでしようね。

それが失敗するとは思わなかったのでしょうか。

任務怠慢隠ぺいの根回しが済む前に、騒ぎになってしまいましたので」

そう口にする、シルベリアは懐から一枚の便箋を取り出し、レイリーとアリサに手渡した。

「これは？」

そう聞きながら、レイリーは便箋を開ける。アリサもそれに倣って開けた。

「今回の謝礼金、その明細でございます。」

勝手ではございますが、

レイリー様とアリサ様名義のバンクに既に加えさせて頂いております」

「随分と気前が良いな？」

額を確認してレイリーがシルベリアを見やる。

「レイリー様とアリサ様は、当ギルドにとって大切なお客様であるばかりか、

貴重な戦力としても数えさせて頂いております故。

グランドマスターからも、この縁を手放さぬよう重々受けております」

「……なるほど。」

あのジジイが言いそうな事だ」

「……じ、じじいって」

レイリーの発言に恐れを為したマリーが、震える声で口を挟む。

「世界中どこを探しても、  
こうしてギルドマスターに面と向かってグランドマスターの悪態  
をつけるのは、

貴方だけでしょね」

対してシルベリアは、特に気にした様子もなくそう答えた。レイ  
リーがニヤリと笑うのを見届けると、再度口を開く。

「当ギルドとしまして、

お金だけで解決できるとは思っておりません。

他にも何かございましたら何なりとお申し付け下されば、

とグランドマスターも申ししております」

「…ふむ。そうだな」

顎に手を当てて考えるレイリーを見て、シルベリアはマリーに視  
線を代えた。

「それから、そちらの者の処置は如何致しましょうか？」

「ふ、ふえっ?!」

いきなり矛先を向けられ、マリーはビクツと肩を震わせた。

「特に要望はないが、この女はこの後どうなる？」

「1人でもある程度戦闘が可能な者にしか、当ギルドは仕事を与え  
ておりません。

あの2人の被害者ではありませんが、

お客様の運搬クエストをこなせなかったというのもまた事実。

それも物品を紛失、再起も不能。

そしてその物品が他の物とも代用が付かない今回のケースとなり  
ますと……………」

そうですね。ギルド4級処罰の対象となるかと」

「よ、4……………」

マリーが呆然と口にする。

ギルドの階級別処罰。それはギルドに務める者、もしくは関わる  
者（ハンターもこれに含まれる）が守るべき掟に背いた時に課せら  
れる罪の重さだ。階級は1〜10まであり、数字が低いものほど犯

した罪が重く、罰も大きい。特に5より小さい数字は余程の重罪人か、もしくは失態を犯した者にしか課されない。マリーに4が付いたという事は、つまりはそういう事だ。レイリーやアリサの武器にどれほどの価値があったのか。それを良く理解しているギルドが付ける、妥当な数字であるといえた。

おそらく、今後ギルドでいかなる戦果を挙げようとも、その汚名を返上する事は難しい。今回のメンバーで今回の仕事。これは完全にマリーの運が悪かったとしか言いようがない。

「その罪は軽くはならないのか？」

「ちよ、ちよつとレイ？」

レイリーの発言にアリサが割って入る。

「この女が被害者だっていうんじゃないでしょうね」

「別にそこまで割り切ってはいないが」

「ふむ。それはいかにレイリー様といえども、覆りはしませんね。

貴方がたの武器。そして貴方がたとのパイプラインという価値の高さ。

これはギルドの高位の座にいる者なら誰しもが身に染みて分かっております。

今後の部下たちへの戒め然り。ここは徹底しておく必要があるでしょう。

特に、“当ギルドに在籍している者”なら絶対に、です」

「ふむ」

「ちよつと、貴方どうしたのよ。

いつもなら誰が何処で野垂れ死のうが、見向きもしないじゃない」

「……………お前がいつも、どのような目で俺を見ていたのかだけはよく分かった」

そう言っつてレイリーはシルベリアに向き直った。

「今回のギルドの名誉挽回の姿勢にあたり、こちらからの条件を決めた」

「……………伺いましょう」

急な話の転換に訝しげに眉を上げながら、シルベリアは先を促した。

「第1に、王立図書館の第1級立ち入り禁止区域へのフリーパスを  
用意しろ」

「……………あそこは、第1級の閲覧禁止書物が管理されている場所  
でございます。」

当ギルドでも私含めたマスタークラスの者しか自由に立ち入りで  
きないのですか？」

「だから要求している。安心しろ。」

「そこで見た物は絶対に口外しない。約束しよう」

「……………一度グランドマスターへ確認を取ります。」

追って結果をお知らせします」

「いいだろう。ジジイに伝えておけ。」

欲しい物があるのなら、相応のリスクは受け入れると」

「……………承知致しました」

「第2に、この女の今回の失態はお前が責任を持って揉み消せ」

「先ほど如何に貴方と言えども、この罰は覆らないと申したはず  
ですが」

「好きにするがいい。」

そうなれば、俺との繋がりはお終いになるだけだ。

パイプラインに価値を見出しているのなら結構。

今回の件、あの2人だけで任務をこなしていたという事にでもし  
ておけ」

「……………レ、レイリーさん」

マリーは信じられないとばかりにレイリーを見た。

「ふむ。確かにこの件に関しては、まだ公にされていませんが……………。」

あの2人が黙っているとは限りませんよ？」

「言っただけだ。」

あの2人だけで任務をこなしていた事にしておけ、と。

2人が“忠実に”任務を実行している最中、水獣に襲われて失敗



した、とな」

「なるほど。怠慢には目を瞑る、と?」

「処罰は軽くなるんだらう?」

「ええ。忠実に任務をこなしている最中の失敗でしたら、今のマリーののように情状酌量の余地がございますので。

同じく4以上にはならないでしょう」

「なら、そうしろ。」

その2つが成就されなければ、今後ギルドの依頼は引き受けない」

「……………畏まりました。そのように」

「王立図書館の件はいつまでに結果が出る」

「私が一度本部に戻る必要がございます。」

伝言・文書等で伝えられる事柄ではありませんせぬ故。

最短で2週間」

「いいだらう。なるべく急げ」

「御意に」

シルベリアが一礼する。

「では、マリー。こちらへ」

「……………あ。で、でも。私明日

「お前は必要ない。」

心機一転。次のクエストで頑張るんだな」

レイリーが強引にマリーの背中を押して、シルベリアの方へと追いやる。

「レ、レイリーさんっ」

「マリー。貴方はレイリー様にお許しを頂いたとはいえ、任務に失敗したという事実はあるのですからね。

記録には残らずとも、事実はある。

きちんと謝罪なさい」

「……………も、申し訳ございませんでした」

言いたい事を全て飲み込み、マリーは頭を下げた。

「今後も、当ギルドをよろしくお願ひ申し上げます」

「それは今後のお前たち次第だ。

行くぞ、アリサ」

「ええ」

深々と頭を下げるシルベリアに背を向ける。

「レイリーさんっ」

マリーの声が聞こえたが、レイリーは集会浴場から姿を消すまで一度も振り返らなかった。

第10話 条件2つ（後書き）

感想等、頂けると嬉しいです。

## 第11話 一本

レイリー様 アリサ様 ユクモ村へようこそ

その垂れ幕を目にして、レイリーとアリサは思わず固まってしまった。集会浴場にてギルドマスター・シルベリアから謝罪を受け、連絡通路を渡り自室へと戻っていた2人は、思い思いの時間を過ごしていた。(正確には、武器の手入れをするレイリーに、ひたすらアリサが話し掛けていた。)

ドアが叩かれ、ラクロウが顔を出したのがつい先ほど。

「兄貴、姐さん。お迎えに上がりました!!」

「誰の許可を得てその扉を開けた」

「貴方のお迎えなんていらさないわ」

「冷た過ぎる?!」

レイリーの冷ややかな視線とアリサの凍てつく視線を受けながらも、何とか外へ連れ出そうとするラクロウ。訳も話さずに、ただ連れ出そうとする行動がイラついたのだろう。アリサが双剣に手を掛けようとしたところで、ようやくラクロウがワケを話した。

「今日は兄貴と姐さんの歓迎会ですよ!!」

「ああ、そっぴや村長が今朝そんな事言ってたな」

「そっぴなの?」

「知ってたんすか?!」

「ああ。今思い出した」

「それならそっぴと言って下さいよ!!」

「貴方が理由を話さなかったからでしょうが!!」

「責任押し付けるなんて最低よ!!」

「……よくそのセリフをお前が言えたな」

どうやらぎりぎりまで内緒にしておき、2人を驚かせたかったらしいが、非情にもラクロウの計画はその場で破たんした。それならばと重い腰を上げた2人は、ようやくラクロウに続いて自宅の外へ出る事にした。

そして今に至る。

「どうです？」

楽しんで頂けてますでしょうか」

ようやく人混みの輪から抜け出たレイリーに、アゲ八が話し掛けしてきた。

「まさかここまで盛大にやってくれるとはな」

アゲ八に言われていたとおり、村人からの歓迎会が無事に開催されていた。それはレイリーが想像していたものよりも遙かに大規模で、村中を巻き込んだ大騒ぎになっている。ほぼ全員から自己紹介を受けたのではないだろうか。あんなの、全員分の名前を覚えられないわけがない。(もっとも、レイリー自身に積極的に覚える気が無かったのだが。)

先ほどまでいた人混みを見やる。そこでは、アリサが今までのレイリーとの武勇伝を語っていた。最初は渋々といった表情だったが、皆がレイリーとアリサは凄いと称え始めると、気分を良くしたのか自分から次々に語りだしたのだ。語り手は1人で十分。そもそも、レイリーに自分の過去を語る気はさらさら無い。アリサに皆の意識が集中したところでこっさり出てきたのだ。

「あのお話は全て実話で？」

「軸はな。俺が介入するところはちよくちよく色を付けているようだが」

「それだけレイリー様が素敵な方だという事ですね」

「…話が噛み合っていないと感じるのは俺だけか？」

「ええ。そうでしょうとも」

そう言いながら、アゲ八が酒を差し出す。

「如何？ まだまだお飲みになれるのでしょうか？」

「頂こう」

杯を受け取る。既に村の者たちと一戦交えた後だったが、許容範囲だった。アゲハと杯をぶつけ合うとくいつと飲み干した。

「まだお代わりもありますからね。」

「ご遠慮なさらずにどうぞ」

「ああ」

アゲハに注いでもらいながら、レイリーはユクモ村を見渡すように眺めた。あちらこちらで談笑が聞こえる。人族も、竜人族も、獣族も。皆が楽しそうに笑う様は、レイリーの目には温かく映った。

「……………良い村だな」

こういふ場所もあるのだな、とは言わなかった。

「ええ。そうでしょうとも。なにせ私が長を務める村なのですよ」

アゲハがそう答える。

「……………そうだな」

レイリーは杯に入った酒を飲みほした。

「疲れたあ」

武勇伝のお披露目が終結したのか。ようやくアリサが人混みから出てきた。アゲハとレイリーが並んで座っているのを見つけ、さも当然とばかりにレイリーの横に居座る。

「随分と話していたようだが…。」

「いらぬ事は言つてないだろうな？」

「私にだって、言つていい事と悪い事があるくらい分かってるわ」

「あらあら。今のお話は聞かなかつた事にしておきましょうか」

アゲハがクスクスと笑う。それを見てレイリーは首を横に振った。別に構わないさ。内容さえ知らなければ、どうという事は無い。黒に限りなく近くてもそれが黒でないのなら。

それはやはり、黒にはできないんだからな」

「黒っぽいってだけでね」

アリサも酒を煽りながらそう繋ぐ。

「レ、レイリー様っ」

「ん？」

村の娘が何人か駆け寄ってくる。それを目にして、横に座っていたアリサの目が据わった。

「あ、あのっ。

よろしければ、これまでのレイリー様のお話聞かせて下さいっ」

「お願いしますっ！！ レイリー様っ！！」

「…お、おいおい」

強引に腕を取られかけたところで、アリサが立ち上がった。

「レイの話なら私がしてあげるわ。」

「さあ、あちらへ行きましょっ！！」

私のレイに近寄らないでっ！！ と言外に言い放ち、動揺する村の娘たちを引きずりながら。アリサは再び人混みの中へと消えて行った。

「愛されていますね。レイリー様」

「よしてくれ」

レイリーは振りではなく、本気で嫌そうな顔をした。

「俺は自分の事で精一杯。」

「あいつには、何もしてやる事はできないんだからな」

「……………それは、“10年前の出来事”の話をしているんですの？」

アゲハの声のトーンが下がる。予想外のその言葉を聞いて、レイリーが勢いよく振り向いた。

「…アンタ。いったい何を知ってる」

「さあ。ひっそりと語り継がれる程度ならば、でしょうか」

「……………ギルドが揉み消したはずだったんだが？」

「ええ。これはグランドマスターから聞いたお話ですもの」

「アンタ、繋がりがあったのか」

「あらあら。レイリー様ともあるうお方が。」

「本当にお気付きになれなかったのですか？」

存在はすれど、連絡は取れず。

クエスト成功率10割の実力を持ちながらも、依頼者側からアプローチを掛ける事が出来ない伝説の放浪ハンター。

村の長といえどもこんな辺境の地にいる私が、どうやって貴方に依頼状を送ったとお思い？」

「……なるほど。ジジイが囁んでいたのか。確かに不思議には思っていた。

ギルドには、使いに他からの依頼書は持って来させるなど伝えていたはずだからな」

レイリーは苦々しげに首を振った。

「では、なぜ私の依頼は引き受けて下さったのかしら？  
今まで渡り歩いて来た村や街。

行く先々のところで専属ハンターの依頼はあったのでしょうか？」  
不思議そうに首を傾げるアゲハに、レイリーは少し考えてから口を開いた。

「……少し、気になる情報を手に入れてな」

「それはなんですか？」

「……アンタ。

天候を操る龍の話、聞いたことあるか？」

「ええ。多少ならば」

「教えてくれ」

レイリーにしては珍しい。その身を乗り出すかのように問いかける姿勢に、アゲハは苦笑した。

「私はあの現場にはいませんでした。

貴方よりも“あの出来事”に詳しいなどと言うつもりはございません。

ですが。私は貴方の知りえない“いくつかのピース”を握っている」

「……………」



「だからこそ分かります。

貴方が今知りたがっている問いは、

貴方が“本当に求めている情報”には直結しないでしょ？」

「何？」

レイリーは訝しげにアゲ八を見た。対してアゲ八はすまし顔でレイリーを見ている。

「ならば、そのアンタの握る“いくつかのピース”とは？」

「それはこの場ではお答えできません」

「……………何だと？」

「勘違いされては困りますよ、レイリー様」

レイリーの声のトーンが変わったのを聞いて、アゲ八は話の矛先を代える事にした。

「貴方は今。このユクモ村のハンターなのです。」

貴方には依頼書通り、まずはジントウガを討伐して頂かなければなりません」

「ははははははっ」

レイリーは急に笑い出した。それをアゲ八は黙って見つめる。

「何を言い出すかと思えば。」

そんな依頼書。俺の気次第でどうとでもなる。

俺の“異端”たる所以は、何もハンターとしてのスキルだけを指しているわけではない」

「…そういうえば、手癖が悪いとおっしゃってましたものね」

アゲ八は事も無さげにそう相槌を打った。

「知っている事を全て話してもらおう。」

ユクモ村の件は、その後で考えてやるよ」

「ふふふ。私、貴方の事を気に入りましたわ」

「…酔っぱらってんのか？」

「そうかもしれません」

どうもこの女相手だと調子が狂う。レイリーは脱力して問うた。

「今の状況は分かってるのか？」

「もちろんですわ。ですがごめんなさい？」

あの件に関しては、グランドマスターから口止めされているので「す」

「…その言い訳は俺に通じないぞ。」

あのジジイなんざ知った事が「

「ふふふふ。でしょうね。」

ですから、貴方への報酬に一点、加える事にしましたわ「

「……………」

「貴方の、ハンターとしての素質を私に見極めさせて頂けませんこと？」

防具はそのユクモノのみ。武器はご自由に選ばれて構いませんわ。そうですね。期限は明後日の夕刻にしましょうか。

それまでに“無双の狩人” ジンオウガを討伐してごらんなさい。

この条件を見事クリアできれば…。

その後の宴会でお酒の入った私が、“うっかり”何かを零すかもしれません「

「それには私も参戦して構わないわよね？」

「……………アリサ。何時の間に」

声が出た方へ振り返ると、そこには腕を組んで仁王立ちするアリスの姿があった。そして得意げな顔でこう言う。

「私は何時如何なる時でも、貴方の傍にいるわ」

レイリーはうんざりした表情でアゲハを見やった。

「構いませんわ。“異端”レイリー。そして“可憐”アリサ。」

その両名のみを参加者として認めます「

「俺たち2人を相手にしても、それだけ粘られる自信があるか？」

「ふふふ。どうでしょうか？」

「……………」

沈黙するレイリーの傍に、アリサが立つ。そちらを見ると、いつもの笑顔でこうのたまった。

「平気よ。私と貴方なら、どんな敵だって瞬殺なんだから」

「……………馬鹿野郎」

そう吐き捨てる、レイリーはアゲ八に向き直った。

「いいだろう。その条件で受けて立つ」

「……………うおおおおおおおっ」「……………」

「?!」

レイリーのそのセリフと共に、何時の間にか集まっていた村人たちが盛り上がり始めた。

「レイリー様とアリサ様がジンオウガに挑むんだってよ!!」

「しかも2日以内に討伐するらしい」

「村長と賭けだってよ。こりゃ面白くなってきた!!」

好き勝手に騒ぎ始める。

「おいおい。聞かれてたんじゃないだろうな」

「心配無用ですわ。」

皆さん集まってきたのはアリサ様の後からでした。

それに

意味ありげに切るアゲ八に、レイリーが先を促す。

「『内容さえ知らなければ、どうという事は無い。」

黒に限りなく近くてもそれが黒でないのなら。」

それはやはり、黒にはできない』…:…:でしよう?」

肝心な事は、お互い漏らしていません事よ?」

ウインクしながらそう言うアゲ八に、レイリーは思わず苦笑いした。

「……………これは。一本とられたな」

## 第12話 動揺

「準備はいいか？」

「もちろん」

アリサは袋包みを抱えてそう言った。いつもより携帯品が多い。当たり前だ。クエスト完了まではここへ戻って来ない。横に並んだアリサを見て、レイリーが昨日から再三繰り返した問いを投げ掛ける。

「いいのか？ これは俺の私的なクエストだぞ」

「何度も言わせないで。」

私は貴方の為なら何だってするわ」

「……………そうか」

ありがとうとは言わなかった。いや、言えなかった。アリサのこの言葉が、これまで何度レイリーを救ったのか。それはアリサには到底分からないだろう。レイリーは、いつも通りの無表情でそれに答えた。

「レイリー様とアリサ様が出発されるぞ！！」

鳥居まで辿り着くだけでもひと苦労だった。会うたび会うたび村人に呼び止められ、激励される。レイリーにとっては時間の浪費でしかなかったが、あまり邪険に接するわけにはいかない。アゲ八が“あの出来事”に対して何かしらの情報を持っているのであれば、何としても聞き出す必要がある。

その情報が欲しいが為に、レイリーはハンターとなったのだから。

門前に待機させていたガーグアの台車に乗り込む。

「それじゃあ、兄貴に姐さん！ 頑張つて下さい！！」

「兄貴はやめろ」

「気安く話しかけないで」

「一度くらい素直に返して下さいよっ?!」

笑い声がユクモ村の門前を包む中、レイリーはガーグアに合図を送った。

「レイリー様!」

振り返る。そこには村長・アゲハの姿があった。

「何だ?」

「……………お気を付けて」

「? ……………ああ」

何かの言葉を飲み込んだ上で見送りの言葉だけを送るアゲハに、レイリーは短く答えた。台車は止まる事無く走り続ける。直ぐにレイリーとアリサの姿は見えなくなった。

「珍しいっすね。村長がわざわざ門前まで見送りに来るなんてラクロウがアゲハに問う。しかし、それは完全な藪蛇だった。

「ええ、少々胸騒ぎが …… って、ラクロウ。」

貴方のお父上が貴方をお探しになってましたわよ?」

「げげっ?! 銭湯の薪割りはまだこりこりだあっ!!」

ユクモ村の門前で、鬼門番のうめき声が響いた。

クエスト：ジンオウガの討伐

依頼人：ユクモ村村長・アゲハ

場所：溪流付近にて目撃情報有り

達成条件：? ジンオウガの討伐。? 期限は2日後の夕刻。? 防具はユクモノ。

「……………?の条件なんて、なくてもいいでしょうが」

アリサはそうぼやきながら依頼書を睨みつけた。

「…………… ユクモ村の洗礼って事じゃないか?」

「何? レイ。貴方あその村に入り浸るつもりだったの?」

「んなわけあるか」

レイリーは手綱を引きながら答えた。

「必要だったのは、ここ付近の情報と宿屋だけ。

うまくいけばこのクエストで最後かもな」

「ふうん」

アリサが意味深な相槌で答えた。

「？ 何か言いたい事でもあるのか？」

「別に」

アリサはのんびりと体を伸ばす。今に台車で昼寝でもしそうな勢いだ。

「寝てもいいが、襲われても置いていくぞ」

「私、貴方に襲われたいわ」

「帰れ」

「けち」

「……………なんでだ」

レイリーたちはひとまず先日の水没林付近まで行く事になっていた。当然目的は崖下に落ちた荷物の回収だ。本来ならば直ぐにでもジンオウガを探すべきだったが、仮に崖下で被害を免れた物があるのならそちらも早く回収しなければならぬ。ジンオウガの潜む場所が溪流付近と曖昧である事から、溪流を探索しつつ水没林を目指すという方針で固まった。

からからという規則正しい音を立てながら、2人を乗せた台車はゆっくりと水没林へと踏み入っていった。ほどなくして、例の現場へと到着する。

「…この真下だな」

レイリーはもうほとんど残っていない運搬用台車の車輪の後ろを確認しながら、崖の下を見た。その少し横で流れ落ちる滝からの水の霧が崖下一帯に広がっている為、相変わらず下の状況は確認できない。

「凄い高度ね。確かにこれじゃあ下りられないわ」

横でアリサが呟く。レイリーはポシエットからペイントボールを

数個取り出した。そのまま下に落とす。多少風に流されるもの、まずまずの位置でそれぞれが落下した。

「下に下りる場所を探す。お前はここに残れ」

「嫌よ。一緒に行くわ」

「お前にはやってもらいたい事がある」

そう言っただけレイリーはポシエットから取り出した物をアリサに握らせた。

「なによ。閃光玉じゃない」

「それを1時間後から15分刻みで1個ずつ宙に放れ。」

ペイントボールによって下に“臭い”は染み付いているだろうが、その付近に辿り着けなければ意味がない。

このまま下に下りれない以上、何処か迂回して下りられる場所を探す必要がある」

「それで目印代わりにこれを放れって事？」

「そういう事だ」

「はあ。やっぱりあの女連れて来るべきだったじゃない」

アリサの溜息にレイリーは苦笑した。

「何だ。存外、あの女の事を気に入っていたのか？」

「ふざけないで頂戴」

「悪かった。じゃあ、頼んだぞ」

「…分かったわよ。で？ そのケースは何？」

頼んだと言いながら台車から、レイリーが引っ張り出してきたケースを見る。

「中には村で買い占めたありったけの閃光玉がある」  
どさつと地面に置く。

「あの村って閃光玉なんて置いてたかしら？」

「いや？ 買い占めたのは光蟲と素材玉だ」

「…何時の間に調査したのよ」

「昨日お前が寝た後だな」

「言いなさいよ！！ 手伝ったのに！！」

「お前、昨日寝た時の記憶あるのか？」

「え？……………あら？」

「あの宴会の後、酔ってぶっ倒れたんだろっが。」

「宿屋まで運ぶ俺の身にもなれ」

「それじゃあ、昨日はレイに色々いたずらされちゃったのね」

「そうだな。昨日は問答無用でお前をベットに押し倒したからな。」

「安心して寝袋で寝れた」

「けち」

「……………それ、お前のセリフじゃないだろう」

「レイリーはもう1つのケースを引っ張り出しながらそう呟いた。」

「そっちは？」

「食料と簡易テントが入ってる。」

「俺が戻って来るまでの間は、ここをベースキャンプにしろ」

「ちよ、ちよっと。」

「貴方どれだけの間別行動するつもりなのよ」

「さあな。ここの地理がどうなっているかにもよる。」

「夕刻になってもこの真下に辿り着けないようなら引き返す。」

「それ以上時間を掛けちまうと、本題のクエストに間に合わなくなる」

「…夕刻って」

「まだ朝っぱらだ。」

「悪いがガーグアの台車は借りていく。」

「仮に無事な荷物があつた場合、手で運ぶには限度があるからな」

「べ、別にそれはいいんだけど…」

「まだ納得しきれていないアリサを残し、台車に乗り込む。」

「じゃあな。ここは任せた」

「……………分かったわ。気を付けてね、レイ。」

「私の目の届かないところで怪我でもしてごらんなさい。」

「後で痛い目を見る事になるわよ」

「…なんで怪我をした上にお前に痛めつけられにやならんだ」



手綱を引き、ガーグアを走らせる。

「なるべく早く戻る。お前も気を抜くなよ」

「ええ」

それだけ言い残し、レイリーは下へと下りる道を探しに出た。

アリサの場所をベースキャンプに指定したのには2つの理由がある。

1つめは当然。先ほどもレイリーが言っていた通り、落ちた荷物の真上に位置しているから。ペイントボールによる臭いでの捜索には限度がある。臭いは視覚で捉えられるものではない。よって自身の嗅覚が反応する場所まで辿り着けなければ、役に立たないのだ。そして、レイリーはペイントボールを最終目標地点である、落ちた現場付近に放っている。つまりペイントボールの役目とは、あくまでその場が目的地周辺であるという最終確認の為のみであり、捜索にはまったくもって必要としない。だからこそ、その真上にアリサを配置して閃光玉を一定時間おきに破裂させる事で、遠くからの視覚による捜索を可能にしたというわけだ。

2つめは、あの位置が水没林の中でもかなり高度の位置にあるという事。現にアリサにベースキャンプを張らせた場所には水が浸水していない場所がある。横に流れる川が一段低いということも相成って、ベースにするにはもってこいの場所となっていた。加えて、高度が高いという事は目立ちやすい。この捜索には目印となる閃光玉が必須。仮にレイリーの立ち位置から死角に入られてしまうと、いくら閃光玉を放ろうが意味を成さない。レイリーがどの位置に居たとしても、必ず目の届く場所で機能してもらおう必要があった。

後方が急に光る。レイリーはふと後ろを見上げた。既に光は収束してしまっているが、おそらく閃光玉が放られたのだろう。光った

のはこれで4回目。つまりは、もう2時間が経過しているという事だ。

レイリーは横に広がる崖から下を見下ろした。随分と下った。おそらくロープ等専用の器具を使えば自力で下りられる距離だろう。

しかし、それはできない。下へはこのガーグアと台車も連れて行く必要がある。鳥と台車をロッククライミングさせるわけにもいかない。

先を見してみる。緩やかな下り坂は、まだまだ先へと続いていた。当分はこのままだ。レイリーが溜息を付いた瞬間。

強力な気配を察知した。

レイリーが台車から飛び降りた直後、上からの圧力によって台車が粉々に碎け散る。

完全に油断していた。いや、単なる油断が原因であればレイリーはもっと早くに察知できていたはずだ。しかし、“それ”は跳躍してレイリーの真上にくるまでその気配をまったく悟らせなかった。

地面に転がったレイリーは、すばやくマスターブレードを引き抜く。ゆっくりと立ち上がりながら、突然の来訪者を見据えた。

「……………だからクエストの目撃情報はあてにならないんだ」

目の前でガーグアを喰らうジンオウガに向けて、レイリーはそう吐き捨てた。

じりじりと距離を詰める。ジンオウガはレイリーを見向きもしない。餌に夢中で気付いていないというのが楽観的な考え方。必要になれば直ぐに処理できるからこそその余裕の現れというのが悲観的な考え方。

(…悩んでいる時間も惜しいっ)

そう考えたレイリーは、一気にジンオウガとの間合いを詰める。掛かる。

「ぐっ?!」

一瞬だった。ジンオウガはレイリーに視線を合わせる事無く、射程距離に入るや否やその尾で薙ぎ払いを仕掛けてきた。レイリーは

何とかそれに合わせてマスターブレイドで受け止める。しかし。当然相手の力の方が強く、横に吹き飛ばされた。

ダメージは小。剣でガードする際にうまく衝撃を和らげたレイリィは、そのまま空中で態勢を整えて着地しようとした。が。それよりも早くジンオウガがレイリィに向かって跳躍していた。

「ちい」

空中で身を擦じる。その動作をしなければ死んでいたかもしれない。それほどに早く。そして鋭く。ジンオウガの前足が地面に突き刺さった。

地面を転がるようにして少しでもジンオウガとの間合いを広げようと試みる。しかし、間合いが開く前にジンオウガは次の動作に移っていた。先ほど地面に突き刺した前足を軸に、体を円状に回転させる。遠心力も付与された尾が、再びレイリィを襲った。

「うおっ?!」

間一髪。上半身を思いつ切り屈めてそれをやり過ごす。耳には風を切る音が鳴り響いた。あと一瞬遅ければ、首をへし折られていただろう。

レイリィが冷や汗をかきながら視線を上げた先には。

既にジンオウガの姿が無かった。

「うそだろっ?!」

焦って左右を見渡すもその姿は無い。

「馬鹿な?! 姿を晦ますだけの時間目を離れたつもりは

」

そこまで言ったところで。

不意に自分の周りが暗くなるのを感じた。

「上かよっ?!」

力の限り前へと跳躍する。直ぐに後ろで轟音が響いた。それを聞きながら地面を滑る。振り返ろうとした時には既にジンオウガの尾が体にめり込んでいた。

「があっ?!」

とつさに剣を割り込ませて衝撃の吸収を試みるが、不完全。レイリーは面白いほどに吹っ飛ばされ、そのまま地面を転がった。

「……がっ

はっ!!!」

軋む体に鞭を打ち、なんとか態勢を整える。皮肉にも、相手の攻撃を受けてようやく距離が取れた形となった。ジンオウガはゆつくりと立ち上がり、レイリーに視線を向ける。まったく隙の見えない見事な構えだった。

「この野郎……。余裕のつもりか」

レイリーに視線を合わせつつも、飛び掛かって来るような気配は無い。レイリーの様子を伺っているようだ。レイリーは痛みに震える手で、ゲイルホーンに手を掛けた。

その時には。

「かはっ!!!」

ジンオウガが目前まで距離を詰め、その尋常ではない速さにレイリーの身体が硬直した隙を突かれて。ジンオウガの尾が再びレイリーの身体を横に吹き飛ばしていた。

あろうことか崖へと向けて。

レイリーが落ち行く崖から見上げたものは。

対照的に崖上から彼を見下ろす、無双の狩人だった。

第12話 動揺（後書き）

感想等、頂けると嬉しいです。

### 第13話 誤算

「……………助かったか」

レイリーは、自分の当たり前のような発言に苦笑して上を見上げた。

結構な距離を滑り落ちてしまったようだ。咄嗟の判断でマスターブレイドを崖に突き刺し、落下の勢いを殺したところまでは良かったが。落下をそれで食い止めることなど出来はせず、結局崖下まで落ちてしまった。もともと下に用事はあったが、既にガーグアも台車もない。どうしたものかと考えていると…。

ぱしゅっ

また新しい閃光玉が放たれたようだ。遙か遠くの上空でその光が放たれた。アリサはきちんとレイリーの言いつけを守り続けている。ここら一帯で目立つところからしつかりと。

そこまで思考を巡らせて、レイリーの顔から表情が抜けた。(もともとレイリーは表情豊かではないが、あくまで表現として)

アリサはこの付近でも目立ちやすい場所にいる。

しかもその場所で、自分の位置を遠くまで知らせるかのように合図を送り続けている。

「まずいつ!!」

軋む体に構わず起き上がる。こんなところで休んでいる暇はない。レイリーはたった今、この真上でジンオウガと戦っていた。そこから見える位置で、アリサは合図を送り続けている。ジンオウガがそれに興味を示さないという保証はない。

「崖下で探し物なんてしてる余裕ねえだろ!!」

そのままアリサの合図とは反対方向に走り出す。ここから真上を目指す事も不可能では無いが、時間が掛かりすぎる。もう少し傾斜が緩やかなところまで行く必要がある。

「くそっ。こういった可能性も考慮すべきだった!!」

自らの失態に毒を吐きながら走る。  
無意識のうちに。自分がどれだけアリサの安否を心配しているかに気付かぬまま、レイリーは走り続けた。

「絶対お宝だつて！ 間違いねえよ！！」

「んなわけあるかよ」

「おいお前らあ」

斧と木材を担いでユクモ村へ戻って来た男2人に、ラクロウが声を掛けた。

「おう、ラクロウ。どした？」

「今、お宝つて言ったか？」

「いやいや、こいつの勘違いだから」

「んな事ねえつて！！ ふつう考えられねえだろう？」

「ちげーよ。たぶ」

「だから何の話をしてんだつて聞いてんだよ」

2人で勝手に盛り上がる様を見て、ラクロウは不機嫌そうに割り込んだ。

「いや、伐採場つて結構高いところあるだろ？」

そこから見えたんだよ。

古龍観測隊の気球が不時着まがいな事するのが

「不時着う？」

「だつてあの付近つて水没林だぜ？」

古龍観測隊の目ぼしいものなんて転がってないだろ」

「だからつてお宝に繋がるはずねえだろ」

「それ以外にあそこに下りる理由ないだろ？」

別に気球の調子も悪そうには見えなかったんだしよあ」

「またもや2人で言い争いを始める。」

確かにそれだけでお宝と決めつけるべきではないが  
とラクロウが考えていたところで。

「おい、ラクロウ。そういやお前のおやっさんカンカンだったぞ」

「そうそう。」

俺らが伐採場に行く前、箒持って集会浴場の前ウロウロしてたし」  
「……………まじかよ」

結局。その問題は棚上げされる事となり、ラクロウは死刑宣告を受けに集会浴場へと向かった。

生々しい音と共に血が吹き荒れる。鮮やかな紅の液体は、地を、葉を、木を汚す。もう何十匹仕留めたか分からなかった。それほどまでに膨大な量のフロギイを狩っても、まだ茂みから伺う気配は消えない。

レイリーはその気配に益々の苛立ちを募らせていた。

『よりによつてこんな時に』

そのセリフは、まさしく今この時の自分の為に作られた言葉だろう。そう思い違つる程に。レイリーを取り巻く環境は、悪化の一途を辿っていた。

「いちいち寄つて来るんじゃねえよ!!」

一太刀で斬り捨てる。マスターブレイドを振るう際も、足は止めない。迎撃の度に立ち止まっていたら、日暮れになつても上へ辿り着けないだろう。

落ちた場所がたまり場だったのかどうかは定かではないが、明らかにフロギイたちはレイリーに敵対心を抱いていた。好戦的と言い換えてもいい。ともかく、なぜこんなに付け狙ってくるのかと叫びたくなるほどに、レイリーは執拗な追撃を受けていた。

また1匹フロギイが死に絶える。しかし、レイリーの周りを並走するフロギイの数は一向に減る気配を見せない。むしろ1匹仕留めるたびに数が増えているようにも見えた。その様子を探って深々と溜息を付いたレイリーは、更なる気配に遂に足を止めた。

前方の茂みから、このフロギイたちの長だろう。ドスフロギイが2頭姿を現す。

「ははは」



それを視認したレイリーは、思わず笑ってしまった。

「……………こんなにイラついたのは久しぶりだ」

ざわっと周囲の空気が揺らぐ。大して知能を持たぬフロギイたちですら、その“異変”を感じ取った。やっと出てきたわりには、長2匹は近づいて来ない。周りのフロギイたちもレイリーに飛び掛かる事を恐れるかの様にじっとしたままだ。

「どうした？ ……やらないのか」

言葉の通じぬ獣相手に問う。無論、答えが返ってくるとは思っていない。

レイリーはマスターブレイドを構えた。

「こつちも急いでるんだ。お前ら全員を相手してやる暇はないんだが」

ゆらりと体を揺らしたところで、

「レイリーさんっ！！」

何処かで聞いたような声が聞こえた。レイリーが止めようとする暇もなく。

「抜刀術・弐の型“風斬り”！！」

レイリーがその声の主を視認した時には、既にドスフロギイの頭が宙に舞っていた。遅れて鮮血が噴き出す。突然自分の横に居た仲間がやられ、もう片方のドスフロギイが怯む。

その隙を見逃すほど、レイリーはお人好しでは無かった。（そもそも相手は人では無い。）

「余所見すんな」

ドスフロギイが振り向くよりも早く。マスターブレイドはドスフロギイの心臓を的確に捉えていた。ドスフロギイの口から血が溢れる。その様を見つつ、レイリーはゆっくりと傷口を抉るように引き抜いた。

2頭のボスが地に伏したところで、周囲のフロギイたちが騒ぎ出した。どうやらボスが居なくなつた事で統制が取れなくなつたようだ。追い払う必要もない。直に逃げ出すだろう。

それを追撃しようと太刀が鈍い光を放ったところで、  
「やめとけ」

これ以上は時間の無駄だと、レイリーは乱入者の腕を掴んだ。

「なぜお前がここにいる」

突然駆けつけたピンク色にレイリーが問う。

「な、なぜって……。そんな冷たい態度取らないで下さいよう……。」「  
マリイが今にも泣きそうな声でそう返す。

それを見たレイリーは無性に自分がイラつくのを感じた。

別に助太刀した事自体は悪くない。俺の獲物だと喚く性分でも無い。

ただ、マリイがここで参入した事によって全てが台無しになってしまった。アゲハからのクエスト依頼書には明記されていなかったが、今クエストの参加資格を有するのはレイリーとアリサのみ。部外者であるマリイが手を出してしまった事で、既にジンオウガを期限内に狩ろうが賭けは負け。

一瞬明記されてない事を理由にしたらばっくれてやるうかとも思ったが、そもいかない。マリイの参戦はもう1つ。こちらは完全に明記されている条件を破っている。

それは、装備。マリイは相変わらずギルドの制服を身に纏っている。条件の？には「防具はユクモノ」としっかり明記されている。この時点で完全に勝敗は決してしまった。

無意識のうちに怒気が漏れていたのだろう。それにマリイは敏感に反応した。

「……………レ、レイリーさん？」

「……………」

自分がどれだけ愚かな事をしようとしていたかに気付く。

過程や結果はどうあれ、マリイは善意で今回の行動を起こした。

そして大なり小なりレイリー自身、その恩恵を被っている。ここでマリイを罵倒する事がどれほど馬鹿らしい事かに気付いたレイリー

は、全てを溜息に代えて吐き出し、無言でマスターブレイドを鞘に納めた。

「あ、あのう……」

ぷるぷると震えながらマリーが上目づかいにレイリーを見る。

レイリーはそれを毒気の抜かれたような表情で受け止めると、

「助かった。ありがとな」

くしゃつとそのピンクの髪を撫でた。

「あ………。えへへ」

嬉しそつに顔を綻ばせる。さつきまで泣きそうだった奴が現金なものだと、レイリーは苦笑した。

「で？ ここには何をしに来たんだ？」

「あ。それはっ……」

「おい。嬢ちゃん！

頼むから置いて行かないでくれよ……！」

マリーのセリフを遮るかのように、1人の男が茂みから顔を出した。服装から察するに、古龍観測隊のメンバーだろう。その男はマリーと一緒にいるレイリーを見ると、驚いたように声を上げた。

「アンタ、生きてたのか？！ 凄いな……！」

「……何の話だ？」

レイリーが訝しげに問う。

「レ、レイリーさんがモンスターと戦って、崖から落ちたところを見たんです……！」

「そ、それで急いで着陸してもらって……」

「やるなあ。近頃のハンターって奴は大したもんだ……！」

「……あれを見ていたのか。」

「………ん？ 着陸と言ったか？」

レイリーの問いに、マリーが首を傾げる。

「そうですけど」

レイリーは一緒にいる古龍観測隊の男を見て合点がいった。

「ここへは気球で来たのか？」

「ああ。この嬢ちゃんがお前さんが崖から落ちたのを見たつていうからよ。

とりあえずその付近で着陸したつてわけだ。

まだ随分と遠い位置だつたつてのに、嬢ちゃんは良く見えたもんだ」

「もともと観測隊の方々をお願いしたのは、

レイリーさんたちの荷物を落としてしまった場所の探索だつたんですけど。

そこへ行く前にレイリーさんが

「マリーの説明を遮るかのように、レイリーはマリーの肩を掴んだ。

「でかした」

「え？」

「悪いが、アンタに連れて行って貰いたい場所がある」

マリーの呆けた表情を尻目に。レイリーは観測隊の男に向き直つた。

「こ、これは……………」

レイリーとマリーはそれを見て絶句した。

アリサにベースキャンプを敷くよう命じた場所は、見るも無残な状態と化していた。張られていた簡易テントはビリビリに破れ、それを支える骨も折れている。携帯食料をと置いていたケースは粉々になって辺りに散らばり中身もぐちゃぐちゃ、閃光玉を入れていたケースは欠片すら残っていない。

ところどころに付着している赤いものは、おそらく血痕だろう。想像を絶するほどの惨劇があつた事を伺わせるには十分な色を放つていた。

「ここが兄ちゃんのベースキャンプだつた場所かい。

居ないうちに随分と好き勝手やられちまつたようだなあ」

レイリーたちを運んできた気球から降りてきた観測隊の男が言う。

「……………アリサ」

無意識のうちに呟いた。最悪の結果が頭を過ぎる。

「……………え？」

アリサさんって……………ここにいらしたんですか？」

マリーも状況を察したのだろう。震える声でレイリーに問う。

それすら耳に入らず、レイリーは駆け出した。似合わぬ大声で叫ぶ。

「アリサア

！！ 居ないのか？！」

きよろきよろと辺りを伺う。自分の鼓動がやたらと五月蠅い。かなり焦っている自分がいる、という事だけは冷静に考える事ができた。そういつた正常に機能していない思考だったからこそ、気配を探るという選択が取れなかったのだろう。その結果はあらぬ展開へとレイリーを導いた。

「アリ

」

「あら、レイ。もう戻ってきたの？」

レイリーが再び叫ぼうとしたところで、茂みからアリサが顔を出す。

不意を突かれ、レイリーは完全に固まってしまった。

「どうしたの？ そんな面白い顔して…」

って、貴方怪我してるじゃない！！」

ぶわつとアリサが捕まえていた光蟲が宙を舞う。どうやらそれを捕まえる為に茂みに潜っていたらしい。しかし、脳内での優先順位に変動が起こったようだ。瞬く間に1位に浮上したレイリーに負け、手に入っていた力が抜けた隙に光蟲が一斉に逃げ出した。それに構わず、アリサがレイリーのところへと駆け寄る。

「言ったわよね、私！！ 怪我をしたら

」

アリサの言葉が急に途切れる。

レイリーが抱き締めたからだ。今までアリサの方からレイリーを抱きしめる事はあっても、逆は一度もなかった。急な出来事にアリサは自分の現状を把握できず、びしっと固まってしまった。

「わわわわっ?!」

マリーが後ろでわたたとし始めるが、レイリーもアリサもまったく気付かない。

「レ、レイっ?!」

「…無事で良かった」

レイリーは滅多に出さぬ穏やかな声で、そう言った。

## 第14話 達観

「ねえ〜。レイ〜」

「五月蠅い。黙れ」

「あわわわわ…」

完全に調子づかせてしまった。レイリー・マリー・アリサが無事合流して少し。レイリーの予想外の行動に固まっていたアリサだったが、どうやらやっと実感が湧いてきたらしい。レイリーが体を離すのと同時に、今度はアリサが抱き着いてきていた。

「いい加減に離れる」

「私はもつと先に進んでも構わないのよ？」

「さ、先っ?! 先ってどっちですかあ〜?!」

目をぐるぐる回しながらマリーが喚く。そこでようやくアリサはレイリーの後ろに何かが居るのに気が付いた。

「あら。貴方居たの？」

「いましたよっ!!」

マリーが怒ったように叫ぶ。

「最初から、ずうつとレイリーさんの“傍に”居ましたっ!!」

不自然に1単語だけ強調するように続ける。それにアリサはピクツと眉を動かした。

「最初から傍に居たのは私よ」

「アリサさんは虫集めで忙しいんでしょっつ!

レイリーさんの傍には私が付いていてあげますから平気ですっ!!」

「な、なんですって〜?!」

「うるせー」

レイリーが心底面倒くさそうに呟く。古龍観測隊の男に目を向けた。

「済まないがもう一仕事頼まれてくれるか。」

お代はきちんと上乘せしよう」

「何すんだ？」

観測隊の男が問う。

「このピンクの女を連れて、気球でこのまま下へ下ってくれ。そこに先日ここから落下した俺たちの荷物の残骸があるはずなんだ。」

全てを回収して欲しいとは言わない。ガラクタは必要ないからな。使えそうな物だけを回収して、この先にあるユクモ村に届けてくれ」

「ピンクの女って何ですかあ?!」

「お、おう。そりゃあ構わないが」

「金はこれだけあれば足りるか？」

レイリーは紙とペンを取り出し、報酬金を記入した。

「はっ?! いやいや兄ちゃん。これだけ貰えりゃあ十分だが…」

「ユクモ村の村長・アゲハと俺は短期専属契約を結んでいる。」

また、俺のギルドカードは現在、ユクモ集会浴場のギルドに預けてある。」

俺の身分確認はそちらで取ってくれ。ユクモのレイリーと言えば通る」

「わ、わかった。つか、1ついいか？」

レイリーってもしかやとは思うんだが…。兄ちゃん？」

「おそろくお前の想像通りだろう。」

さっさと頼む。俺とアリサは一仕事しなければならなのでな」

「一仕事って、もしかしてさっきレイリーさんが崖の上で戦っていた…」

「はあっ?! レイ!!! 貴方まさか私を置いてクエストを」

「うるせーよ。耳元でわんわん吠えるな。」

会ったのは偶然。それにあれから結構時間が経っちまっている。

探索はやり直しだな」



「じゃあ、貴方その怪我はっ!!」

「んじゃ、よろしく頼むわ」

「了解。ひとまず目ぼしい物だけ回収して、ユクモ村に送っちまうわ。」

あつちに俺のギルドバンクの口座番号を書き留めとくからよ」

「ああ。遅くても明後日までに入金しよう」

「分かった。じゃあ嬢ちゃん、行こうか」

「ま、待って下さい!!」

私もレイリーさんたちを手伝います!!

レイリーさんを崖から突き落せる程の実力なんです!!

私の力が

「レイっ!! 崖から落ちたってどういう事?!」

「うるせー!!」

今度はレイリーが吠える番だった。

「クエストの依頼主からの条件付けで、俺とアリサしか受けられない。」

だからお前を連れて行く事はできない。

ただ、この場に居てくれたのは助かった。

俺たちの落ちた荷物を任せる。あの男と回収し、ユクモ村に届けてくれ。

それ以上は必要ない」

「……………で、でもっ」

「俺は、それ以上を必要としてない」

「っ」

きっぱりと言い切る。マリーはまだ何かを言いたげだったが、口を噤んだ。

「いけ」

レイリーが言い放つ。それに小さく頷きマリーは男と気球へと向かった。

それを傍観していたアリサが寄って来る。

「……………何かあったの？」

「言つたらう。雷狼竜に襲われて崖から落ちただけだ」

「違つわ。それだけじゃない。何かイライラしてるみたいだから」

「……………」

レイリーは思わず目を見開いてアリサを見た。

まさかここまで洞察力が鋭いとは。相手がレイリー限定ののだが。

「……………賭けに負けた」

ゆっくりと浮上し始める気球を尻目に、レイリーがぼやいた。

「はあ？ 何言つてんのよ。」

期限はあつても経過の勝敗は書かれてなかったわよ。

一回負けたくらいで賭けに負けるハズが

「違つ。マリーが俺の戦いに手を出した。」

もつこのクエストの参加者は俺とお前だけじゃなくなつたって事

だ

「……………確かにアゲハ言つてたわね。参加はレイと私だけを認める  
つて。」

でも契約書見てごらんなさい。そんなの書かれていないじゃない。

書き忘れた方が悪いのよ」

「俺も最初はそう思つたさ」

レイリーは徐々に高度を落としていく気球を崖の上から眺めながら  
言つた。

「しかし、契約違反には変わらない。それに。」

どちらにせよ名文上の条件も破つてる」

「何をよ」

「条件？ 『防具はユクモノ』。」

マリーが着ていたのはギルドの制服だ」

「……………」

アリサは無言で双剣に手を伸ばした。

「何してる？」

「あの女を殺そうと思つて」

「おいおい、よせ」

双剣を引き抜いて、本気で崖から飛び降りる構えを見せるアリサを止める。

「平気よ。まだそう下りてない。うまくバルーンの上に着地できる自信があるわ」

「そういう問題じゃねーよ!」

「じゃあ何?!」

アリサが振り返る。

「貴方らしくないわ!!」

何よ、あんな女に振り回されて!!

そんなにあの女が気に入ったわけ?!」

「アリサ」

「っ?!」

レイリーの声色が変わったのを聞き、アリサが唾を飲み込む。

「俺は崖下であいつに助けられた。

そしてこの短時間でアゲハのクエストに専念できるようになったのは、

紛れもなくあいつのお蔭だ。恩恵を受けた以上、文句を言う事は許されない」

「……………」

「ひとまずは雷狼竜狩りだ。

情報は、また別の手段で聞き出すさ」

「もう賭けに勝ちがないと分かっても、クエストは続けるのね。

それもやっぱり貴方らしくないわ」

震える声で反論するアリサに、レイリーは背筋がぞっとするような冷笑を向けた。

「いや、十分に“俺らしいさ”」

くつくつくと笑いを漏らしながら、散らばった中で使える道具だけを拾い始める。固まっているアリサを一瞥してこう告げる。

「雷狼竜を狩るのはクエストの為じゃねえ…。」

俺があいつを殺したいからだ。

俺を崖下に突き落とすやがった、あいつをな」

ひとまず入り用な物のみを回収し、レイリーとアリサは出発した。ガーグアと台車が消えてしまった以上、ここまで持って来た荷物そのままを手持ちで持って帰るのは不可能。そもそも壊れてしまったテントなど、もう邪魔になるだけだ。そういった物は早々に見切りを付ける事にした（別称：放置。環境破壊ともいう）。

レイリーは閃光玉は使えると思っていたので、アリサにそれを大量に仕舞っていたケースの安否を尋ねると、どうやらケースごと崖下に落ちてしまったらしい。

あの時、レイリーが出發してしばらく。アリサが指定通りに閃光玉を放っていると、突如ルドロスの群れの襲撃を受けた。相手の強さは大した事なかったらしいが、問題だったのはその数。次々に襲い掛かるルドロスは、ベースキャンプ・食料等を見境なく襲ったらしい。1匹1匹が如何に弱くとも。1人では一度に相手できる数には限度がある。徐々に徐々にテントはぼろぼろにされ、荷物はぐちゃぐちゃにされた。

そんな中1匹のルドロスが、閃光玉の入ったケースを崖下に落としてしまった。それに怒り狂ったアリサは（アリサにとって問題なのは、閃光玉を落とされたという事ではなくレイリーの言いつけを守れなくなったという事）、その場にいたルドロスを問答無用で追い払った（別称：動物虐待）。テント等に付着していた血は、その時のものだという。ここでは、その後のルドロスの安否については一切触れないものとする。

アリサがレイリーの呼びかけの際、光蟲を集めて回っていたのは閃光玉を1から調査し直す為。ベースキャンプ壊滅まで追い込まれてなおレイリーの命に忠実に応えようとするアリサに、レイリーは何と声を掛けたいかが分からず。結局その事については何も話さなかった。

「ようやく溪流まで戻って来たか」

既に日は沈み、月光が辺りを照らしている。

「この明るさでターゲットを探すのは酷よ」

「見て捉えるな。感じて捉える」

「それが出来るのは貴方だけよ」

呆れ顔でアリサが答える。レイリーは目を閉じて周囲の気配を伺い始めた。

アリサはそれを黙って待つ。

アリサはいくら自分が気配を探っても、レイリーのようにいくとは思っていない。せいぜい水の流れる音や虫の鳴き声、木々のざわめきが聞こえる程度だろう。だからこそ今この時自分が出るレイリーへの協力は、ただ黙っている事なのだと思っていた。

「……………この付近には居ないな」

「そう。じゃあ場所を代えましょう?」

レイリーに続いてアリサが歩き出す。

「ま、俺のもあてになるかは分らんがな」

「何? 急に。随分と弱気な発言に聞こえるんだけど」

「いや。あいつと対峙したのは2度目だったんだが。」

いくら“呼吸”を読もうとしても、一向にあいつの考えが分からなくてな」

アリサの問いに、レイリーは目を合わせずに答える。

「“呼吸”が読めない?」

「ああ。逆に俺の心があいつに読まれているのかもしれない。」

読もうとしているこちらの考えすら見透かされているような…………。

そんな気分にさせられる戦いだっただ」

「……………」

「どうした?」

急に黙りこくったアリサに気付いて、レイリーが足を止める。

「……………私は貴方と違って特別な人間じゃないし、

貴方の言う“呼吸”がどういったものかは分からないけれど……」

「俺も特別ななんかじゃねえよ」

「それでも」

「無視か」

「貴方がなぜ読めなかったのかくらいは分かるわ」

「……………は？」

アリサの予想外過ぎる発言に、レイリーは間抜けた声を出した。

「それは貴方が戦いの中で、“駆け引き”に負けたからよ」

「駆け引き？」

「ええ。貴方ほどじゃないにせよ、私たちハンターはモンスターと対峙する際、

今相手は何がしたいのか。次に相手は何をしてくるのか。

そういったちよつとした事くらいなら推測しながら動いてるわ。

考えなしに動き回るのは、只の無能のやる事だしね」

「お前の乱舞ってそういう技だろ」

「今話してるのは私よ」

ぎろりと睨まれる。

アリサのターンらしかった。

「“読み合い”と言い換えてもいいわ。

お互いの手の内を読み合っつて言えばいいのかしら？」

「……………！」

その言葉ではつと来た。

何かを掴んだのが分かったのだろう。レイリーの顔を見て、アリ

サがくすつと笑った。

「貴方はその特殊な才能故に、

どんな相手であろうと常に達観して対峙する事が出来ていた。

些細な気配すら逃さない洞察力が、それを可能にしていた。

けれど

「ようやく俺と同じレベルの奴に出会えたって事が」

レイリーの言葉にアリサが頷く。

ジンオウガはゆっくりと立ち上がり、レイリーに視線を向ける。まったく隙の見えない見事な構えだった。

『この野郎……。余裕のつもりか』

レイリーに視線を合わせつつも、飛び掛かって来るような気配は無い。

レイリーの様子を伺っているようだ。

あの時の光景が脳裏を過ぎる。確かにそうだ。相手の動きを伺いながら構え、相手の動きに応じて自分の手を決める。あの攻撃スタイルは。

「俺の戦術と、全く同じ」

胸がざわつくのを感じた。怒りからではない。無論、恐怖からでもない。

レイリーは知らず知らずのうちに握りこぶしを作っていた。その様を、横で控えるアリサは穏やかな笑みで見つめていた。

1度目の出会いはユクモ村に向かう雨の中。天候のせいと見切りを付けたが、勝てないと思わされた以上それは敗北だ。

2度目の出会いは昼の水没林。攻撃する暇すらも貰えず、文字通り完敗した。

笑みが零れる。来る戦いに向け、心が躍るといのは初めての経験かもしれない。

「先2勝は譲ったが、そこまでだ。次は俺が勝つ」

「俺“たち”ね」

アリサはウインクしてそう付け加えた。

## 第15話 月光の下で

「……………静かだな」

「そうね。世界に私と貴方しかいないみたい」

「…静か過ぎる」

「……………何かしら返して欲しかったわ」

アリサが口を尖らせる。レイリーはそれに見向きもせず、周囲の気配を伺った。

「……………」

「……………どっ？」

「さっきよりも“呼吸”が荒い」

「つまり？」

「何か焦っているか。怯えているか。」

よく分からないが、少なくとも平常とは程遠い気配という事だ」

「そう？　じゃあ、私たちにとっては朗報という事でいいのかしら」

「さあてな。」

……………構える。アリサ」

レイリーがゲイルホーンを抜く。

「あら、本当に当たり？」

驚きながらアリサがギルドナイトセーバーに手を掛けたところで「来るぞ」

レイリーの言葉とほぼ同時に、“それ”は前方の茂みから飛び出してきた。

「…ア、アオアシラ？」

アリサの言う通り。アオアシラが全速力でこちらに向かって走ってくる。

「真正面から挑んでくるなんてね。いい根性してるわ」

そう言いつつギルドナイトセーバーを抜く。

「いくわよ」

「



「……ちよつと待て」

アリサが地面を蹴ろうとしたところで、レイリーが手で制す。

「な、何よ？ あいつこつち向かって来るわよ？」

「いいからこつちへ来い」

「ちよ、ちよつと？！ レイっ！！」

アリサを茂みに連れ込む。

「レ、レイ？ 確かに私はいつでも貴方を受け入れる覚悟はあるわ？  
で、でもね。今はちよつと流石に無いんじゃないかと  
無いのはお前の頭だ。」

どんな素敵な勘違いをしているかは知らんが、とりあえず黙れ」  
そう言つて茂みの外へと目を向ける。アリサもそれに倣つた。丁  
度目の前をアオアシラが通り過ぎて行くところだった。

「こつちに気付いてなかつたのかしら？」

「いや、それは無いな。完全に奴の視界には入っていたはずだ」

「暗くて見えなかつたとか」

「否定は出来ないが、おそらくそれも違うだろう。」

通り過ぎる時の奴の感情を捉えたか？

かなり焦っていたようだったが」

「“呼吸”の話をされても付いていけないんだってば」

“呼吸”じゃなくても分かつたろう。」

奴の表情・仕草。それから

「言い方を変えるわ。貴方みたいに洞察力が鋭く無いの」

「言い方を変えよう。お前は観察力が無さ過ぎだ」

「……」

「……」

2人が沈黙したところで、何やら耳障りな音が聞こえた。

「……聞こえたか？」

「……ええ。バチつて音が」

お互い顔を見合わせる。

「今度こそ当たりかもな」

「そうね」

「ちよつと待て」

茂みから飛び出そうとしたアリサの腕を掴む。

「何よ。当たり前ならさっさとやっつけてしまっにに限るわ」

「それはお前の言う通りだ。」

「だから最初は、俺に任せろ」

「……………何ですって？」

アリサの眉が吊り上る。

「まさか一人で討伐したいなんて考えてないでしょうね」

「いや、考えたがそれはしない。」

あくまで序盤だけだ」

「なら一緒に行ったって」

「一度落着け」

徐々にバチバチという音が大きくなっているのを聞きながら、レ

イリーはアリサに向き直った。

「お前は言っただな？」

俺が奴の“呼吸”を読めなかったのは、“読み合い”に負けたか

らだと」

「…ええ」

「ならば、序盤で戦うべきなのは俺だけだ。」

最初の“読み合い”でハンデをお前が負っているならば、お前は

出てくるべきじゃない」

「そんな」

「安心しろ。ずっと見てると言っつもりもない。」

必ず俺が流れを掴む。そしたら奴に奇襲を掛ける。

そこからは2対1だ」

「……………」

「まあ、これは表向きの理由だがな」

「？ じゃあ裏の理由は何なのよ」

「決まってる」

レイリーはゆっくりと立ち上がる。振り向き様にアリサに向かって告げた。

「借りはしっかり返しとかないとな」

音が大きくなるにつれて、周囲もぼんやりと明るくなりだした。

別に夜明けを迎えたわけではない。雷光虫だ。放電する能力を持ったその虫は、パチツと弱い電気を帯びながらレイリーの真正面の茂みへと次々に姿を消していく。

レイリーは何も構えることなく、ただそれをじっと見つめていた。

（共存……か。雷狼竜。

前の戦いでは一度も雷を纏わなかった。

それは余裕の表れかと思っていたんだが……。

正確は、こいつらがいないと雷は纏えない。

そういう事だったのか）

そこまで考察して、軽く舌打ちする。

（つまり俺は、絶好の狩猟タイミングを逃していたという事になる）

それと同時に、レイリーはにやりと笑った。

（どれだけ焦っていたんだか。笑えてくるな）

前方の茂みが、ぼんやりと大きな青白い光を帯びる。

「来たか」

レイリーはそう呟いた。

それは悠然と。堂々たる様で。ゆらりと姿を現した。初めて会った時と同じく、体には青白い雷を纏っている。帯電した体はその雷で淡く光り、幻想的な空気すら感じられた。

向こうもレイリーを視認したようだ。ピクリと顔を上げて足を止めた。お互いに向き合う形となる。

「よお。また会ったな」

レイリーは明るい声でそう告げた。ジンオウガは何のリアクションも示さない。こちらの気配を伺っているようだ。

「……………」  
お互いに一步も動かない。辺りは風で木々が揺れる音。川の流れる音。雷光虫の羽音しか聞こえない。レイリーは完全に体の力を抜いていた。微塵も自身の心を相手に気取られぬように。

(改めて相対してみると、やっぱりやるな。こいつ)

リラックスした頭でジンオウガの“呼吸”を探る。乱れ1つない、見事な構えだった。

こんな上物に出会えるとは。レイリーは不気味な笑みを浮かべた。  
瞬間。

ジンオウガが地面を蹴った。目で追えぬ程の速さでレイリーの真上に跳躍する。

しかし、そこに到達する前には。レイリーがゲイルホーンを打ち放っていた。

「弓術・“かみかせ神風”」

レイリーが初めて弓を手にしたのはわずか7歳の時。その日から1日たりとも弓を手放した日は無い。もはや体の一部のように扱う弓術は、一切の無駄の無い動きを生み出し既に神速の域に達していた。

構えから射出までの動作を瞬く間に終わらせたレイリーの矢は、跳躍したジンオウガの右肩を的確に捉えた。

しかし、レイリーのゲイルホーンを以ってしても貫く事は出来なかった。

甲殻の硬さに加えて、雷光虫の雷も防御力の一端を担っているのかもしれない。

ただ、軌道を変える事はできた。レイリーに向かって一直線に跳躍していたジンオウガは、矢の威力によって弾かれやや逸れたレイリーの右後方にて着地した。

そして着地した時にはもう、既に次の動作に移行していた。右足を軸に体を円状に回転させる。前回戦った時と同じく、遠心力を付与された尾がレイリーを襲う。

レイリーはそれをバックステップで躲す。その動作を行っている時にはもう、複数本の矢が装填されていた。

「こばう虎砲”」

複数本の矢がジンオウガの体を支える右前足に集中する。一点集中の砲火を浴びて軸足のバランスを崩したジンオウガが転倒する。

レイリーは次の一手を放った。

「五月雨”」

ジンオウガに向けて数多の矢を打ち放つ。その名の通り雨のような攻撃を、ジンオウガは何の行動も取れないまま受け入れた。

パアツとジンオウガの体から光が弾け飛ぶ。どうやら今の衝撃に耐えかねた雷光虫が、ジンオウガの体から飛び立ったらしい。

体に帯びた青白い雷が消える。

「演舞・“舞夜桜”」

そこを見逃すアリサではない。淡々と茂みから隙を伺っていたアリサは、双剣を構え流れるような所作でジンオウガに斬りかかった。しかし、やられっぱなしのジンオウガではない。

自身に近づく気配を察知したジンオウガは、すぐさま尾で薙ぎ払おうとした。

が。

「弓術・“たちかせ断風”」

レイリーからの攻撃がそれをさせない。本来ならば部位の切断目的で放つそれでも、ジンオウガの尾はやすやすと負けたりはしなかった。しかし、軌道は変えられる。

アリサを狙った尾は彼女の髪をかすめるに留まり、アリサの切っ先がジンオウガに到達した。ずばばばと小気味の良い音と同時に鮮血が吹き荒れる。

痛みに呻いたジンオウガが、左前脚を痛みの元凶へと叩き付ける。しかし、その時アリサは既に後方へとバックステップで避難しており、空振りに終わった。

ゆっくりとジンオウガが立ち上がる。

それを眺めつつレイリーが呟いた。

「なかなか硬いな」

ジンオウガに傷を付けられたのはアリサの双剣のみ。レイリーの弓はあくまで牽制程度にしかならず、ダメージは与えられていないようだった。

「接近戦に移行したほうがいいんじゃない？」

少し離れた位置でアリサが提案する。

「ふむ」

ジンオウガを見やる。じつとレイリーを見据えていた。

相も変わらずポーカーフェイスだが、“呼吸”は誤魔化せない。

わずかだが動揺が見て取れた。前2戦を覚えているとは限らないが、少なくとも今自分の思い通りに戦局が動かなかった事に狼狽している様だった。

「こんな敵は初めてか？」

その様子を見てレイリーが笑う。

「奇遇だな。俺もだ」

今度はレイリーから仕掛けた。ゲイルホーンを打ち放つ。

ジンオウガは左に跳躍する事でそれを躲した。着地と同時に地面を蹴る。

瞬く間にレイリーとの距離を詰めてきた。アリサは狙わずあくまでレイリーを狙うらしい。

「勝負を焦ったか？」

ゲイルホーンを宙に放り、マスターブレイドを引き抜く。

ジンオウガの突進に合わせ体を逸らす事でやり過ごす。すれ違いざまに剣の切っ先をジンオウガに突き刺した。鮮血が舞う。左前脚に刺さったそれは、ジンオウガのバランスを崩してまたもや転倒させた。

落ちてきたゲイルホーンをキャッチし、素早く装填する。

「アリサ!!! 尾を切断しろ!!!」

レイリーが矢を打ち放つのと同時にアリサが地面を蹴る。

アリサがレイリーの横を抜ける時にはもう、矢は全て狙い通り尾に着弾していた。先ほどから執拗に攻めていた場所の甲殻が割れる。痛みに呻くジンオウガに、アリサが迫った。

「演舞・“桜威”」

ズバンツという大きな音が鳴る。ジンオウガの悲鳴が轟く。月明かりに赤い鮮血が光る。

ジンオウガの雄々しい尾が宙を舞い、大きな音を立てて地面に落下した。

「下がれ！！　アリサ！！」

レイリーの声に従い、アリサがその場から跳躍する。痛みに身を擦るジンオウガに、無数の矢が着弾した。

「あともうひと押しね。私が仕留めようか？」

レイリーの横まで下がったアリサが問う。

「いや。お前は一回休みだ」

「なんでよ」

「見ろ」

ジンオウガの周りに、再び雷光虫が集まりだした。その肢体に青白い光を帯びる。

「主の危険を察知したか？」

ともかく、あの状態で接近戦は無理だな」

バチバチという音を立てながら、ジンオウガが立ち上がった。

鋭い眼光でレイリーたちを射抜く。

「やっと本気で来る気になったみたいだな」

「あれだけの攻撃を受けておきながら……凄いわね」

アリサが呆れたように呟く。

「ともかく。先ほどの様子を見れば、

奴に攻撃を与え続ければ雷光虫は耐えきれずに体から離れる。

おまえはそこを狙え」

「分かったわ」

そう答えてアリサがレイリーから離れる。

レイリーは再びゲイルホーンを構えた。

「さて。次はどう来るか」

ジンオウガの様子を伺いながら、レイリーはそつと呟いた。



## 第16話 無双の狩人

先手を打ったのはレイリー。

お互いの様子を伺いつつ、じりじりと間合いを詰めていたところを駆け出した。

それに反応してジンオウガも迎え撃つ構えを見せる。

レイリーは走りながら弦を引く。

「いくぞ」

レイリーが矢を放つ前にジンオウガが大きく動く。四足で強く地面を蹴り、跳躍した。

「空中に逃げ場は」

「そこまで言つて口を噤む。」

ジンオウガは宙で回転しながら、レイリー目掛けて落ちてきた。

寸前で察知したレイリーは横へと回避する。直後、後方で凄まじい音がした。

「身軽な奴だ」

振り返った時にはもう態勢を整えている。

ジンオウガは迷わずレイリーに向かって駆け出した。

「そこだ!!!」

レイリーがゲイルホーンを打ち放つ。

放たれた6本の矢は、3本ずつに分かれそれぞれがジンオウガの左右の足に着弾した。

駆け出す動作で足を前に出そうとしたところに逆向きの力が加わり、ジンオウガはつんのめる様にして前へと倒れこんだ。

頭を差し出す形で倒れこんで来るジンオウガに、レイリーはゲイルホーンの照準を合わせる。

「まずは1本だな」

その言葉と共に放たれた矢が、ジンオウガの角を砕く。

ジンオウガの雄叫びが轟いた。再び雷光虫が体から離れて宙を舞

う。

「乱舞・“桜花燦爛”」

アリサが双剣を縦横無尽に振り回す。

狙いはジンオウガだけではなく、周囲の雷光虫も含まれている。

ジンオウガへの攻撃を中心にしつつ、周囲の雷光虫も次々と斬り捨てていった。

「良い読みだ」

要は体に纏わり付いて厄介な仕事をされる前に始末してしまおうという事だ。

それに続いてレイリーが駆け寄る。

前の攻撃で左前脚に刺しっぱなしだったマスターブレイドに手を伸ばした。

柄を握ると同時にジンオウガが吠える。

「返してもらおう」

わざと傷口を抉るように引き抜いた。

呻くように左足を振るうが、既にレイリーは後ろへと跳躍した後だった。

「残念」

その様子を笑いながら再びゲイルホーンへと持ち代える。

すぐさま弦を引くが、その頃にはジンオウガは態勢を整えていた。

「立ち直りが早いわね」

アリサは構わず懐へと潜り込む。

「演舞・“舞夜桜”」

ジンオウガとアリサの初動はほぼ同時。しかしアリサの剣の方が早くジンオウガを捉えた。

下から腹部への攻撃を喰らう。ジンオウガは後ろへと跳躍する事でやりすごした。

「よせ！！ 追うなアリサ！！」

レイリーの言葉に反応し、アリサが足を止める。

直後、ジンオウガの周囲に雷光虫が集まる。

「何よ、この数」

先ほどとは比にならぬ程の量の雷光虫がジンオウガの体へと纏われていく。

眩いばかりの雷光に包まれた。ジンオウガが咆哮する。

“超帯電状態”。今までとは比較にならぬほどの電量を帯びた竜がそこに居た。

「……数が増えたわけじゃない。

雷光虫が活性化している。いや、それだけではないな。

やはり雷狼竜自身にも発電能力は備わっていたのか」

そうでなければ説明が付かぬほどの雷を身に纏っている。

体に纏う電力で、ジンオウガは白くぼやけて見えた。

「マスターブレイドを早めに回収しといたのは正解だったようだ」

あんなものに刺さりっぱなしでは、柄も何も溶けてしまう。

ジンオウガがレイリーへゆっくりと目を向けた。

「呼吸”に乱れが感じられない。

その状態に持ち込めた事で自信でも取り戻したか」

レイリーは吐き捨てるようにそう呟いた。

「だとしたら、大層な過信」

口を噤んで真横に跳躍する。

レイリーが立っていたところを雷の玉が通過していった。

「な、何よ、今の?!」

アリサが驚きの声を上げる。

「おいおい。まさか飛び道具もあったのか?」

レイリーが上体を起こしながら問う。

その時にはジンオウガは既にレイリーの真上に跳躍していた。

真上から雷の玉を吐き出す。

「うおっ?!」

レイリーは何とか転がる事でそれを回避する。

ジンオウガは構わずに上空から突っ込んできた。

「弓術・“神風”」

それをゲイルホーンで迎え撃つ。

ぎりぎりでも軌道を逸らす事に成功し、ジンオウガはレイリーに当たる事無く真横の地面に叩き付けられた。

「虎砲」

背中目掛けて一点集中の矢を浴びせる。

雷光虫はパツと一瞬飛び散るものの、直ぐに元の位置へと張り付いた。

ジンオウガはその場で回転しながら立ち上がる。その際にまた雷の玉が数個放られた。

それを見て躲すレイリー。しかし、その玉の軌道が急に“曲がった”。

「なっ?! アリサ!!!」

レイリーを向いていたはずの攻撃が、いつの間にかアリサ目掛けて飛んでいる。

「うっ?!」

不意を突かれたものの、辛うじて回避に成功する。

その時にはもう。ジンオウガはアリサへと肉薄していた。

「きゃっ?!」

アリサが思わず体を固まらせた瞬間。横から無数の矢がジンオウガを襲う。

1本が目を捉え、ジンオウガはアリサへ到達する前に地面へと転がり落ちた。

「下がれ!!!」

アリサがバックステップでその場から離脱する。

「五月雨」

その直後。レイリーの放った矢が雨のような勢いでジンオウガを直撃した。

しかし、まだ雷光虫はジンオウガから離れない。

「…面倒臭い奴らだ」

後ろ手に新たな矢を取り出そうとしたところで

(…………残弾数が )  
そう気を取られたのがまずかった。

「レイっ!!」  
突如襲来する雷の玉を反射的に掻い潜る。

しかし。アリサの声を聞き、ジンオウガに目を向けた時には既に遅く。

「がっ?!」

気が付けば突進を喰らい、地面に叩き付けられていた。

「レ」

「来るな!!」

「ごほっ」

襲われているレイリーを助けようとしたアリサを咄嗟に止める。  
組み敷く様子上から見下ろすジンオウガに、レイリーは体をそのまま地面に寝かした状態でマスターブレイドを引き抜いた。

咆哮と共にその鋭い爪を振り下ろしてくるジンオウガを尻目に、地に付いたもう片方の足へマスターブレイドを突き刺す。ジンオウガはその痛みに攻撃を中断して咆哮する。

「ぐうっ!!」

雷を纏ったままのジンオウガへ近接武器を用いた事で、体へ電流が流れる。

くらくらする頭を奮い立たせ、レイリーはその場から急いで抜け出し落ちたゲイルホーンに飛びついた。

その後をやや遅れてジンオウガが追う。

レイリーはゲイルホーンを手に取ると、痺れの消えぬ腕のまま力の限り弦を引いた。

「……………これで…終わりだ」

レイリーは至近距離間まで迫ってきたジンオウガ相手に、矢を打ち放った。

「泡沫<sup>うたかた</sup>」

矢がジンオウガの口内へと命中する。

想像を絶する痛みにジンオウガが咆哮を上げる余裕すらなく引つ

くり返る。

体に纏わり付いていた雷光虫がぱあっと弾け飛ぶ。

「終劇・“神楽”」

仰向けに転がったジンオウガの首を、アリサが十の字に切り裂く。その飛び散る鮮血が、勝敗を雄弁に物語っていた。

「レイっ!!」

アリサが叫び声を上げて、ジンオウガと共に地面に伏したレイリーに駆け寄る。

「レイっ!!」

「……うるせー。耳元で叫ぶな」

レイリーが気急そうに呟く。

「動かないで。今応急処置だけ済ませるから」

「その前にクエスト終了の合図玉を放れ」

「貴方の治療が先に決まってるでしょ!!」

「……俺としては、早くAGSが来てくれた方が助かるんだが」

普段はあまりお世話にはならないが、AGSのメンバーはモンスター回収班の他にもハンター治療班が来る。そこをお願いした方が絶対に“体に”良い。

自分の発言を無視していそいそと応急道具を取り出すアリサを見て、レイリーは苦笑せざるを得なかった。

「ジンオウガの討伐。確かに確認致しましたニヤ」

リーダーのコットンがそう告げた。

それをレイリーはAGS治療サポートメンバーからの処置を受けながら。

アリサは顔を真っ赤にして俯かせながら聞いていた。

どうしてそのような構図になったのかは、読者の皆様のご想像にお任せしたい。

「流石ですニヤ。」

まだまだデータの少ないゾンオウガをユクモ村に来てから、この短期間で討伐してしまわれるとは……」

改めて関心したかのようにコットンが呟く。

「レイリー様。ギルドから“お願い”を預かって」

「こいつの死体はユクモ村へ直接搬送してくれ」

レイリーがコットンの言葉を遮るかのように喋る。

「……了解致しましたニヤ」

「あら。レイにしては珍しいわね」

アリサがふと顔を上げて呟く。

「ああ。」

こいつの素材から作られるアイテムには、少し興味が

「っ」

ぎしっという音と共にレイリーに包帯が巻かれる。

「ちよつと貴方たち……！」

レイリーは怪我人なんだから、もっと優しく扱いなさいよ……！」

「……お前がそれを言うのか」

レイリーから白い目で見られ、アリサが再び俯く。

金色の髪で表情は何えないものの、肩がぶるぶるしていた。

どうやら猛省しているらしい。

「処置完了いたしましたニヤ」

治療班がそう告げる。

「ああ」

包帯でぐるぐる巻きにされている右腕を見る。

「かなりの高温で皮膚が焼かれています」

それが一瞬の出来事だったようで助かりましたニヤ。

特製の軟膏を塗っておきましたニヤ。

「極力動かさぬよう」

「わかった」

「体にも打撲等いくつか発見いたしました」

見たところ骨に異常は無いようですニヤ。

但し、こちらも腕と同じくしばらくの間安静にしておく事をお勧めしますニヤ」

「憶えておこう」

レイリーが再度頷いた。

「大丈夫よ。」

貴方が安静にしている間は、私が手取り足取り看病してア・ゲ・ル」

「お前はじつとしてる。それが一番の療養になる」

「けち」

「……………それ、お前の中で流行ってるのか？」

「作業終了致しましたニヤ」

モンスター処理班の1匹が敬礼しながら告げる。

それを聞いてコットンがレイリーとアリサに向き直って一礼した。

「以上で処理は終了致しましたニヤ。」

ジンオウガの死体は、レイリー様のご希望通りこれからユクモ村へと搬送致しますニヤ」

「そうしてくれ」

「レイリー様の担架もご用意できますニヤ？」

「いらん」

そう答えるとレイリーは立ち上がった。

体の痛みにも多少顔をしかめるが、それだけ。普通に歩き出した。

「折角だから乗せてもらえばいいのに」

「何が悲しくてクエスト達成後にギルドに搬送されにやなんのだ」  
AGSのメンバーに後を任せてユクモ村へと足を向ける。

月明かりに照らされた溪流は、ようやく静寂を取り戻した。



## 第17話 “3人”

ユクモ村に到着したのは、夜が更けてからだった。

レイリーが体に怪我を負っていた為、どうしても歩くペースが遅くなってしまったからだ。

途中。アリサは何度も手を貸そうかと打診したが、レイリーによって全て断られていた。

既にユクモ村の者どもは就寝の時間になっているのか、何時もの活気はなりを潜め静寂が村を覆っていた。とはいえ、全ての機能が停止しているわけではない。先にアオバが述べたとおり集会浴場は24時間営業だ。提灯から漏れる明かりが、ユクモ村を幻想的に照らしていた。

「何が鬼門番なんだか。鬼が聞いて呆れるわ」  
アリサが毒づいた。

「まあ、あいつにも休養の時間は必要なんじゃないのか」

「…務めない時間あるなら門番なくてもいいじゃない」

「俺は最初からそう思ってた」

そう軽口を叩き合いながら石段を上る。

2つめの踊り場へと足を踏み入れたところで、前方から声が掛かった。

「お疲れ様でした。レイリー様。アリサ様」

闇夜の中、提灯の明かりでぼんやりと照らされているのは、この村の村長・アゲ八だった。いつも通りの席に座りながら、優雅にレイリーたちを見ている。

「アンタ、何時もこんなに遅くまで外にいるのか？」

「いいえ？ なんとなく…」

なんとなく、貴方がたが帰ってくるような気がしてましたので  
ひらひらと舞う紅葉を手で受けながらそう言う。

「……超能力者じゃない？」

「少なくとも竜人族に未来視をする能力は無かったはずだが……」  
「ふふふ。本当にお二人は面白い会話をなされますね」

暗闇の中、アゲハがクスクスと笑う。が、直ぐに表情を引き締めた。

レイリーは本題に入るのだと直感した。

「アリサ。お前は先に宿舎に帰つてろ」

「は？ 嫌よ。貴方と一緒にいるわ」

「帰っておけ」

「怪我人の貴方を放っておけるわけな」

「帰れ」

「なっ?!」

強い口調で遮られ、アリサが憤慨する。

「何だよ!?!」

「ここから先の話は、お前に聞かせたくないからだ」

「どういう意味よ!?!」

「そのままの意味でとってくれ」

「っ!?!」

「……………」

言葉にならない憤りがアリサの口から洩れる。

レイリーはそれを冷めた目で見つめた。

「……………私に“は”？」

「お前に“も”、だな。」

俺はこの事について、誰にも聞かせる気はない」

「……………」

「……………」

少しの沈黙。そして。

「分かったわよ!?!」

帰ればいいんでしょう?! 帰れば!?!」

アリサは怒り狂ったまま身を翻した。

自宅に向かい歩き始めるものの、数歩で一度立ち止まる。ぎろり

と視線をレイリーに向けた。

「今は話を聞かないけど…」

貴方1人で危険なところへは絶対に行かせないから!!」

そう吐き捨てて駆け出した。直ぐに自宅に入り、凄まじい音を立ててドアを閉める。

辺りに静寂が戻ってから、レイリーは改めてアゲ八に向き直った。

「よろしかったんですの？」

もう少し言い回しを

「余計な世話は結構。済まないが、聞き流せる状態じゃない」

レイリーのセリフを聞いて、アゲ八は「貴方が良いのでしたら」と告げるとさっそく本題に入る事にした。

「まずはお疲れ様でした。

ジンオウガの討伐を成功なさったようですね。

流石に無傷とはいかなかったようですが…」

怪我の具合は平気ですか？」

「問題ない」

素っ気なく伝える。

それに特に気分を害する事はなく、アゲ八は続けた。

「期限を2日間とお伝えしましたのに、

まさか1日で討伐を完了させてしまうとは…」

予想外のスピードでしたわ」

「それでも。俺たちが帰ってくる予感がしていたんだろう?」

「ええ。そうですね」

アゲ八がクスクスと笑う。

「さて。賭けの話ですが…」

その単語を聞いて、レイリーが渋い顔をした。

「あら? どうなされたのですか?」

「……………結果は聞かずとも分かっている。

ギルドの使者・マリーが介入した事で、

俺たちはクエスト達成の条件を満たせなかった」

「はて。何の話でございましょう？」

「敢えて分からない振りをしているのか。」

レイリーはイラツとするのを感じた。

「アゲハから発せられたのは想像していない答えだった。」

「賭けは貴方がたの勝ちですわ。」

「クエスト達成条件は全て満たしております。」

「……は？」

レイリーは訳が分からないという顔をした。

「その一件なら、夕刻にこの村を訪れた古龍観測隊の方から聞いております。」

貴方がたが水没林で自身の荷物を探索している時に、一度合流したと

「分かつていないじゃないか。だから」

「ええ。そうです。」

貴方がたが“自身の荷物を探索する”という、私が依頼したクエストとは“別の用件”をこなしている最中に合流した、とね

その言葉を聞いて、レイリーは目を丸くした。

「話を聞けば、そこで一度マリー様と共闘するものの、

その後改めてゾンオウガ討伐に向かう際は、きちんとお2人で向かわれたようですわね。」

マリー様はゾンオウガとは相対すらしていないとか」

「…ああ」

「素晴らしい働きでした、レイリー様。」

まさか私のクエスト受注中に、別のクエストまで達成されてしまつとは

「何の話だ？」

「あの水没林から溪流までのルートは、商人も良く利用する場所です。」

しかしあそこはルドロスやフロギイの数も多く、皆が手を拱いて

いたのです。

私の元もにいくつかの依頼書が届いておりました。

ユクモ村へ湯治に訪れるハンターへ打診して貰えないかと」

こちらです、とアゲハがレイリーへ依頼書を見せる。

確かに。フロギィやルドロスの複数討伐依頼やドスフロギィ単体の討伐依頼など、複数の依頼内容がびっしりと書き込まれていた。きっちり依頼主のサインや報酬額まで入っている。

「今回、貴方とアリサ様。そしてマリー様が討伐したのは…」

ジンオウガを除けばフロギィ83匹・ドスフロギィ2匹・ルドロス67匹<sup>本題</sup>。

まさかジンオウガ討伐に入る前に4つのクエストをクリアするとは。

素晴らしい働きでした」

「……………」

「ジンオウガを除いた各クエストの報酬については、明日以降。改めて私の方から依頼主の方たちへお話しておきますわ。

さて。業務連絡はこんなところかしら」

手元にあつた依頼書を片付けながらアゲハが言う。

それが済むと、改めてレイリーに視線を合わせた。

「約束通り、私を知る情報をお教えしましょう。

お座りになつたら如何？」

「……………」

急な話の展開で固まっていたレイリーだったが、アゲハの言葉の言葉に促され無言でアゲハの隣に腰かけた。

「まずは貴方がおそらくここへ来ようと決断するに至った原因。

“天候を操る竜”についてお話致します」

「ああ」

「現在、この竜については詳しい情報が分かっています。

なぜなら、现阶段でこの竜を討伐した者がいないからです」

そう言つて、アゲハは夜空を見上げた。

「ここ一か月の事です。」

ユクモ村はこのところ、急な天候不順に見舞われるようになりました」

「天災については、自然的なものが強いだろう」

「ええ。その点については否定できません。」

もちろん私どもの勘違いという線もございます。

ですが

空からレイリーへと、アゲハが視線を戻す。

「雲1つない晴れやかな天気の時。」

突発的に嵐や竜巻が周囲を襲う事をどうお感じになりますか？

お天気雨のような生ぬるいものではございません。

少し目を離れた次の瞬間には空が黒い雲で覆われ、

目を見開いた時にはもう雨が降り出している。

そのような気候、他にはありませんでしょうか？」

「………確かに」

「それが一回や二回ではないのです。」

突如襲いかかり、突如消えて行く。

最近ではこの繰り返しが多く見られます」

「誰かその竜本体を見た者はいないのか？」

「目撃情報は多々ありますが、ほとんどが信憑性に欠けるものです。」

目の錯覚という事も十分にあり得る。

なにせ、その竜が現れるのは嵐のような大雨の時のみですからね」

「なるほど」

「現在ギルドは特殊部隊を編成し、調査に乗り出しております」

「それは初耳だ」

「そうですねとも」

アゲハは当然だと言わんばかりに頷いた。

「仮に本当に天候を操れるのだとしたら、その竜との決戦に持ち込む場合。」

それが周りに及ぼす被害は甚大なものとなります。

興味本位で名も通らぬハンターが触れていい件ではないのです」

「その通りだ。それで秘密裏に、というわけだ」

「そうです。ギルドは現在、

そのモンスターを“嵐竜・アマツマガツチ”と称して行方を追っています」

「ふむ。天候を操る竜についての情報は、確かに分かった」

レイリーがアゲハに先を促す。

「……そうすわね。では、お話ししましょう。」

私が知る、貴方の故郷のお話を

○○○○○○○○

『私が知っているのはここまで。』

あれだけ偉そうに話しておきながら申し訳ございませんが、具体的な情報までは教えて貰えませんでしたの。

貴方の村の事は、本当に残念でしたね。

これ以上の情報を知りたければ、

グランドマスターに直接問い合わせる他ないでしょう』

アゲハの去り際の言葉を反芻しながら夜道を歩く。

正直な話、アゲハは本当に大した情報は持っていなかった。あまり期待してはいなかったとはいえ、やはり落胆は大きい。

振り返って見れば、もう既にアゲハの姿は無くなっていた。どうやら本当にレイリーたちの帰りを待っていただけのようだ。

「…鍵を握ってるのは、やはりジジイか」  
ぼそつと呟く。

(どうやら完全にはぐらかされていたようだな。

次あった時にでも殺してやるか)

最後に会ったのはいつだったか…、と考えつつ。

レイリーが自宅の扉に手を伸ばしたところで  
どたんばたん！

という音が自宅から響いた。

耳を澄ませてみれば「きゃー」とか聞こえてくる。

猛烈に嫌な予感がレイリーの脳裏を掠める。

「めんどくせー」

そう言いながらレイリーは扉を開いた。

「な、ん、で、あ、な、た、がぁ~~~~~!!」

「ほへはひゃっひいひゃひゃひえひゅひえいひいひえひゃひゅ〜！  
」

見覚えのある美女2人が、ベッドの上で取っ組み合いをしていた。  
想像の斜め上に行く展開に、レイリーは頭を抱えそうになった。

「……………何をしてる」

「あ、レイー！」

「へひひいひゃん!!」

「何をしている、と聞いたんだが」

自分を見て名を呼んでくる2人に、レイリーはうんざりしたように問う。

「そつよ!!… この女が!!」

パツとマリリーの頬を掴っていた手を放して、アリサが叫ぶ。

「この女が勝手に私たちの愛の巣に居座ってたのよ!!」

「お前の言う愛の巣が何を指しているのかまったく分からん」

「この女が勝手に居据わってたのよ!!」  
言い直した。

「い、居座るなんて?!」

「じゃあ何だっけ言うのよ!!」

「わ、わたしっ!!」

マリリーが一度口ごもる。が、キツと目じりを上げてレイリーに向



き直った。

「私をレイリーさんのパーティに加えて頂きたく!!」

こちらへ参りまひつ

~~~~~っ!!!!」

「なんだ。」

「……………は？」

それでもしつかりと概要は伝わった。いや。伝わってしまった。

「なんですってえええっ!!!!!!」

アリサは、ベッドで口を押えて蹲っていたマリーを叩き起こしてガクガクと前後に揺する。

「あわわわわわわわ?!」

マリーが目を回しながら叫ぶ。

「アリサ、その手を退ける」

「け、けどっ?!」

「話ができない」

「……………分かったわよ」

アリサは口を尖らせながらマリーの襟から手を放した。

「で？」

レイリーが改めてマリーを見据える。

その鋭い視線に、マリーはビクツと体を震わせるものの、直ぐにベッドから立ち上がりレイリーと向き合う。

「私をレイリーさんのパーティに加えて下さい」

「いらん」

「でしょー？」

「で、ですよね……………って?!」

即答しないで下さいよ!!!!」

アリサに続いて相槌を打ちかけたところを、マリーが寸前で留まる。

「な、なんですかあ?!」

「何でも何もないわよ!!」

レイが貴方の事をいらないと言ったのならそこまで!!!!

「ここから今すぐにも出て行きなさいよ！！！」

「……………そのセリフ、お前が言う権利ないぞ」

レイリーにとっては、アリサだって正規に認めた憶えはない。しかし。この場にとって、それは要らぬ発言だった。

ゆらりとピンク色の頭が上がる。

「……………つまり。」

アリサさんもレイリーさんに正式に認められているわけではないんですね？」

「そ、そんな事ないわよ」

アリサの目は滅茶苦茶泳いでいた。

「な、なら私もそうします！！」

断られてもレイリーさんのお傍にいます！！！！」

「レイの隣は私のポジションよ！！」

「で、でもでも！！ それはレイリーさんが認めたわけじゃないです！！」

私だってレイリーさんの隣にいたいです！！」

「貴方がレイの隣に立つなんて100年早いわ！！」

「それを決めるのはアリサさんじゃないと思います！！」

「なんですつてえ〜？！！」

「なんですかあ〜？！！」

どたばたとベッドの上での抗争が再開された。ぎゃーぎゃー言いながら取っ組み合う2人に置いてきぼりを喰らったレイリーは溜息を付く。

……………後半の言い合いの内容が、明らかに前半の趣旨と違っていた事については聞き流す事にした。

ただ、一点確認しなければならぬ事がある。

「おい、マリー」

お互いの頬を抓りあっているところを、強引に中断させる。

「お前、ギルドナイトだろう。」

ましてや見習いのお前に、ギルドが勝手をさせてくれるとは思わ

ないが……」

「あ、私。ギルド辞めて来ました!!」

「……………は？」

その言葉を理解するのに数秒かった。

「あ、貴方……」

じゃあ、今着てるその制服は何なのよ……？」

「これはもちろんギルドの制服ですよ？」

私がこれ以外の装備無いつて言ったら、

支社からユクモ村に着くまでの間は貸しておいてあげるって!!」

「……………じゃあ、その制服って」

「はい。明日、集会浴場の方へお返しに行きます!!」

……………つまり、装備は何もなくなるって事だ。

なんとというかもう。色々と先走り過ぎだ。

「AGSに搬送を頼んでいたジンオウガ素材の使い道。

……………決まったな」

レイリーが呻くように呟いた。

「ちょ、ちよつと。レイ。貴方まさか……………」

レイリーはアリサを無視してマリーに視線を合わせた。

「足を引っ張る様なら置いて行く」

「……………あ」

その意味するところに気付いたマリーは、目を輝かせながら頷いた。

「はいっ!! 頑張ります!!」

「何だよ っ!!……………」

アリサの雄叫びが、夜のユクモ村に響き渡った。

## エピソード

あれから2週間。

結論からいえば、マリーを仲間を迎え入れたのは正解だった。食事が作れる。これは大きかった。とにかく大きい。

「…………… 美味しいな」  
「思わずそう漏れるぐらいは。」

「えへへ。ありがとうございます」

自宅の台所のスペースに立っていたマリーが照れながら頬をかく。  
「ふん。このくらいなら私だって」

「できないよな」

「くううっ」

アリサの顔が悔しさに歪む。

これまでの放浪生活の中で、レイリーとアリサが一番困ったのは食事だった。村や街に滞在する時はまだいい。飯屋に入ればいいのだから。問題は外で野営を張らなければならない時。お互いに一切の炊事能力を有さないこのパーティは、携帯食料に頼りまくりの生活だった。

これは、今後に期待が高まる場所と言っても過言ではないだろう。

「さて、と」

レイリーが椅子からゆっくりと立ち上がる。

「どうしたの？」

アリサがそれを見て問う。

「今日はシルベリアからの結果報告の日だ」

「…………… ああ」

アリサは今思い出したかのように頷いた。

「マリーが私たちの荷物をお釈迦にした帳尻合わせの解答。  
今日だったわねえ」

これ見よがしにジト目でマリーを睨みつける。

「…うううう」

みるみるマリーが萎んでいくのが分かった。

「ま、そういう事だ」

ただ、真実である為レイリーもそれは咎めない。

結局。あの日マリーが古龍観測隊の気球で荷物落下場所を探索したところ、無事だった武器はレイリーとアリサそれぞれ1組ずつのみ。防具は全滅していた。

レイリーがギルドへ出した条件は2つ。

1つはマリーの罪の隠滅という事だったが、マリーが正式にギルドを脱退した事とレイリーの口添えがあった事によって、完全に関わっていなかった事となっていた。

そして2つめ。王立図書館の第1級閲覧禁止区域へのフリーパス。今日は、グランドマスターへ打診に行ったシルベリアからの結果報告として指定されていた日だった。

「さて。どう出て来るかな」

レイリーは不敵な笑みを浮かべながら、集会浴場へと繋がる連絡通路へと足を向ける。

「ふふふ。私たちに喧嘩を売ればどうなるかくらい。

向こう側も分かっているでしょう？」

それに妖艶な笑みで答えながらアリサが続く。

「お、お二人とも…。暴力はしちゃダメですよ？」

おそろおそろマリーが声をかける。

「もちろん」

レイリーとアリサが即答した。

嘘ですっ！！ その笑みは嘘です！！ と思いつつも、それは口  
に出来ない。

代わりにマリーは頬をひきつらせながら、

「い、いつてらっしゃい」

これだけ告げた。

それに頷き、2人が通路へと姿を消す。

それを確認したマリーは、早速旅支度を始めた。

おそらく、というより確実にギルドはOKを出す。そうになると王立図書館があるギルド本部まで出向く必要があるからだ。ここからはどれだけ急ごうが1週間はかかる道のり。しっかりと準備しておかなければならない。

「…頑張りましょうね。レイリーさん。アリサさん」

既に見ない主にそう告げて、マリーは穏やかにほほ笑んだ。

## 第1章までの登場人物

（ハンター）

ギルドカードを持たぬ者は“狩人”たる資格がなく、モンスターを捕獲・討伐することは犯罪となる。

尚、ギルドカードを持っていればギルドの一員というわけではなく、

あくまで“狩人”としての免許証扱いとなる。

○レイリー

銀髪。クエスト達成率10割を誇る伝説の放浪ハンター。

一匹狼だったが、とある事情により現在はアリサ・マリーと行動している。

“異端”“救世主”と称されしその腕はギルド・グランドマスターも認めるほど。

武器は片手剣と弓の同時携帯という変則的なスタイル。

気配に非常に敏感であり、相手の“呼吸”を探る事で次の行動を予測し戦う。

○アリサ

金髪。スレンダー体型。レイリーと共に行動するハンター。

レイリーを溺愛しており、全てにおいて彼を優先する。

“可憐”“双騎姫”と称されし剣技は凄まじく、ギルドマスターにも後れを取らない。

武器は双剣。好きなものはレイリー。嫌いなものはマリー。

○マリー

ピンク・ロリ・巨乳。元ギルドナイト（見習い）。

ギルドでも将来有望とされていたが脱退。レイリーと行動を共にする。

レイリーに救われて以来、彼に好意を寄せている。

抜刀術・納刀術による短期決戦が得意。長期戦は不得意。

武器は太刀。苦手なものはアリサ。

くユクモ村く

○アゲハ

黒髪。竜人族。ユクモ村の村長兼集会浴場女将。

レイリーを気に入ったようだが…？

○ラクロウ

職業：門番（休憩・定休日有り）

自称・鬼門番。自称・村に必要な存在。

○アオバ

集会浴場の番台さん。

扇子を振り回して接客する。

○ドリンク屋（名称不明）

集会浴場内にてドリンクを販売するアイルー。

「温泉といえばドリンク！ドリンクといえば温泉！」らしい。

本編では名乗らなかった為、名称は不明。

くギルドく

世界中のクエスト（採取や捕獲、討伐の依頼のこと）を統括する、王家直下の組織。

自身が直接クエストを熟すこともあれば、

“狩人”と呼ばれる職業を営む者たちに依頼することもある。

正式に“狩人”を名乗るためにはギルドカードが必須であり、その発行にも携わっている。

【グランドマスター】

ギルドの最高権力者。

○???

現段階では素性不明。レイリー曰く「ジジイ」。

【相談役】

現場を離れたギルドの権力者たち。



発言権が非常に強く、ギルドマスター以上グランドマスター未満に位置する。

○???? (名称不明)

ユクモ村の集会浴場にてギルドのテーブルに腰掛けていた飲んだくれ。

呼吸と等しく酒を煽る。体内の水分80%はアルコールと言っても過言ではない。

【ギルドマスター】

グランドマスター直属の実力者。上位10名にこの称号が与えられる。

マスタークラスが出てくるのは余程の珍事か惨事のみ。

この位に属する者は、黒いギルドナイト服を身に纏っている。

○シルベリア

白髪。“達人”と称されしその腕前は未だ不明。

○他9名は、現段階では不明。

【ギルドナイト・リーダー】

基本的に表舞台へと出てくるのはこの階級まで。

現場で直接ギルドナイトに指揮を出すリーダー。

赤いギルドナイトの服を身に纏っている。

【ギルドナイト】

基本的に表舞台へと出てくるのはこの階級。

青いギルドナイトの服を身に纏っている。

○レイリー

ギルドの問題児。レイリーの逆鱗に触れ、何処かへと飛ばされてしまった。

○アルカ

同上。

【受付嬢】

世界各地に存在するギルドの集会場、その受付役。

女性限定。理由は華があるから。差別ではない。

○アン

つい最近ユクモ村に配属された新人。

横の飲んだくれをどうにかして欲しいと思っている……らしい。  
初対面からアリサに苦手意識を持ってしまった。

【AGS】

アイルー・ギルド・サポーターズ。

アイルーによって構成された現場支援部隊。

処理班と医療班に分かれる。

○コットン

ユクモ村周辺を担当するリーダー。

## プロローグ

「今後の動きについて説明する」

話し出す前から不機嫌な音色を孕んだレイリーに、アリサが首を傾げた。

「なに？ 何か不都合な事でもあったってわけ？」

「ああ。ありまくりだ」

マリーから差し出された酒を煽り、レイリーは深々と溜息を付いた。

「ギルド本部へ行く前に、一仕事請け負う羽目になった」

「はあ？」

「そ、それってギルドからの依頼なんですか？」

「…いや、違う。」

村長の顔馴染みがいる別の村からの救援要請だ」

「なにそれ。レイ、貴方そんな安請け負いする人じゃなかったでしょ」

「……………なんとなく俺の評価に刺を感じるが、聞かなかつた事にしておこう」

「じゃあ本部に行くのは後回しって事ですか？」

「そうなるな。いや、少し違うか。」

正確には、本部に行く途中で寄り道をしろという事だ」

「何でそんな依頼受けたのよ」

「仕方ない。そもそも、俺たちが本部に向かおうとしても足が無いからな。」

流石に徒歩やガーグアで行ける場所ではない」

レイリーが空になったコップをテーブルに置きながら答える。

「シルベリアに連れて行って貰えば良かったじゃない」

「そこだ」

「は？」

「はい？」

アリサの提案に喰いついたレイリーに、アリサとマリーが首を傾げる。

「俺が出した条件は、マリーの罪のみ消し。

そして王立図書館の第1級禁止閲覧区域のフリーパス。

奴らは、その条件を“忠実に”守った。

行き帰りの話はまた別って事だ。勝手に来て勝手に帰れだ」と

「なによそれ!!」

ガタンと大きな音を立ててアリサが立ち上がった。

「あつちがそんな事言える立場なわけ?!」

「まあ、こつちはギルドでも将来有望とされていたマリーを引き取ったからな。

その損失分の換算もされているんだろう」

「またこの女つ!!!」

「ひっ?!」

アリサの鋭い眼光に、マリーがビクツと肩を震わせる。

「よせ。今回に限って言えば、マリーのせいではない」

「なによ!!! じゃあ、黙って受け入れるっての?!」

そのふざけた条件で!!!」

アリサが吠える。それに対して、レイリーはマスターブレイドを砥石に当てながら首を振った。

「いや。このまま黙り込むって事はない。

ひとまず向こうに着いてから、一番最初にやる事が決まった。

「ジジイを殺す」

「ひええ」

シャリシャリと刃物を研ぎながらのたまうレイリーを見て、マリ

ーは怯えた声を出した。

「そう? ならいいんだけど」

「いいんですか?!」

「ま、というわけだ。」

「1つ依頼をこなす事を条件に、ギルドからの送迎の飛行船が出る」  
マリーの動揺を余所にマスターブレイドを研ぎ終えたレイリーは、それを丁寧な鞘へと仕舞った。

「で？ その以来の内容をまだ聞いていないのだけれど」

「ああ、そうだったな」

装備用具入れに頭を突っ込みながら、レイリーが気怠そうに返事をする。中からゲイルホーンを取り出し、顔をアリサとマリーに向けながらレイリーは答えた。

「孤島で暴れている、番いの飛竜を討伐してくれ。だそつだ」

## 第1話 入島

「何だと？」

レイリーはドスが聞いた声で聞き返す。

しかし、対面に立っているシルベリアとアゲハは何食わぬ顔でそれを見つめているだけだった。

「今申し上げた通りでございます」

シルベリアは恭しく一礼して、再度口を開いた。

「レイリー様のご希望通り、第1級禁止閲覧区域の閲覧許可が下りました。」

どうぞ、ご自由にお入り頂きまして構いません」

「ならばそこへ連れて行け」

「それは協約の範囲外で御座います」

「は、はは。随分と人の神経を逆なでするのが上手いな。」

ギルドマスター・“達人”シルベリア。

どうやら貴様の二つ名は、思ったより誠実なものではないらしい」

「貴方の“異端”には負けましょう」

「ふん。ならば交渉は決裂だな。」

今後一切お前たちからの依頼は受けない」

「じゃあな」と告げて立ち去ろうとする。

「お待ち下さい」

引き留めたのはシルベリア。レイリーは足を止めてうんざりした表情で振り返った。

「何だ？ これ以上貴様と話す事など何もないんだが」

「もしも決裂という事になりますならば、

先の条件の1つ。マリー様ギルド懲罰の件も振り出しとなりますか？」

「はははっ」

レイリーは声を上げて笑った。

「何を言い出すかと思えば。

好きにしる。俺が女1人の采配で心を揺らすとでも思ったか？」

「お前は俺を何も分かつちやいないな」と言いながら首を横に振る。

「それは俺に何の意味もたらさない。

何より、マリーは既に貴様らの手を放れている。

今更いくら刑が重くなるうが、今後のあいつの人生には何ら影響を及ぼさん」

「あらあら。

それは生涯にわたってマリー様を養う気があるとおっしゃられているのですか？」

突然口を挟んできたアゲハの言葉に、レイリーは顔をしかめた。

「さあてな。それは今後のあいつ次第だが…。

話をすり替えようとしても無駄だ。この件についてはお終いでいいな？」

「お待ちになつて？」

再度歩き出そうとしたところ、今度はアゲハに呼び止められる。

「…今度は何だ？」

いい加減苛立ちを募らせているレイリーが、振り返る。

「私が貴方がた3人のギルド本部までの往復分の送迎手段を提供します。」

代わりに1つ、頼まれ事をしてくれませんか？」

「……………ほう？」

レイリーが訝しげに先を促す。

「ギルド本部に向かう途中、私の知り合いが長を務める村がありますの。」

今、そちらでは番いの飛竜の被害が酷いらしく…。」

「それを討伐しろ、と？」

「ええ。その通りですわ。」

それに、これはそちらにとっても有益なクエストかと」

「……………どういう意味だ？」

レイリーの疑問に、アゲハはクスツと笑ってこう答えた。

「その飛竜。金色と銀色をしているようですわ」

「…ほう」

「……………」

アゲハの言葉に興味を示すレイリー。ふと視線をやると、アゲハの横に立っていたシルベリアは、何やら渋い顔をしていた。

「何か気難しそうな顔をしているな？」

「…いえ。そちらからの条件は全てクリア致しました。

では、私はこれで」

レイリーとアゲハに一礼し、シルベリアは質問に答えることなく集会浴場を出て行った。

「何なんだ？」

訝しげにそれを目で追っていたレイリーに、アゲハが歩み寄る。

そして、耳元でひっそりと理由を話した。

「このクエストは、既にギルドでも取り上げられているものなので  
す。

先日、このクエストに派遣されるメンバーが決定したと聞いてい  
ます」

「おい。じゃあ俺たちが出向く必要は無かったんじゃないか？」

「ええ。ですが希少種には興味がありでしょう？」

今あるのはリオソウルとリオハート、そしてマリー様のジンオウ  
ガのみ。

今後、強力なモンスターと相対する可能性があるのなら、

ここで1つ装備のバージョンアップを狙ってみては？」

「……………なるほど。シルベリアの機嫌が悪いのはそれで、か。

ギルドは俺たちがこのクエストをクリアして、

希少種の素材が回ってこない事を危惧している」

「そういう事ですわ」

「はは。アンタもなかなか面白い事をさせるものだ」



「ふふふ。それで？ お受け頂けるのかしら」

「いいだろう。請け負おう」

「ギルドの連中に、自分の条件で足元を掬われたのは気に入らないがな」と言外に言い放ちながら、レイリーはアゲハからのクエスト依頼を承諾した。

○○○○○○○○

「……合図玉、砥石。

水筒、携帯食料、寝袋に……。簡易テント。

ええと、それから……」

マリーがせつせと旅支度に勤しむ傍らで、アリサはレイリーの話聞いて闘志を滾らせていた。

「ふふふふふ。なるほどね……」。

つまりはクエストに乗じて、ギルドの連中をぼこぼこにしてやればいいってわけ」

「いや。そういったタイムロスはこちらの首を絞めかねない。

ここは素直に番いの飛竜を狙う」

「どうしてよ。」

「こっちの戦闘中に横槍を入れられても興ざめよ？」

「まあ、そうなんだがな」

「……………えと。」

「一緒に協力するっていう選択肢は無いんでしょうか？」

「貴方に口を挟む権利を与えた覚えはないわ」

「ええっ!？」

「……………お前にそんな発言の権利を与えた覚えもないな。

まあ、その質問なら。解答はNoだ。

俺がギルドの連中と共闘など……………」。

それも俺から歩み寄ってなどという事態は、生涯に渡って有り得ないだろう」

レイリーのきつぱりとした拒否に、マリーは目を丸くした。

「…レイリーさんはギルドが嫌いなんですか？」

「嫌いだな」

即答だった。

「俺は連中が大嫌いだ。」

「今までもこれからも。奴らとは必要最低限でしか関わる気はない」

「だったら尚更よ。ここで取っちめてやればいいのに」

「今回のクエストに派遣されるメンバーに、そういった手段は通用しない」

「誰が派遣されてくるか、もう知っているの？」

「いや」

「じゃあ何で分かるのよ」

「派遣されるメンバーは、只のギルドナイトじゃない。」

ギルドマスターだ」

レイリーの言葉に、マリーが息を飲んだ。

「…それほどまでに、緊急性の高いクエストなわけ？」

「アリサもどこか緊張を孕んだ声色で問う。」

「さあな。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。」

「緊急性を感じているのか、希少性を重んじているのか。」

「それは向こうだけが知る事だ」

「それにしただって……。」

「まさかギルドマスターが派遣されるなんて」

「マスター……いえ。」

「シルベリアさんが出てくるのでしょうか」

「マリーが恐る恐る問ってくる。」

「いや。シルベリアは今回、本部と俺たちの仲介役を担っていた。」

「派遣される可能性は低い。だが……。」

「レイリーは一端言葉を切ってから呟いた。」

「誰が出てこようが面倒な事には変わらない。」

「どちらにせよ、難儀な事になりそうだ」

○○○○○○

出発の日。

アゲ八が手配すると言っていた飛行船は、その条件でもあるクエ  
スト場所、孤島にてレイリーたちを拾う手筈となっている。

村人たちからの過剰なる声援を背に、レイリー率いる一行はユク  
モ村を出発した。

ユクモ村から海岸まではガーグアの台車を借り受け、見送りに率  
先して立候補したラクロウがその手綱を握った。途中、アクシデン  
トに見舞われる事も無く。先日向かった水没林とは別の道を辿り、  
穏やかな風の流れる渓流を抜けて、レイリーたちは孤島へ一番近い  
位置にある入り江へと到着した。

そこには既に、アゲ八が前以って声を掛けておいた孤島の住人が  
操縦する船が停泊していた。

「それじゃあ、兄貴、姐さん、マリーさん!!」

「頑張つて下さい!!」

「黙れ」

「うるさい」

「え、ええと」

「返して下さいよ!!」

もはや恒例になりつつあるやり取りをすませ、船へと向かう。

振り返りはしなかったが、どうやらラクロウは軽く半泣きで引き  
返していったようだった。

「アンタがレイリーさんかい？」

「そうだ」

船乗りからの質問に答える。

「乗船するのは3人だな。よし、乗ってくれ。」

「直ぐに出航する」

船はレイリー・アリサ・マリーの3人を拾うと直ぐに出発した。風と波の力を得た帆船はぐんぐんと進み、ユクモ村のある島は見る見るうちに遠くなった。

「いやあ、それにしても。」

うちの村にこれだけのハンターが来てくれるってのは大助かりだ。やっと平穩が戻るってもんだなあ。」

船の操縦をしていた村人が言う。

「聞いた話によると、どうやらギルドの方からも派遣されてくるらしいな?」

波風に当たりながらレイリーが問う。

「おうよ。それもマスターが直々に、だぜ。」

こりゃクエスト完遂は確実だ」

くくつと村人が笑った。

「アンタはそれを見たのか?」

「いんや。俺が出発した時にゃ未だお着きになってなかったよ。」

どうやら2人派遣されるって話だよ。

どうにも少ねえなと思つたら、派遣される2人ともマスターらしい。

あんな辺境の孤島にマスター2人。こりゃ快拳だ」

「何ですって?」

後ろで聞いていたアリサが眉を吊り上げる。

「2人……」

マリーが呆然と呟く。

「……………最悪だな」

「あん? どうかしたか?」

「いや、何でもない」

レイリーは首を傾げる村人に手で応え、アリサとマリーが座る席へと戻った。

自然とマリーとアリサが2人の間に隙間を作る。レイリーは其処へと無意識に腰を下ろした。途端に両サイドがピタツとくつついて

くるが、今レイリーの頭の中はそれどころではなかった。

「派遣されるマスターが2人って……。どれだけ警戒レベルが上なのよ」

「いや、違うな」

アリサの発言に、レイリーが首を振る。

「これではつきりした。

奴らがこのクエストで重視したのは希少性だ。

何としても俺たちより上手で有りたらしい」

「…そ、そんな」

「マスタークラスになれば、

自身の裁量でギルドナイトを選抜し同行させる事ができる。

マスターが1人いるだけで、余程のクエストでない限り完遂は確定だ。

奴らは個々人それだけの实力を持つてる。

それを敢えてマスター2人で派遣されるという事は、

ただクエストを完遂するだけでは不十分だという事を指す」

「クエスト完遂は最低条件。

必要なのは私たちよりも“早く”という事ね」

「そういう事だな」

アリサの言葉にレイリーが頷く。

「……………10人のうちの2人。

ねえレイ。誰が来ると思う?」

「分からん。まさかこういつた対応をとってくるとは」

顔を苦々しく歪めながらレイリーが唸った。

「1つだけ確かなのは……………」。

「選抜された1人に“千里眼”がいて、現時点で島入りしていたとすれば……………」。

もう勝負は決まったようなものだ、という事だ」

重々しく告げるレイリーに、アリサとマリーは口を噤んだ。

〇〇〇〇〇〇〇

孤島に到着したのは太陽が西に傾き始めた頃だった。

船を操縦していた村人に案内され、ひとまずはその村へと赴く。

「ようこそ。私がこのアイラン村の村長・エルマです」

「レイリーだ。後ろにいるのはアリサとマリィ」

レイリーに紹介された2人が頭を下げる。

「お噂はかねがね。アゲ八様からも信頼されているそうで。

強く期待させて頂いております」

「光栄だな」

「宿屋をご用意させて頂いておりますが……」

「いや、結構だ。このままクエストに出発する。」

「ここ最近の目撃情報は？」

「こちらにございます。」

クエスト関連における詳細を綴っておきました」

「上出来だ」

レイリーは感心してその紙を受け取った。

しかしそれには目を通さず、そのままアリサに手渡して口を開いた。

「　　ところで。」

派遣されたギルドの人間はどうした？」

「いえ？　まだ到着はされておりません。」

マスターがお越しになるとの事ですが、本部からここまででは遠いのですので」

「なるほど」

この島があるのはユクモ村とギルド本部との間。距離でいえばユクモ村の方が明らかに近い。先を越されずに済んだとレイリーはほっとした。

「御もてなしのご用意をしてはいるのですが？」

「それはギルドから来た人間にでもしてやってくれ。」

ひとまずこの村の脅威を払わない事には、村人も困るだろう」

「そう言って頂けるのですか。この村の代表として、お礼を言わせて下さい」

「礼は全てが終わった後に受け取ろう。」

いくぞ、アリサ。マリー」

「ええ」

「は、はい」

笑いをかみ殺しながらアリサが頷いた。それに怪訝な顔を見せつつマリーも同意する。

レイリーたちは、そのまま村に入る事なくクエストを開始した。

## 第2話 挟撃

ゴゴンッ…

重厚な音を立てて門が閉まる。

その様子を、レイリーたちは三者三様の目で見つめていた。

「何よこの門。外側からじゃ開けられないじゃない。」

私たちを締め出そうってわけ？」

「ど、どうしましょう…。もう帰ってこれないですよ…。」

「……………そうだな。」

クエストを達成するまでは帰ってきてほしくないというのが本音だろっ」

「そ、そんなあ」

「はあ？」

第一、毎日日の出と共に一度だけ開門するって条件からして許せないわ。

人が村の外に出ている間は、常に開けておくべきじゃないの？」

「その時間がおそらく…。」

この島に住むモンスターどもが一番静かな時だという事だ。

それ以外の時に開いていると、村にモンスターが紛れ込む怖れがある」

レイリーはそびえ立つ城門とも呼べる立派な門を見上げてそう解釈した。

「ここもある意味人間の生存における成功例といえるな。」

自然と共存するわけでもなく、狩人を雇って淘汰するわけでもなく。

自然を時間によって隔絶する事で安泰を得た」

「…私たち外部の人間を雇わざるを得ない状況になった時点で、成功とは呼べないんじゃないの？」



「はは。それは違くない。  
さて、無駄話が過ぎたな。いくぞ」  
レイリーが歩き出すと、アリサとマリーの2人もそれに続いた。

3人が入島したのは既に日が傾いてから。

それから一度村に寄り、村長と顔合わせをしてからクエストを開始したという事もあり、既に日は落ち辺りは月明かりに照らされていた。

「凄い綺麗な夜空ですね」

マリーがきらきらした目で空を仰ぐ。

一切の明かりの無い孤島では、月明かりのみが辺りを照らす。故に空には万にも億にも及ぶ星が煌めいていた。

一口に孤島と言っても、その広さは膨大だ。

村として人が栄えし土地は全体の1割にも満たない。

遙か昔。あまりモンスターの寄りつかぬ入り江付近を開拓し、島民は村を作った。

そこには、モンスターたちが嫌う臭いを発する特別な植物が生息している。

人間の嗅覚では感じ取れない程の微弱な臭いは、モンスター除けとして人々に重宝されていた。

加えて先ほどの堅牢な門。

この2つの働きにより、村には滅多な事が無い限りモンスターが寄り付かなくなっていた。

「ふむ」

「何か分かったの？」

その様子を見てアリサが問う。

「いや。」

明かりが無いようでは、ここの村長から貰ったこの地図もあまり役に立たない。

早めに野営を張れる所を探さなくてはな」

「やっぱり一泊させてもらった方が良かったのではないでしょうか？」

「何言ってるのよ。」

「せつかくギルドより早く入島できたんだから、」

「早めに出発しておいた方が良いに決まってるでしょ。」

「で、でも。」

「まあ、アリサの言う方が正しいな。」

「情報によれば、番いの希少種が目撃されたのは孤島の奥まった場所だ。」

「先手を取る為には、奴らより早くターゲットと接触する必要がある。」

「今、こうして少しでも歩を進めておく事にも意味はあるんだ。」

「：分かりました。それで、野営はどのような所に張るつもりですか？」

「なるべく開けている場所が良い。」

「不意打ちを喰らわぬよう、離れた所からでも敵を目視できるように。」

「そこまで言ったところで、レイリーが足を止めた。」

「これは……………」

「な、何か問題があったのですか？」

「レイリーの顔がしかめられたのを見て、マリーが不安そうに声をあげた。」

「ああ。これは想像以上に厄介なクエストになりそうだ。」

「ここまで“呼吸”が不安定な場所は久しぶりだ。」

「あら。もうターゲットが近くにいてるってこと？」

「ええっ！？ ど、何処ですか！？」

「マリーが素早く剣に手を伸ばす。」

「……………違う。この“呼吸”は。」

「レイリーが台詞を言い終わるより先に、遙か前方の森が赤く輝いた。」

続いて轟音。オレンジ色の火に染まった木々が次々と薙ぎ倒されていく。

その光景の中、2匹の大型モンスターが姿を現した。

「あれって……」

マリーの体が硬直する。

「怪鳥と黒狼鳥だな。縄張り争いか何かは知らんが。

面倒くさい場面に出くわしてしまったようだ」

そう言いながらレイリーは背中からゲイルホーンを抜いた。

「あら、やるの？」

依頼内容には含まれてないけれど」

「極力無駄な戦いは避けたい。

こちらが矛先を向けられた時だけにしておけ」

「了解」

「あわ、あわわ」

マリーがわたわたとし始める。

それを見て、そういえば初めて会ったとき「モンスターを前にするとあわあわしてしまう」と言っていたな、とレイリーは思い出した。

イヤンクツクの吐き出した火炎がレイリーたちの前方に落ち、辺りを明るく照らす。

それを目で追っていたイヤンガルルガが動きを止めた。同時に、目を細める。

「どうやらこちらに気付いてしまったらしい。

突進してくるイヤンクツクを余所に、イヤンガルルガはレイリーたちの元へと突っ込んできた。

「来るわよ……」

アリサがギルドナイトセーバーを抜く。

それを見ながらレイリーはマリーへと声をかけた。

「マリー」

「は、はいいい!?!」

既にがちがちだった。

「お前の剣士としての腕前は、過去に2度見た。水獣の時と毒狗竜の時だ。いずれも並みの剣士の腕前ではない。あの程度のモンスターならば十分引けを取らないだけの實力をお前は持つてる。」

足りないのは自信と度胸だけだ。しっかりついてこい」

そう言うや否や、レイリーは地面を蹴った。

「ついて来れないなら置いて行くわよ、弱虫」

それにアリサが続く。

「……………あ。」

は、はいっ！！」

一瞬何を言われたか分からなかったマリイだったが、直ぐにその意図を理解し力強く駆け出した。

自分が相対していたイャンガルガが突如矛先を変えたのを見て、イャンクックの方も直ぐにレイリーたちの存在を感知した。鋭い咆哮をあげて飛翔する。

その間にもイャンガルガの方は、その足で3人との間合いを瞬く間に詰めていた。

「いくぞ」

レイリーがゲイルホーンに矢をかけたところで、

「レイリーさんっ！！」

先手は私に任せて下さい！！」

後ろから声がかかる。レイリーがそれに頷き、道を開ける。

刹那。横をマリイが駆け抜ける。柄に添えられた腕が、目に見えぬ速度で振るわれた。

「抜刀術・弐の型“風斬り”！！」

甲高い音を立てて、マリイの太刀とイャンガルガの嘴が交わった。

マリイの太刀は、ここに来る前に新調したものだ。

レイリーたちがユクモ村で討ち取ったジンオウガを素材として作られた業物。

雷の属性を持つ「王刀ライキリ」。その名に恥じぬ威力の雷が、その刀身から放たれた。

「おおっ!？」

思わず声が出るほどの電撃が迸る。

居合い抜きから生まれた剣筋の威力に雷の力が加えられたそれは、イャンガルガの突進を妨げるには十分な威力を持っており、そのまま地面へと転げさせる事に成功した。

マリーはそれを跳躍する事で躲す。

「貴方にしては上出来だわ!!」

追撃をかけるべく、アリサが突っ込む。

そこへタイミングを計ったかのような勢いで、イャンクックが上空から迫ってきた。

「隙だらけだ。 “ 虎砲 ” 」

ゲイルホーンから放たれし5本の矢が、イャンクックの右翼に一点集中の攻撃を浴びせる。

執拗に同じ部位に命中する矢の威力に負けて、イャンクックは空中でバランスを崩し見当違いの場所で墜落した。

フリーになったアリサがギルドナイトセーバーを振るう。

「舞い散って? 乱舞・“ 乱れ桜 ” 」

アリサから放たれる斬撃を、イャンガルガは為すがままに受けた。

しかし、甲殻が硬すぎた。深刻なダメージには至らなかったようで、すぐさま態勢を整えたイャンガルガは自らの尾を振り回した。「気を付ける!!」

「奴の尾には猛毒があるぞ!!」

それを聞いたアリサは、剣でその尾を受け止めるのではなく回避の為に体をしならせる。毒の付いた刺が、アリサの体すれすれを横切った。

丁度尾の動きが止まったところで、直ぐ近くで待機していたマリ  
ーが動いた。

「納刀術・終式“一閃”!!!」

電撃と共にイャンガルガの嘴が欠ける。

呻き声上がるよりも先に、光の一振りがマリーの鞘へと納めら  
れた。

「よくやった!」

レイリーが怯んだイャンガルガに照準を合わせたところで。

耳を劈くような轟音が轟いた。

不意を突いたその轟音に、3人とも耳を塞ぐ。

しかし、もう手遅れ。

(っ!!!)

……………しまった。バインドボイス)

レイリーはくらくらする頭でそれを悟る。

イャンガルガがヒビの入った嘴をマリーに向けたのを、レイリ

ーは目で捉えた。

「く、くそ」

あるうことが、耳を塞ぐ為にゲイルホーンを地面に落としてしま  
っている。

条件反射でしてしまった事とはいえ、レイリーは自分で犯した失  
態が信じられなかった。

腕にもまだ力が入りきらない。

(最悪だ。何を寝ぼけてんだ俺は…)

ゆっくりと、イャンガルガが尾を振りかぶる。

「マリーっ!!!」

片膝を付いたアリサが叫ぶ。アリサも音にやられて動けないよう  
だった。

(万事休すかつ…)

震える手でゲイルホーンに手を伸ばした直後。

イヤンガルルガの頭部が爆発した。

正確には、イヤンクツクの放った火炎がイヤンガルルガの頭部を捉えた。

突如オレンジ色の炎に包まれたイヤンガルルガは、その熱さに咆哮をあげる。

その一瞬の隙が、あらゆる者の立場を逆転させた。

「抜刀術・壱の型“辻斬り”！！」

「演舞・“舞夜桜”！！」

マリーの斬撃が、イヤンガルルガの左翼を襲う。

次いで、アリサの太刀筋の嵐が的確に甲殻の隙間を捉えた。

「“五月雨”！！」

レイリーだけが攻撃の対象を変えた。

無数の矢が、遠方で今にも襲い掛かろうと構えていたイヤンクツクを襲う。

イヤンガルルガに比べて遥かに甲殻が脆いイヤンクツクは、その猛撃に足を滑らせて転倒した。

「レイっ」

「先にあつちを仕留める。」

お前等は黒狼鳥を足止めしてる」

それだけ告げて、レイリーは地面を蹴る。

走りながらゲイルホーンに矢を装填した。

イヤンクツクが、痛みに呻きながらレイリーを睨みつける。

どうやらこちらは完全にレイリーをターゲットとして認識したらしい。

「好都合だ」

レイリーは口を歪ませながらそう呟いた。

後方からは鋭い斬撃の音が聞こえる。

おそらく、イヤンガルルガとの戦いが再開されたのだろう。

あまり時間はかけていられない。

「1分だ。それでカタを付ける」

誰にでもなく自分自身にそう宣言したレイリーが、装填した矢に力を込める。

「いくぞ」

その言葉と同時に矢を打ち放つ。

それに応えるかのように、イヤンクツクの鳴き声が轟いた。



### 第3話 アリサとマリィ

レイリィが放った単体の矢は、イヤンクックが飛翔した事によって避けられた。

空中で吐き出された火の玉をサイドステップで交わしたレイリィは、そのままの流れでゲイルホーンを構える。

「いくぞ」

今度は5本の矢がイヤンクックを襲う。

それに対してイヤンクックは火炎で応戦しようとするものの、打ち落とせたのは2本のみであり、残り3本は先ほどから執拗なまでに攻めている右翼を再び捉えていた。

イヤンクックが呻きながら落下する。

それを見たレイリィは、ゲイルホーンからマスターブレイドへと持ち換えて一気に距離を詰めた。

「決める!!!」

そう呟いて振るったレイリィの短剣は、イヤンクックの嘴によって止められた。

鈍い音が鳴り響く。

勢いに負けたレイリィは、そのまま数歩後ろに後ずさった。

そこに追撃をかけるべく、イヤンクックが火炎を放つ。

レイリィはそれを横へと跳躍する事で辛うじて回避した。

「まだやれんのか」

レイリィはマスターブレイドを再度構え直す。

イヤンクックがゆっくりと起きあがった。

翼を広げて飛び上がるうとしたところで、バランスを崩して転倒する。

見れば右翼には穴が開いており、うまく飛べないようだった。レイリィが先ほどからねらい続けていた場所だ。

「もう飛べないようだな」

それを確認したレイリーは、にやりと笑った。

「あまり時間はかけられないんだ。

ここで終わらせてもらうぞ」

レイリーが地面を蹴る。

それに倣ってイヤンクックも突っ込んできた。

啄むような仕草で地面を抉りながら迫ってくるイヤンクックを跳躍する事で避けたレイリーは、丁度下を向いた嘴に足をかけ、マスターブレードをイヤンクックの左目に突き刺した。

鋭い悲鳴が上がる。

痛みに耐えきれなくなったイヤンクックが足を崩し、地面へと倒れ込んだ。

レイリーは地面に着地すると同時にゲイルホーンを抜く。

「終わりだ。“泡沫”」

放たれた1矢は、レイリーの狙い通りイヤンクックの喉元を捉えた。

鮮血が吹き荒れる。

多量の血を吐き出したイヤンクックは、為す術なくそのまま絶命した。

「さて」

レイリーはピクリとも動かないイヤンクックに近づき、何の躊躇いも無くその眼球を貫いている短剣を抜き取った。

同時に血飛沫が舞う。防具に付いたそれを気にすることも無く、レイリーは短剣を鞘へと納めた。

「ん？」

背後に生い茂る密林に目を向ける。

(何か不穏な気配を感じ取った気がしたのだが……………)

じつと目を凝らしてみても、月明かりだけでは伺えない。

「……………気のせいかな」

少なくとも。今直ぐにでも襲い掛かってくる気配ではないと判断

したレイリーは、ゲイルホーンを抜き未だ戦闘中である2人の元へと急ぐ事にした。

「いつになれば本題に入れるのやら……」

そう苦笑したところで足を止める。アリサとマリーに目を向けると、面白い光景が飛び込んできた。

「……ふむ。」

好きにやらせてみるか」

「矢も無駄遣いできないからな」と言いながら、レイリーはゲイルホーンを背中に納めた。

マリーの戦術の神髄は、その流れるような鞘からの抜刀術・そして鞘への納刀術にある。

マリーは、自身が本来戦闘向きでは無い事を知っている。それは人間としての性の構造上、女が男に比べて身体能力が幾分か劣るという意味合いだけではない。マリーの身体的能力は、女の中でもさらに低ランクに位置している。その事實は、マリー自身がしっかりと認識していた。

だからこそ。マリーはある一点のみを集中的に鍛えた。

それは、剣速。

強引な力押しに頼る事もできず。

相手のスタミナ切れを狙う持久戦に頼る事もできず。

広い間合いによって相手を圧倒する事もできず。

そのような条件の中でマリーが選んだのは、誰よりも・何よりも速い斬撃。

初動の速さを極限まで高める事で、相手の攻撃手段を奪う。やりたい事をさせない。自分のペースで相手のスタイルを崩し、短期決戦で決める。

この変則的なスタイルを確立すべく、その他一切の鍛錬を捨て剣速のみを鍛え続けたマリーは、圧倒的なまでの初動の速さを得た。それはオールラウンダーを主軸とするギルドという大組織の目から

見ても、賞賛に値するだけの能力。だからこそ、マリーは将来有望な見習いとして迎え入れられていた。（結局は脱退してしまったわけだが。）

しかし、この技法にも問題がある。

それは、短期決戦による決着が着けられなかった場合。

極限まで高められた剣速によつていくら相手を翻弄しようとも、相手がそれで倒れないのならば、それまで。この技法に欠点があるとすれば、自身のペースに相手を招き入れて倒す事ができなければ、先が無いという事だ。

特にこの技法を用いているマリーは、その能力のみを高めたが故に他の手段の一切を取ることができない。スタミナの浪費が激しいこの技法は、持久力に自信の無いマリーからすれば、その欠点は致命的なものといえる。

そして今まさに、その欠点が浮き彫りにされようとしていた。

「はあ…はあ…」

もはやライキリを構える体力も残っておらず。

マリーは切っ先を地面に当てて太刀本来の重量を軽減させながら、辛うじてその場に踏み止まりイャンガルガを睨みつけていた。

しかし、その瞳にも先ほどまでの力は宿っていない。

肩で息をし、多量の汗をかいているマリーはもはや満身創痍といった風情だった。

1分。

それが今のマリーができる、最長の戦闘時間。

その眼前ではアリサが孤立奮闘しており、うまくマリーに注意が向かぬよう絶妙な剣技でイャンガルガを翻弄していた。

「演舞・“舞夜桜”!!!」

イャンガルガの肉質が比較的軟らかい部分や、鱗や甲殻の隙間といった絶妙な部位を的確に捉えた斬撃が幾重にも重なる。

双剣の特徴は、その軽い刀身と2枚の刃による連続攻撃を可能とした、寧猛なまでの手数ของ多さ。一般的に“乱舞”と称されるその剣技は、双剣を操るハンターの登竜門ともいふべきものだ。

アリサは、その剣技を自身の戦闘スタイルに加える上で、性質上大きく2つに分けた。

ただ漠然と標的の全体像のみを捉え、ひたすらに斬撃を繰り返す“乱舞”。本来、双剣使いが行う乱舞は、名前の通りこちらを指す。そしてもう1つ。手数の多さという双剣の長所を生かしつつも、その斬撃全てを相手の弱点に集中させる“演舞”。ある程度の狙いを定めた剣筋となるが故に“乱舞”に比べると多少手数では劣るものの、精度は段違いに上がる。但し、“演舞”は相手の弱点を正確に捉える事ができなければ使えない為、初見の相手の場合はある程度その生態を觀察する必要がある。

つまり。アリサが本領を發揮するのは、必然的に初見ではない相手かもしくは初見であったとしてもある程度觀察する時間が得られた後、すなわち長期戦に移行してからという事になる。

アリサはこの2つの剣技を以って“可憐”と称されるようになった。

そして。今まさに、アリサの本領が發揮されようとしていた。

(……………見えた!!)

イヤンガルルガからの、苦し紛れの啄み攻撃を軽やかに躲しながらアリサはそれを捉えた。

アリサの剣はギルドナイトセーバー。斬撃時に水が噴き出る仕様の剣は、どうやらイヤンガルルガに対して相性が良いらしい。

それが証拠に、イヤンガルルガは先ほどからのアリサの執拗なまでの斬撃による水属性の攻撃に、過敏に反応する箇所がある。それは。

( 背中っ )

吐き出された火炎を、刀身から噴き出す水と共に斬り捨てる。

(問題は、どうやってそこに攻撃を当てるか……)  
ステップを踏みながらイヤンガルガの出方を伺う。そこで、イヤンガルガの動きに変化が現れた。

今まではアリサとの距離をじりじりと詰めるだけの動きだったイヤンガルガが、ゆっくりと後退し始めたのだ。

「? ……怖気づいたのなら、チャンスっ!!!」

それに対して距離を離されまいと、アリサが一気に詰めようとしたところで

「いけないっ!!! アリサさんっ!!!」

マリーの鋭い声を聞き、アリサは反射的に身を翻した。

瞬間。アリサの耳元ぎりぎりの空気をイヤンガルガの尾が窺いだ。バック宙のような動きで一回転したイヤンガルガが、空中で再びアリサに目を向ける。

「何よ今の動き!!!」

「サマーソルトですっ!!!」

ああやって目にも止まらぬ速さで尾を相手へと突き刺し、猛毒を与えます!!!」

「サマーソルトってレイアの専売特許じゃないの!?!」

「イヤンガルガも使いますよ!!!」

「はあっ!?! これイヤンクックじゃないの!?!」

「違いますよ!!! まったく別物ですっ!!!」

「知らないわよ!!!」

「こいつイヤンクックの亜種じゃないわけ!?!」

「違うって言うてるじゃないですか!!!」

「どれだけ無知なんですかアリサさん!?!」

「な!?! 何ですってえ!?!」

あな　　っ!?!」

「納刀術・終式“一閃”!!!」

間一髪。アリサは再び放たれたサマーソルトを横っ飛びで躲す。そこへ追撃を掛けるべく飛来してきたイヤンガルガを、マリー

の太刀筋が強引に弾き飛ばした。

力負けはしたものの、納刀術による瞬間的な力の爆発とライキリの雷の力も手伝って、軌道を逸らす事に成功した。アリサの直ぐ真横に頭から突っ込む。

「貰った！！ 演舞・“舞夜桜”っ！！！」

背中を見せたイヤンガルルガにアリサが瞬く間に距離を詰め、弱点特攻の斬撃を浴びせる。

弱点の属性を一番の弱点部位に連撃で受けたイヤンガルルガは、その痛みに呻き声をあげた。

その一瞬の隙が勝敗を決した。

「マリー！！！」

「居合術・“雅”！！！」

一筋の稲妻が鞘から奔る。しかし、その光を目で捉えた時には既に鞘へと収束されていた。

雷鳴が遅れて轟く。

そしてそれよりもさらに遅れて。イヤンガルルガの首が一刀両断されて吹き飛んだ。

「はあ…はあ…」

マリーが荒い息を繰り返しながら膝を付く。

それを見たアリサは、少し不機嫌そうな顔で歩み寄ってきた。

「何よ。貴方。やろうと思えば直ぐにでも殺れたってわけ？」

茂みに転がったイヤンガルルガの生首を見て、アリサはそう問うた。

「いいえ。そんな事はありません。確かに布石は打ち続けていました。」

前半戦で私が用いていた抜刀・納刀は全て同じ個所への斬撃。

首の根本の部分だけを狙い続けていましたから」

肩で息をしながらマリーが答える。

「あれだけ動き回る相手の部位を一点集中って…。」

貴方どれだけ太刀筋が正確なのよ」

「慣れればそう難しい事ではありません。」

レイリーさんが先ほどやられていた弓術・“虎砲”も同じ要領ですしね」

苦笑いしながらマリーが告げる。

「はあ？ 貴方の技とレイを一緒にしないで」

「すみません。話を戻しますが、

あの部位はその布石によって既に脆くなっていたのです。ですが、首筋に傷は付けられても、切断は出来なかった。

イヤンガルルガの特徴であるあの襟巻の死角となる部位ですから」

「でも、貴方きちんと斬れてたじゃない」

「ええ。見えなくとも、

そこに首が“ある”という事実は知っているわけですからね。

ある程度は勘です」

「勘って……」

「ですが正面から斬りかかった場合、

どうしても太刀筋は首に対して斜めに入ってしまう。

それでは傷は付けられても、切断は不可能……」

そこまで言って、マリーはゆっくりと顔を上げた。

その目でしっかりとアリサを見つめてからこう言った。

「信じてました。アリサさんが必ずイヤンガルルガの足を止め、

隙を生み出してくれるって」

「は？」

見当違いの発言をされ、アリサは思わず固まった。

「私の細腕では、一瞬の隙を伺っての抜刀・納刀程度で切断はできません。」

構えから初動まで多少の“溜め”が必要となりますが、

“居合術”での斬撃が必須だったんです。

その隙を、きちんとアリサさんは作り出してくれました。

だから、ありがとうございます」



「っ!？」

アリサの顔がぼつと赤く染まる。

「…べ、別に貴方の為にやってあげたわけじゃないわ」

そっぽを向きながらそう答えるのが精いっぱいだった。

「知ってます」

マリーはそれを見てクスツと笑いながら、ゆっくりと2人に近づいてくるレイリーに視線をやった。

「レイリーさんの為、ですよね？」

「…そうよ」

顔の赤みは引いていなかったが、不機嫌そうにそう告げたアリサは、へたり込んでいるマリーへと手を差し伸べた。

「その為なら、貴方とだって協力するわ」

「はい。これからもよろしくお願いしますね」

そう笑顔で答えながら、マリーはアリサの手をとった。

## 第4話 癒しの湖の主

「…近い」

レイリーは呟くようにそう漏らした。

既に朝日は昇り、辺りを明るく照らしている。

レイリーの眼前。超至近距離で安らかな寝息を立てているアリサを見て、レイリーは頭を抱えなくなった。

確かに昨夜寝るときには適度な距離を保っていたはずなのだが…。そう思っただけで姿勢を変えようと反対側を向いたところで、

「……………お前もか」

今度は逆サイドで同じく超至近距離で寝息を立てるマリーと顔を合わせる羽目になった。

「起きるか」

レイリーはゆっくりと寝袋から這い出した。

「…つたく。俺はあまり寝てないんだがな…」

簡易テントから出て近くを流れる川に近づきながら、そう呟く。イヤンクックとイヤンガルガを撃破してから。

あれからレイリーたちはしばらく歩いた後、辿り着いた川辺で野営を張る事にした。

テントに入ってから女性陣は直ぐに寝てしまったが、レイリーはしばらくの間テントの外で、周りの気配を探っていた。

一応テントを張る時点で周りの気配は探ったものの、油断は出来ない。空が明るくなるぎりぎりまでレイリーは見張りをしていた。

本来ならば交代すべき役割だったが、アリサは一度寝ると例え横でディアブロスが咆哮をあげようがグラビモスが大地を揺るがそうが起きないし（これはあくまでレイリーの主観であり、実際にそうだった事態に陥ったわけではない）、マリーではおそらく敵を発見できてもあわあわしているうちにパーティが全滅してしまう事も

十分にあり得る。

消去法でいくとレイリーしか残らないわけである。

「もう1人、“まともな”人間をパーティに加えるべきか……」  
顔を洗いながらそこまで呟いて、レイリーははっとする。

（…まさか1人で行動してきた俺が、誰かに頼る事を考えるなんてな。

相当思考が弛んでいるようだ…）

水面に映る自分の顔を見て、レイリーは表情を歪ませた。

（…こんな緩い考えではこの先後悔する事になる。

その前に　　）

背後から近づいて来る気配を察知して、後ろを振り返る。

「……………何してる？」

思わずそこに居る人物にそう問いかけた。

両手で顔を隠しながら歩いてきた背丈の低いピンク色が、おそるおそる近づいて来ていた。

「お、おはようございます。レイリーさん」

「ああ。で？ 何をしているのか聞いたんだが」

「朝、身なりを整える前の女性の顔は見ちゃダメです…！」

「身なりって…。ちゃんと装備を着てるじゃないか」

レイリーの言葉通り、マリーはしっかりとジントウガ装備を身に纏っていた。

「顔洗ってないですっ…！」

「じゃあ早く洗え」

「レイリーさんがそこにいるから洗えないんですよっ…！」

「アリサはそんな事言わなかったが…」

「っ…！ あっあう…。と、とにかくダメですっ…！」

「…まあ、構わないが」

そう告げて未だに両手で顔を隠し続けているマリーの横を通り過ぎる。

別に言葉で言い負かすという時間を使ってまで興味のある事柄で

はない。マリーが嫌だと言っならそれでいいか、と思いつたレイリーはそのまま素直に身を引きテントへと戻った。

そして。  
「お前はマリーから女性たるものについて教えを乞うた方がいいんじゃないか？」

どうやって抜け出したのか。寝袋から上半身だけ這い出た状態のアリサが、レイリーの使っていた寝袋を抱きしめて眠っていた。微妙にはだけた寝巻着と、抱き締めている寝袋によって形を変えている胸が妙に色っぽい。

「んんう…。レイ…」

むにやむにやと口元を動かしながらそう呟く。

「お前とマリーの女性としての貞操感を足して2で割れば丁度良くなるかもな」

「それどういう意味ですかっ!？」

「ん？ おう。戻って来たのか」  
ぼそつと呟いた一言は、どうやらマリーにきっちり拾われていたらしい。

少し怒り顔のマリーがテントへと入ってきた。視線をレイリーからその下へと向ける。

アリサの現状を捉えたマリーが顔を真っ赤にして叫んだ。

「アリサさーんっ!!」

「まったく、聞いてるんですか!？ アリサさん!!」

「はいはい聞いてるわよ」  
流れる金髪を鬱陶しそうに掻き揚げながらアリサはおざなりにそう答えた。

身支度を整え軽い朝食をとった後、直ぐに出発したレイリー一行は目的地へと着々と歩を進めていた。

既に“あの騒動”から2時間近くが経過したにも関わらず、マリーの「淑女たるもの講座」は終わる素振りを見せない。流石に受講

者であるアリサ（もちろん強制的に）だけでなく、横を歩くレイリーにとつても勘弁して貰いたいと思ひ始めていた。

「……………」

ふと足を止める。入り組んだ木々の隙間から、湖が見え隠れしていた。

地図を取り出したレイリーが顎を撫でる。

「ふむ。どうやらあれが島民の言う、“癒しの湖”だな」

「へえ。ちよつと疲れたし、早速癒されに」

「ちよつと待て」

湖に向かつて歩き出そうとしたアリサの腕を掴んで止める。

「なに？」

「どうしたんですか？ レイリーさん」

アリサとマリリーが訝しげにレイリーを見る。

「“呼吸”がおかしい」

「！」

レイリーのその言葉に、アリサとマリリーは揃って口を噤んだ。

その発言は、2人にとつて緊張を極限まで高めるだけの十分な効力がある。特に断言したならば尚更だ。

「別に何かあるようには見えないけれど……」

アリサが小声でそう呟きながら湖の様子を伺う。

3人は茂みで丁度姿が隠れている。その為湖の畔で屯しているケルビたちは、思い思いに水を飲んだり水浴びをしたりしていた。

「…確かに。ケルビは特に気配に敏感な動物です。」

あの子たちが緊張を解いているって事は、平気なんじゃないでしょうか……」

「……………」

レイリーは何も答えない。

アリサとマリリーはお互いに顔を見合わせたが、そのまま黙って待機する事にした。そもそも2人の頭の中に、レイリーが間違いを起こすという可能性がない。そんな愛ゆえの盲目さが、今回は正解だ

ったといえる。

それは一瞬だった。

「きゃもががっ

悲鳴をあげかけた瞬間、レイリーの手がマリーの口を塞ぐ。

アリサは悲鳴こそあげなかったものの、体中が電撃を浴びたかのようにビクツと肩を震わせた。

突如水中から姿を現したガノトトスが、水浴びをしていたケルビに喰いついた。ケルビは悲鳴をあげる暇も無く水中へと引きずり込まれる。

少しして。じわりと水面が赤く染まるのが見えた。一斉にケルビの群れが逃げ出す。

幸い、レイリーたちが潜んでいる茂みには向かって来ないようだった。それを確認したレイリーは、その場で動かず様子を見る事に決めた。

既にケルビの群れは湖の畔から結構な距離を取っていた。

あれならガノトトスも間に合わないだろう。

そう思った直後だった。

湖から水のレーザーが打ち放たれた。

凄まじい勢いで直線状に伸びるレーザーはケルビの群れを見事に打ち抜いた。

鮮血が舞う。水圧によって足を吹き飛ばされたケルビが転倒する。

その攻撃を逃れたケルビたちは、仲間に構う事無くそのまま姿を茂みへと消した。

後ろ右脚を失ったケルビが引きずるように歩き出す。その後方で大きな水飛沫があがる。負傷したケルビの周りが、ふっと太陽の光を失ったかのように暗くなった。

ケルビがその異変に気付き、空を見上げるより先に。湖から飛び出してきたガノトトスの牙がケルビの命を刈り取った。

「……………落ち着け。何も喋るな。じっとしていれば気付かれない」

レイリーから小声で囁かれたその言葉に、マリーは何度も首を縦に振った。

ゆっくりとレイリーの手がマリーの口から離される。視線はガノトトスから離れない。

視線の先に居るガノトトスは、どうやらケルビを丸飲みしたらしい。咀嚼する素振りも見せず、湖へと歩き始めていた。

「気持ち悪いわね。相変わらず」

その動きを見ていたアリサが顔をしかめる。

「見て。あのぬめぬめした体。ぞっとするわ」

「黙れ」

「はいはい」

アリサは面白くなさそうな顔でそう告げる。

ガノトトスはゆっくりとした足取りで、先ほどケルビたちが水浴びしていた場所まで戻ってきた。

それから2、3度辺りをきよろきよろと見渡す。水に戻ろうとしない。

(…気配を悟られたか?)

「はっ…はっ…はっ」

マリーの息遣いが荒い。どうやら緊張状態から軽い酸欠へと陥ってしまっているようだ。かなりの量の汗もかいている。

「…ちよっと。貴方大丈夫?」

「…はっ…はっ」

アリサの問いにも答えない。

マリーが人の問いを無視するのは珍しい。だからこそ、相当厳しい精神状態であることが分かった。

「レイ、まずくないかしら」

「…ああ」

この状態が続くのはまずい。

ガノトトスに気づかれる恐れがあるというだけでなく、マリー自身の体にも相当な負担がかかっている。

「マリー」

「はっ…はっ　っ!？」

レイリーはマリーの両肩を掴んで顔を近づけた。

「俺の目を見る」

「っ」

両者がじつと見つめあう形になる。

「大丈夫だ」

ゆっくりと告げる。

「落ち着け。仮に襲われたとしても、俺たち3人ならあいつは狩れる」

焦点が定まっていないうだった、レイリーはそれでも目は逸らさずに続けた。

「だから、落ち着け。できるな？」

「　　は、はい」

ぼんやりと焦点が合ってきたマリーが小さく頷く。

まだ多少息は荒いものの、ここまでくれば大丈夫だろう。

そう考えたレイリーはゆっくりとマリーの肩から手を離れた。同時にしゃがんでいる姿勢だったマリーが尻餅をつく。

それをアリサは面白くなさそうな目で見つめていた。

それに気付いていない振りをしたレイリーは、

「それにしても…。水竜までいるとは驚きだな」

そう呟いて視線をガノトトスへと向けた。

結局。

ガノトトスは3人に気付く事無く、そのまま巨体を揺らして湖へと潜っていた。

「何とかやりすごせたようだな」

レイリーがそう告げた事で、ようやく空気が弛緩した。

「ふう…。マリー、貴方もう少し精神力を鍛えなさいよ。隣にいる私が冷や冷やしたわ」



「す、すみませえん」

マリーは尻餅を付きながら弱々しくそう答えた。

「さて。気を取り直して進むとしよう。もうしばらく休憩はお預けだな。」

マリー、いけそうか？」

「は、はい。大丈夫です」

マリーが無理に答えているのは明白だったが、このガノトトスの射程距離内で休むわけにはいかない。

「あんな魚が泳いでいる湖で休憩なんてごめんよ。恐ろしくて休んでいるどころじゃないわ」

「私もそう思います」

レイリーは気丈に振舞うマリーに苦笑しながら、ゆっくりと立ち上がった。

「じゃあいくぞ。」

癒しの湖まで来たということは、目的地である“龍の洞穴”までの7割は来たことになる。

あともう少しだ」

レイリーが地図を丸めながらそう告げる。

「そこが本番なんだけどね」

「はは。まあそうだな」

レイリーに続いてアリサとマリーも歩きだした。

○○○○○○

一方。

アイラン島の岬にある村の近くの広場では、人々の歓声があがっていた。島民の皆が上空に向かって手を振っている。その観衆の後方では、島長・エルマが目を細めてそれを見据えている。

歓声の中、島民の注目を集めている飛行船がゆっくりと着陸した。ひととき大きな歓声があがる。

その飛行船の両サイドには、ギルドの紋章が刻まれた。

## 第5話 到着

「メリッサ様、アイリス様。アイラン島に到着致しました」

飛行船の特等席とも呼べる見晴らしのよい展望席に腰掛けた2人の女性に、青いギルドナイトの制服を身に纏った男性が恭しく頭を下げる。

その動作を見て、紫の髪をした女性が顔をしかめた。

「見りや分かるわよ。分かりきった事をいちいちぬかさないで」

「し、失礼致しました」

「ふう。何よこの島。面倒臭い奴らがごろごろいるじゃない」

「…は？」

「ああ。気にしないで。どうせ言ってもアンタには分かんないから。黒のギルドナイトの制服を着たその女性は、鬱陶しそうにその美しい紫色の髪を掻き揚げながらそう答える。小柄で背比べをしたらおそらくマリーより小さいであろう（実際にしたわけではもちろんない）その女性（女の子？）は、尊大な態度でそう告げた。胸を張っているが、胸はない。マリーとは違い、身体的に見事にバランスのとれた体型だった。

「アイリス。アンタ何ぼーっとしてんのよ。」

この銃、片方アンタのなんだからね。しっかり持ちなさいよ」

対して、アイリスと呼ばれた女性は誰もが羨むであろう全女性の理想の体型をしていた。

青い髪に凹凸のはつきりとしたボディライン。

ただ、感情に乏しい。無表情のまま声がした方を向き

、「……………」

何も喋らなかつた。

「アタシにシカトなんざいい根性してんじゃない」

紫の髪をした小柄な女性、メリッサが頬をひくつかせる。

「……………レイリーは？」  
「ああ？ アンタがそんな事聞いてどうすんのよ。いいから」  
「レイリーは何処？」  
アイリスは、その流れるような青い髪を揺らしながら首を傾げた。  
「…それ聞いてどうしようってのよ。」  
「……………？ 言ってる意味が分からない」  
「殺すわよ」  
「レイリーも希少種狙ってる。ならレイリーの動向探った方がいい。  
…違う？」  
「……………はあ。アンタそういう奴だったわね」  
「…何のお話？」  
「忘れて忘れて。引きこもりのアンタに色恋沙汰なんて分かるはず  
ないしね」  
「…バカにしてる？」  
「…していない」  
メリッサは大げさに首を振りながらそう返した。  
「アンタ。しっかりアタシを守りなさいよ。」  
アタシ戦闘はからつきしんだから」  
「…分かってる。第一目標は希少種の捕獲」  
「…分かってなくない？」  
「がんばる」  
アイリスが自身の大きな胸の前でぐつと握り拳を作る。  
「あのねえ……」  
「失礼致します」  
赤のギルドナイトの制服を身に纏ったギルドナイト・リーダーが  
入室し、一礼した。  
「なに？」  
「は。アイラン島の島長・エルマ様より、お出迎えの用意があると  
の事ですが……」

「ふうん。レイリー様はまだ村にいるの？」

「は？ も、申し訳ございません。直ぐに確認して」

「ああー。いい、いいわ。私が調べた方が早いから」

そう言うなりメリッサはどかりと椅子に座り、目を閉じた。

「……………外出てる」

その横をすりとアイリスが抜け出て、出口へと向かう。

「ア、アイリス様っ！！ 銃をお忘れです！！」

「……………うっかり」

アイリスは少しも反省してなさそうな顔で引き返してきた。部屋に立て掛けていたヘビィボウガンを手に取り背中へと回す。

『老山龍砲』。世界でこのボウガンを扱っているのはアイリスだけである。それはその素材が希少で生産がされにくいという理由だけではない。このボウガンを扱えるのはアイリスしかない、という意味でだ。

「……………待ちな」

アイリスが部屋から退出しようとしたところで、今度はメリッサから声がかかる。

「…なに？」

「何処へ行く気？」

「村」

「駄目よ」

「…どして？」

その問いにため息で答えたメリッサは、壁に立て掛けられていた“アイリスの”ライトボウガンを手にしながら立ち上がった。

「レイリー様はとっくにクエストを開始されているわ。アタシたちも直ぐに出発するよ」

○○○○○○

日が傾きだしていた。周りの木々が夕日に照らされ、ほんのりと

赤みを帯びている。

レイリーたちはあれから適度な場所で簡単な休憩を一度とったのみで、あとはひたすらに歩を進めていた。

「私、孤島って一日あれば島一周できる程度の大きさかと思ってたわ」

アリサが赤く染まった夕日を恨めし気に眺めながらそうぼやく。

「偏見だな。それは小島だろう」

レイリーが地図から目を離さずにそう答える。

「そろそろ洞窟へ入れる入口があるはずなんだがな…」

そうレイリーが顔を上げた瞬間だった。

「アリサ！！」

「っ！？」

寸前のところでアリサが身を翻す。

レイリーが地図を放り出してゲイルホーンに手を伸ばす。続いてマリーもライキリの柄に手を添えていつでも抜刀できる体勢をとった。

ほんの一瞬前までアリサが立っていた場所は、紫色の液体でべとになっていた。

見る見るうちにその場に生えていた植物が枯れていく。

「これは…」

「毒、それも猛毒ですよっ」

マリーが青ざめながらそう叫ぶ。

「いったい何処からよー！」

「正面だ」

「は？」

がさがさと茂みが揺れる音が響いたかと思うと、またしても紫色の液体が放たれてきた。

「っっ！？」

それをアリサが屈むことでやりすごす。

見当外れのところへと着弾したそれは、辺りの植物や地面を腐敗

させた。

「…ゲリヨスかしら」

「いや。違うな。…これは」

レイリーはそこまで言いかけたところで口を噤んだ。同時にマリ  
ーを抱き寄せると、横へと跳躍する。

「レ、レイリーさんっ」

「伏せる!!」

レイリーの叫び声とほぼ同時。

吐き出されていた毒と同じ色の襟巻をしたモンスターが茂みから  
飛び出してきた。

「ロアルロドス!!」

「の、亜種だ!!」

マリーの叫びにレイリーが補足を挟む。

真横に着地したロアルロドス亜種が咆哮をあげる。

「虎砲”!!」

その隙を付いてレイリーが仕掛けた。

一点集中の攻撃がロアルロドス亜種の右足を狙う。

が、それが着弾する前にロアルロドス亜種は再び跳躍した。標的  
を失った矢が地面に突き刺さる。

ロアルロドス亜種は、そのまま空中で毒弾を放った。

「ちいっ」

レイリーがその場からバックステップで後退する。

その横からマリーが飛び出した。

「抜刀術・雫の型“辻斬り”っ!!」

落下してくる巨体目掛けて高速の斬撃が放たれた。

下から潜り込む様な太刀筋が着地体勢をとっていたロアルロドス  
亜種を襲う。それをガードする事はできず、ロアルロドス亜種は回  
避不能の一撃を左前足に喰らった。

雷鳴が轟く。

ロアルロドス亜種が呻きながら地面へと落下した。

それをマリーがサイドステップで回避したところで、今度はアリスが標的との間合いを詰めた。

「乱舞・“乱れ桜”!!!」

無慈悲の斬撃がロアルドス亜種を襲う。

立派な襟巻が幾重にも付けられる切り傷によってぼろぼろになっていく。

「下がれアリス!!!」

レイリーの言葉にアリスがその場を離れる。

ロアルドス亜種の手刀が空を切った。

「納刀術・“一閃”!!!」

差し出される形で前に出ていた右足を狙い、マリーが納刀術で斬りかかる。撃退しようと、ロアルドス亜種が尾を振りかぶった。

「甘い」

マリーに気が逸れているところを、レイリーが逆サイドからマスタブレードで斬りかかった。

気が付いたときにはもう遅い。

レイリーの構えた切っ先がロアルドス亜種の右前足を捉えていた。

両前足を負傷したロアルドス亜種が、ふらついて転倒する。

そこへアリスが止めを刺そうと構えたところで。

「走れ!!! 逃げるぞ!!!」

レイリーが叫んだ。

「なんでよ!? もうちよっとじゃない!!!」

「いいから急げ!!!」

レイリーが武器を納めて走り出す。次いでマリーが、最後にアリスが納得のいかない顔で走り出した。

後方からロアルドス亜種の咆哮が聞こえる。

しかし、3人はそれに構うことなく全力でその場を走り去った。

○○○○○○



完全に日が暮れ、昨夜同様辺りを照らすのは月明かりのみとなった。

その暗闇のなか、レイリーを先頭に3人が歩を進めていた。

「もう少しだったのに、どうして止めを刺さなかったのよ」

「辺りを見てみる。暗闇の中、毒を持つ敵と相對するのは得策ではない。」

それに「

レイリーが足を止めてアリサとマリーへ振り返った。

「もうすぐ目的地だったからな。」

あまり無駄な戦闘は極力避けた方がいい」

そう言って一点を指さす。

「あ」

レイリーが指し示す場所に、ひっそりとそれはあった。

茂みに覆われている中、その部分だけぽっかりと穴が開いている。周りの暗闇も手伝い、もはや真っ黒で何も見えない状態だった。

「じゃあ、ここが……」

「“龍の洞穴”だ。もうここは既に奴らの領域内。」

下手に騒ぎを起こして先手はとられたくない」

「なるほどね」

「ランプを用意しておけ」

「もうこのまま潜入するの？」

「寝込みを襲う」

「大胆ね」

「正々堂々勝負する義務はない。マリー」

「はい。直ぐ用意します」

レイリーが背負っていた荷物をマリーが受け取り、中身の確認を始めた。

レイリーはそれを一瞥した後、じっと洞穴の奥に焦点を向ける。

「どう？ 何かいそうかしら？」

「暗闇でまったく分からん。“呼吸”の乱れは感じないが…。  
むしろそれが不安を煽るな」

「この中にいない、という場合もあり得ますよね」  
マリーがランプをアリサに手渡しながら喋る。

「否定はできない」

「もしそうなら今までの労力は無駄だったってわけね」

「いや、それならそれで待ち伏せすればいい。」

エルマと名乗った島長の資料によれば、

番いの飛竜のねぐらはここで間違いないようだからな」

「ふうん」

アリサが火をランプへと灯しながら相槌を打つ。

「準備できました」

マリーとアリサが揃ってランプを自身の背負っている荷物へと取り付ける。

ぼんやりと輝く炎が、2人の端正な顔を照らし出した。

「どうなっているか分からない以上、明かりだけは死守しろ。」

中で明かりを失えば何もできなくなる」

「分かったわ」

「はい」

「番いを発見するまでの間。」

洞穴内での戦闘は、基本的に俺が全て受け持つ」

そう言いながら、レイリーはゲイルホーンを引き抜いた。

「いくぞ」

レイリーの合図に従い、3人は“龍の洞穴”へと足を踏み入れた。

## 第6話 白銀の月

洞穴という名称が付いているが、“龍の洞穴”は想像以上に広い。中にはいくつかの大きな広場があり、それを幾重にも入り組んでいる。天然の迷路が繋いでいる。天井はごつごつとした岩が連なり、鍾乳洞なども見られるが、全てがそういったものに覆われているわけではない。天井の所々には亀裂が走っており、大きいところでは裂け目から空が伺えるほどだ。そういったところから月明かりが差し込み、洞窟内はうっすらと照らされており、幻想的な空間を作りだしていた。開けた場所ほどその亀裂は大きく開いており、レイリーが危惧するほどの暗闇に満ちた場所ではなかった。

「想像以上に明るい場所だったな」

それを見ながら、レイリーは口を開いた。

「ほんと。真っ暗で何も見えなかったのは、最初の入り口付近だけだったわね。」

こんなに月明かりが入ってくるなんて思わなかったわ」

アリサがそれに同意するかのように頷いた。

「それにしても、静かですね。」

ここに番いの飛竜がいるなんて信じられないです」

マリーがランプをあちこち向けながらそう呟いた。

「確かに。“呼吸”の乱れも全く感じられない。」

既に寝ているか…。余程遠くにいるかだが…」

「ここにいないってのはなしにして欲しいわね。」

とんだ無駄骨になるわよ」

「何にせよ、油断はしないことだ。」

火竜はおるか、他の奴らの気配すらしないというのはおかしい」

レイリーの言葉に、アリサとマリーは改めて気を引き締めなおした。

「……………明かりを消せ」

それからほどなく。広場をさらに2つほど進んだところで、レイリーが足を止めた。その一言に、2人は直ぐに従う。

火が消えたランプがその機能を失い、辺りを照らすのは前方の開けた場所から漏れ込んでくる月明かりのみとなった。

「…いるな。この先だ」

レイリーが少し先の開けた場所に視線を送る。

「……………」

「……………」

アリサとマリィがその言葉に沈黙で答える。

3人は無言で得物に手を伸ばした。

「いくぞ！」

レイリーのかげ声で、3人は一気に駆け出した。

開けた先は、洞窟の出口だった。

天を覆う岩壁は無くなり、満天の星空が顔を出す。

今宵は満月。その神々しい月明かりを背に、それは居た。

赤茶色の鱗は突然変異で銀色に。そのフォルムが月明かりを反射し、鈍く輝いている。サファイヤの色を宿した瞳が、ぎよろりと侵入者を捉えた。

「くるぞー!!」

レイリーが叫ぶのと同時に銀レウスが吼える。それを合図にアリサとマリィは左右に分かれて走り出した。レイリーが中央で向かい合い、左右からアリサとマリィが挟み込むフォーメーションだ。

銀レウスは最初のターゲットにレイリーを選んだようだった。両サイドから距離を詰めようとするアリサたちを無視し、そのままレイリーの元へと突っ込んできた。

「来い」

それに対して笑みを浮かべたレイリーは、腰からマスターブレイドを引き抜き応戦する構えをとる。

しかし、銀レウスはレイリーの予想外の行動に出た。2本の足で詰め寄っていた銀レウスが、レイリーに肉薄した瞬間ブレスを放ち、後方へと跳躍した。

「なっ!?!」

その動作に不意を突かれる形となったレイリーは、左へと跳躍することで辛うじてやり過ぎし地面を転がる。レイリーが先ほどまで立っていた場所は、火球によって吹き飛ばされてちりちりと残り火が土を焼いていた。

「レイっ!?!」

「レイリーさん!?!」

飛翔してしまったことで標的を失ったアリサとマリーが、レイリーの緊急回避に不安を覚えて駆け寄ろうとする。

しかし、それよりも速く。上空へと飛翔していた銀レウスが、レイリー目がけてブレスを放ってきた。

構える暇さえも与えない空より降り注ぐファイヤーボールの連弾に、レイリーは立つことも叶わずそのまま地面を転がり回りながら回避する。

最後の一発まで避けきり安堵のため息を付かけたところで、逆に息を呑む展開となった。

銀レウスが突如急降下し、レイリーを的確に狙ってきたのだ。

「くっ!?!」

銀レウスの尾が腹を捉える寸前のところで、レイリーはマスターブレイドを間に潜り込ませることに成功した。

腹を貫かんとする銀レウスの尾は、マスターブレイドによって阻まれ横に逸れる。

ぎりぎりのところで回避に成功したレイリーが横へと転がるのと同時に、銀レウスの尾が地面へと突き刺さった。

余程の勢いで突っ込んできたのだらう。深々と地面へ突き刺さった尾の棘が抜けなくなり、銀レウスは勢い余ってその場で転倒した。

「アリサ!?! マリー!?!」

「乱舞・“乱れ桜”!!!」

アリサの問答無用の剣劇が銀レウスの顔を捉える。

が。

「っ!?! 硬い!!!」

銀レウスの鱗の硬度に負け、一撃目で剣が弾かれアリサは後退させられた。

「このおっ!!!」

「アリサさん、任せて下さい!!!」

悔しげに歯を食いしばるアリサの背後からマリーが叫ぶ。それを聞いたアリサは追撃を取りやめ、その場をマリーへ譲るべくサイドステップで離れた。

「居合術・“雅”!!!」

それを視界の端で捉えたマリーは、柄へと添えていた掌に力を入れた。

流れるような所作で太刀を抜く。切っ先が標的を捉える。目映いまでの閃光が迸る。

雷鳴が鳴り響く前に。レウスが呻きの声を上げるより前に。

マリーの光を帯びたライキリは、鞘へと身を潜めた。

次いで轟音。銀レウスの呻き声があがる。右翼を斬られた銀レウスは痛みに耐えきれず、立ち上がりかけていた体勢から再び地面へと転がった。

(…翼への攻撃だったわりには、随分な反応だな)

レイリーがその様子を訝しげに捉えていたところで、

「チャンス!!!」

アリサが再び銀レウスへ攻撃すべく距離を詰める。

「演舞・“舞夜桜”!!!」

硬度の関係で頭への攻撃を諦めていたアリサは、地面へ深々と刺さり抜けなくなっていた尾を狙う。

しかし。

「くううっ!?!」

2〜3撃与えたところで、またもや剣が弾かれました。連撃の流れを切られてしまったアリサの上半身が、バランスを崩してよろめく。

「何でこんなに硬いのよっ!!」

アリサが毒づく。

「流石は希少種といったところだろう。」

体を覆う鱗は、なにも色に変色しただけのものでもなかったらしい。

「…けど、おかしいです。私の居合術は徹りましたよ？」

いくらスピードが上乘せされているとはいえ、

ライキリはアリサさんのギルドナイトセーバーより遙かに斬れ味が劣るんですけど…」

「…雷が弱点属性ということもあり得るが…。」

「っ!!!!」

銀レウスがようやく尾を地面から抜き取り、怒りの咆哮をあげた。レイリーが言葉を匂切り、顔をしかめる。アリサとマリーが両耳をふさいだ。

「怒ったか」

それを見たレイリーが迎撃の体勢をとったところで、銀レウスは両翼を大きく広げて飛び上がった。

「は??」

レイリーは間の抜けた声を出した。

銀レウスは止まることなく、ぐんぐんと高度を上げていく。

「あ、あいつ逃げる気よ!!」

アリサが焦り半分怒り半分の声色で叫ぶ。

「ちいつ!!」

レイリーはポシエツトからペイントボールを取り出しながら、片手でゲイルホーンを抜いた。

装填した矢の先端でペイントボールを打ち割る。べちゃっという音とともに、中から特有の匂いを放つ液体が噴き出した。

「レイリーさん、なにを…」

マリーの問いに答える間もなく、レイリーはその矢を上空へと舞い上がった銀レウスへ解き放った。

ペイントの匂いが付着したそれは、銀レウスの左翼へと突き刺さる。

「追うぞー!!」

それを確認したレイリーは、銀レウスを追うべく地面を蹴った。

月明かりのみを頼りに木々の生い茂るフィールドを駆け回るのは、想像以上に難しい。鬱陶しく絡み付く枝や木の葉、そして足元を掬う木の根。

銀レウスが飛び去った方角は、レイリーたちが歩んできた“龍の洞穴”。来た道を引き返す形で、3人は一目散に洞穴へと突入。だが、所詮は人の足。最初に入った洞穴の入り口に辿り着いたころには、既に視認できる範囲に銀レウスはいなかった。

しかし、だからといって搜索が打ち止めになったわけではない。

レイリーが咄嗟に付着させた“匂い”は、銀レウスが間違いなくこの付近を飛び去ったことを示していた。

ペイント液特有の“匂い”とレイリーの“呼吸感知能力”により、目標の見えない搜索は木々の生い茂る森へと移行していた。

「はっ…はっ…ど、どこまで逃げたのよ!!!」

見つけたら、た、ただじゃおかないわよっ!!!」

息も絶え絶えにアリサが呻く。

「はあーっ…はあーっ…」

マリーに至ってはもはや余計な言葉すら喋れないようだった。今にも転びそうなふらふらとした足取りで、やっとのことでレイリーたちの後を追って来ている。持久戦に不向きなマリーには、この先の見えない持久走はまさに地獄であると言えた。

それからしばらくして。



「……………止まれ」

表面上はあくまで無表情。しかし、彼とて人の子。レイリーも僅かだが肩を上下させながら、そう呟いた。

「はぁ、はぁ。…どうしたのよ？」

まだ銀レウスには追いついていないんでしょう？」

玉の汗を流しながらアリサが問う。

「……………いや、そう離れていないところにいるはずだ。

だが、今止まったのはそういう意図ではない」

レイリーがきつい視線で辺りを見渡す。

「はぁーっはぁーっはぁーっ」

マリーはライキリを杖に、かろうじて立っているという状態だった。レイリーの言葉に対して訝しげな視線は送るものの、一切喋らない。やはり、過酷な環境での持久走で相当バテているようだった。

「なに？ 別口の問題でも発生したの？」

「…そうとは限らないんだが」

アリサに上の空で返しつつも気配を探り続ける。

(…おかしいな。確かに視線を感じた気がしたんだが……………。

気のせいだったのか？)

レイリーが納得できない表情をしながらも、警戒を解こうとしたところで。

「アリサ!! 後ろだ!!」

「うっ!？」

じゅわあっという音が鳴り、炎が水蒸気となって宙へと消える。

不意に後方から放たれた炎のブレスは、咄嗟に引き抜かれたアリサのギルドナイトセーバーの噴射する水によって断ち切られていた。「…そちらから出向いてくれるとはな」

レイリーがアリサの無事を確認しつつ、ブレスが放たれた方向へと目を向ける。

そこには右翼を雷の一閃によって裂かれ、左翼をペイント液の染みついた矢で貫かれた銀レウスがいた。サファイヤ色の眼光が3人

を射抜く。

( つ！？ )

レイリーが不意に辺りをきよるきよると見回しだした。

「つ！？ レイリーさんっ！！」

抜刀術・壱ノ型“辻斬り”！！！！」

鈍い音と共に、頭を斬られた銀レウスがよろめく。硬い鱗によってほぼ無傷ではあったが、威力そのものを吸収できるわけではない。レイリーに向かって放たれようとしたブレスは、不意の奇襲によって目標を見失い明後日の方向へと放たれた。着弾した木々がオレンジ色の火を宿す。

「乱舞・“乱れ桜”！！」

よろめいた銀レウスの際を突いたアリサが一瞬で距離を詰める。得意の乱舞で追い打ちをかけようとするものの、銀レウスの硬い鱗によってまたもや遮られてしまう。

「このおっ！！」

「はぁー、はぁー…レイリーさん、どうされたんですか？」

銀レウスから明らかに視線を外しているレイリーに、マリーが問う。

それに対して、レイリーは何も答えずに明後日の方向を見続けていたが…。

ざわっ

無意識のうちに鳥肌が立つ。

レイリーは、殺気の込められた視線を感知した。

( 何だ？ …この感じは )

キュイイイイインッ

そう辺りに神経を尖らせようとしたところで、耳障りな金属音が

レイリーの耳に届いた。

銀レウスに接近戦を挑んでいたアリサを強引に押しつける。

まさに一瞬だった。レイリーは全身の力をかけて、引き抜いたマスターブレイドで銀レウスの足を払いのけた。その直後、自分の耳元を“何か”が掠める。遅れて風を切る音が鳴り、地面から鈍い音が響いた。

その音がした場所を見下ろす。“それ”を見たレイリーの顔が、忌々しげに歪んだ。

## 第7話 希少種争奪戦、開始。

弾き飛ばしたレウスの足元に何か突き刺さる。

咆哮と共に放たれたブレスを掻い潜り、それに視線をやったレイリーは目を見開いた。

(…弾痕っ)

「レイっ!!」

その痕に気を取られたレイリーに追撃を与えるべく、銀レウスの尾がレイリーを狙う。いち早くそれに感ずいたアリサが双剣で軌道を逸らしてやり過ごした。

「どうしたのよっ!!」

「最悪だっ」

「きやつ」

キインッ!!

その光景を見て、思わずマリーは声を上げた。

銀レウスが襲ってきたわけでもないのに、レイリーはその場で跳躍しマスターブレイドを振るった。それは何かを的確に捉え、鋭い音と火花を散らす。

「危ないっ」

レウスが再びレイリーの間を突こうと飛び掛かる。

マリーが剣を振るうよりも先に、アリサが飛び出した。

「演舞・“桜威”!!」

アリサの切っ先が、低空飛行していた銀レウスの片翼を捉える。

空中で予期せぬ攻撃を翼に受けたレウスは、バランスを崩してそのまま地面へと激突した。

「抜刀術・弐の型“風斬り”っ!!!!」

タイミングを合わせたマリーのライキリが、レウスの右足を切り

裂く。

呻きながら振るわれた尾は、マリーを掠める事無く終わった。

「レイっ!!!」

どうなっているかを説明して!!!」

態勢を立て直そうとする銀レウスに突っ込みながらアリサが吠える。

レイリーは、銀レウスとは全く別。見当違いの方向に睨みをきかせていた。

「乱舞・“乱れ桜”!!!」

立ち上がりかけた銀レウスに、アリサの刃が咲き乱れる。

「っ!!! 硬いっ!!!」

振るわれた尾を屈めてやり過ごしたアリサは、バックステップで距離を取った。

銀レウスがゆっくりと立ち上がる。

「……………ギルドマスターが到着したようだ」

それに見向きもせず、レイリーがそう告げる。

「…なんですって?」

肩で息をしながらアリサが問い返した。

「だ、誰が来たんでしょうか…?」

マリーの問いに、レイリーは苦虫を噛み潰したかのような顔をした。

「最悪の組み合わせだ。

奴らに先手を取ったつもりだったが、そううまくはいかないという事か」

そう言い切った直後、レイリーがマスターブレイドを振るう。短剣は、先ほどと同じく鋭い音と火花を上げた。その火花の中から飛んできたモノが、マリーの足元に転がる。

「…じゅ、銃弾?」

「銃弾って。ま、まさか」

アリサは驚愕の色に染まりながらも、銀レウスからの攻撃を避け

る。

「くっ！！ 演舞・“舞夜桜”」

するりと懐に潜り込んだアリサの連撃が、銀レウスの腹を襲った。痛みに呻く銀レウスの反撃が来るより早く、アリサはその場を跳躍で離脱した。

「千里眼”と“流星”だ。間違いない。

こちらからでは視認できない遠距離からの探知・狙撃ができるのはこの2人だけだ」

マスターブレイドが火花を散らす。それと同じ数の銃弾が辺りに散らばった。

「アリサ！！ マリー！！

希少種を森へ誘導しろ！！

ここではそいつが狙い撃ちにされるっ！！」

「ええっ！？

だってマスターの方々もこのレウスの討伐が目的じゃないんですか！？

撃ってもらった方が

「何平和ボケした事を抜かしてんのよ！！」

アリサが銀レウスからの火炎を避けながら叫んだ。

「忘れてないでしょうね！！ これは私たちとギルドの希少種争奪戦なのよ！！

あいつらの射撃でこいつが絶命して御覧なさい！！

手柄は向こうのものになるじゃない！！」

「そういう事だ！！」

再び放たれた銃弾を打ち落としながら、レイリーが相槌を打った。

「いけっ！！ ここまで来て手柄を奪われて堪るか！！」

「こっちよ！！」

アリサが挑発的な剣技でレウスを誘導する。

「千里眼”が何処に居るかは分らんが、

少なくとも“流星”はここら一帯で高い場所の何処かだ！！

対象を狙撃する為には、対象が死角に入ってはならない！！  
必ずこの場所を一望できる所にいるはずだ！！

それを意識して動け！！」

「た、弾の軌道から位置を判断する事はできないんですかっ!？」

ライキリで銀レウスを威嚇しながらマリーが問う。

「そんな理屈が通用するような奴は、ギルドマスターには選ばれん  
っ!！」

レイリーが跳躍しながらマスターブレイドを縦横無尽に振り回す。  
すると前後左右。何の規則性もない場所から、タイミングもバラ  
バラの状態で銃弾が飛んできたらしい。あちこちから金属音が鳴り  
響き、火花散った。

「そ、そんなっ!?!? 超能力者!?!？」

「“千里眼”の奴はある意味そうとも言えるかもしれんが…!!」

こいつはっ

台詞を途切れさせて剣を振るう。その動作によって3発の銃弾が  
打ち落とされた。

「れっきとした人間の仕業だ!! 周りの木々を見てろ!!」

レイリーの指示に従い、レウスへの警戒をとかぬよう最低限の注  
意を向けながら、マリーが周囲に目を走らせる。

すると

微かだが、乾いた音がした。

それとほぼ同時にレイリーが銃弾を打ち落とす。

再び乾いた音。やや遅れて銃弾と剣が交わる金属音。

乾いた音。 。そこでマリーは遂に“それ”を捉えた。

木の表面が、何の脈絡も無く急に“削れた”。

そこから何か光るものが見えた気がする。

猛スピードで飛んでいる“それ”を、レイリーは正確無比に打ち  
落としていた。

「……………うそ。こんな森の中で、跳弾っ!?!？」

「そう言う事っ!?! だっ!?!」

レイリーが顔をしかめながら叫ぶ。

「場所が悪い！！」

ここは周りに高い丘や山が多すぎる！！

狙撃手にとつては絶好の狩猟ポイントって事だ！！」

普段はあまり大きい声を出さないレイリーが叫んでいるからこそ、マリーもようやく事態の異常さを飲み込むことができた。

「跳弾する前から弾を目で追う事ができれば場所も特定できるだろうが、

そこまで俺は人間は捨てられていないっ！！

分かったらさっさと行け！！」

「は、はいっ！！」

マリーが走り出すのと同時に、レイリーも続く。

「まずいっ！！」

2発打ち落とし損ねた。別にうつかり見逃したわけじゃない。物理的に手の届かない軌道から放たれただけだ。

銀レウスの翼左右に命中し、唸り声が響く。

どうやらレイリーと遣り合っても埒が明かないと踏んだらしい。

狙撃手は、完全にレイリーを避けるような軌道で撃ち始めた。

「ちい」

レイリーは舌打ちをすると、マスターブレイドを鞘に納めてゲイルホーンへと持ち替えた。

マスタークラスのメンバーは、各々がそれぞれ常人には到達しえない特技を持っている。それ故に併せ持つプライドが、レイリーとの正面衝突を避ける事は無いと踏んでいたのだが、読みは間違っていたようだ。

「己のプライドより任務をとるか…」。

実力者の中でも一番扱いづらいタイプだ！！」

叫ぶのと同時に矢を引き抜く。

レイリーのマスターブレイドでは決して捉える事が出来なかった銃弾。



それを矢は寸分違わずに捉えて撃ち落した。

弓を用いれば剣に比べて命中精度は下がるものの、レイリーの守備範囲も広まる。

しかし、それは常人なら決して取り得ない選択。

飛んでくる銃弾を剣で打ち落とすだけでもほぼ不可能な荒業だったのにも関わらず、今度は銃弾を弓矢で迎撃。同じ飛び道具、弾を弾で撃ち落すなどできる事では無い。

本来ならば。

それを可能とするのが、レイリーの敏感すぎる気配察知能力。“呼吸”を捉える能力と同義で扱う彼の能力は、最早常人には不可能とされる動作さえ可能とした。

銃弾が切り裂く風の音を聴く。

跳弾の際に傷ついた木から場所を察知する。

鈍く光る金属特有の反射光を目で捉える。

後はそれに応じて条件反射で体を動かすだけだ。

流石にこれは相手も予想外だったのか、銃撃が止んだ。

急に沈黙が訪れる。(とはいえ、アリサとマリーは銀レウスと応戦中なので、厳密には沈黙が訪れるという表現はおかしいが。)

「……………」  
レイリーは追撃を警戒すべく、さらに気配感知の度合いを上げた。

○○○○○○○○

レイリーたちが銀レウスと戦っている場所から1km程離れた場所。レイリーたちを一望できるその場所に、2人の女性がいた。

「……………」  
アイリスが、老山龍砲に装着されているスコープから無言で顔を上げる。

「どうしたの？」

その動作を見て、メリッサは怪訝な顔でそう問うた。

「……………」

「……………何か言いなさいよ」

「あ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………え、終わり？ “あ”って、何よそれ」

「何か言えって言ったから、言った」

「なにになに？ アタシはアンタを殺していいわけ？」

「……………殺し。よくない」

「それ、ハンターが言うセリフじゃない？」

「レイリー強い」

「急に本題に入んじやないわよ」

「銃弾、全部止められる」

「ふふん。長距離からちまちまとしか責められないアンタじゃ勝て

つこないわよ」

「メリッサだって、見てるだけ」

「うっさい。アタシは見てるんじゃない、視てんのよ」

「……………へえ」

「……………殺しても、ここで埋めてしまえばバレないかしら」

「それは得策とは言えない」

「アンタのアタシに対する態度も、得策とは言えないんじゃない？」

「……………気が散る」

アイリスは「しーっ」と言っただけで人差し指を自分の口元へ持っている、直ぐにスコープへと視線を戻した。

「……………」

「……………絶対殺してやる」

メリツサがドスの効いた声で呟いたが、アイリスは見向きもせず  
に再びトリガーに指をかけた。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

少しのタイムラグを挟んだあと、再び狙撃が開始された。それに  
レイリーがゲイルホーンで応戦する。

外見からは同じ膠着状態に戻ったかのように捉えられるが、実際  
にはお互いの立場は完全に逆になっていた。

序盤は遠距離からの狙撃に対し、片手剣と弓で迎撃するという荒  
業でアイリスを圧倒していたレイリーだったが、

(…まずいな。このままでは、こちらの弾切れの方が早いぞ)  
こういうことである。

それぞれの大きさを考えれば直ぐに分かることだが、銃の弾に比  
べて弓のそれは明らかにかさばるといふことは言うまでもない。そ  
して、それは携帯できる限界数に直結する。

レイリーの携帯できる矢の最高本数は80本。アイリスが所持し  
ている弾数よりも、圧倒的に少ない。

銃対弓。飛び道具同士の対決は、その持ち手の技術ではなく、性  
能故の弱点の露呈によって決着が着こうとしていた。

「くそつ。ここまでか？」

レイリーが悔しげにそう呟いた瞬間。

空から轟音が鳴り響いた。

## 第8話 “異端” レイリーvs “流星” アイリス

耳を劈くような雷鳴が轟いた。暗闇に飲まれていた孤島に、一筋の光が落ちる。

「……………雷」

アイリスは感情の感じられない目尻を空へと向けた。

「あーあー。こりゃ出直しかしらねえ」

その横でメリッサがかつたるような声色で呟く。それに何を返すわけでもなく、アイリスは再びスコープへと視線を戻した。

「まだやる気なの？ 銃が濡れたら洒落にならないわよ」

「平気」

スコープから顔も上げず、アイリスはそう答える。そして、何の躊躇いもなくこう言い切った。

「雨が降ってくる前に、終わらせるから」

〇  
〇  
〇  
〇  
〇  
〇

(……………恵みの雨だな)

レイリーは声には出さずに、心の中でそう呟いた。

このまま長期戦へと纏れ込んでいたのなら、十中八九負けていただろう。弾数限界。それは考えるまでもなく明白だった。

既にレイリー・アリス・マリーが銀レウスに応戦している場所は小雨が降り出している。

ギルドマスターがどれだけ離れた位置から狙撃しているかは掴めていなかったが、それでもその場所に雨が降り出すのも時間の問題であると言えた。

火薬を用いる銃は、雨の中では使えない。

長距離狙撃を主体とする“流星”の銃は、まさに火力(すなわち飛距離)が全てだ。大人しく撤退せざるを得ないだろう。

ピシヤアアアアッ！！！！

そう考えている間にも雷鳴は響く。

それを捉えたところで、レイリーは声を張り上げた。

「マリー！！ お前は下がれ！！」

銀レウスへ今まさに抜刀術で斬りかかろうとしていたマリーは、そのレイリーからの命令を聞いて思わずすっ転びそうになった。

「ど、どうしてですかっ！？」

「雷鳴を聞いたろう！！ 落雷だ！！」

お前のライキリは、まさに避雷針になりかねん！！」

そうやり取りをしている間にも、ますます雷鳴は強まる。

「こっちも決着が着きそうだ！！」

あとは俺とアリサに っ！？」

そこまで言いかけて、レイリーはゲイルホーンを投げ捨てた。

同時にマスターブレイドを引き抜く。

鞘から抜かれたそれは寸分の狂いもなく、銀レウス目掛けて飛んできた銃弾を打ち落とす。

「ちいっ」

思わず舌打ちする。

(まだやるうってのか…)

こちらの弾をできる限り削っておこうという作戦か。

はたまた、銃が使い物にならなくなるまでのわずかな時間で仕留める自信があるのか。

「…面倒臭え」

そう呟くなり、レイリーは地に落ちたゲイルホーンを足で蹴り上げ開いた手で掴み取る。

「レイリーさん！！」

その間、マリーは銀レウスへと突っ込みながらレイリーの名を呼んだ。レイリーは、その意図を瞬時に理解する。

「お前に扱えるのか!？」

そう返しながら、レイリーはマリーに向かってマスターブレイドを放り投げた。

それを見ることなくキャッチしたマリーは、そのまま銀レウスと応戦していたアリサへと叫ぶ。

「伏せて下さい!！」

それに従い、アリサが身を屈める。その背を台に、マリーは銀レウスの真上へと跳躍した。

迎撃すべく、銀レウスがブレスを吐く体勢をとる。

「遅い!! “桜威”!!！」

アリサがそれを喰いとめるべく、渾身の一撃を銀レウスの左足へと叩き込んだ。

硬い甲殻によって阻まれはしたが、強い衝撃を片足に受けた銀レウスは、ブレスを見当違いのところへと射出する。

「はあっ!!！」

その隙を見計らって、マリーのの全体重を乗せたマスターブレイドが、銀レウスの右翼の付け根を捉えた。

渾身の力を纏ったそれは、硬い甲殻に阻まれることもなく、ズブツという音を立て柄本まで突き刺さる。

銀レウスが咆哮を上げた。

痛みあまり暴れだした銀レウスに弾き飛ばされ、マリーが地面を転がる。

「マリー!!！」

「へ、平気です!! それよりアリサさんっ、追撃を!!！」

「…強がって!!！」

アリサが顔を歪ませながら、銀レウスとの距離を一気に縮める。

「終劇・“神楽”!!！」

マスターブレイドを中心として、十の字に斬撃が走る。冗談じゃ無いほどの鮮血が吹き荒れる。斬りかかったアリサの服は、銀レウスの血でびしょびしょになった。

「つぶ!?」

予想外の獲物からの反応に怯んだアリサの顔面に、血がモロにかかる。

それを見逃す相手ではなかった。

ドゴッ!!

「　　っあ!?!」

アリサの腹部を、銀レウスの尾が薙ぐ。

幸いにして刺が刺さることは無かったが、宙で遠心力も加えられた痛恨の一撃を受けたアリサは、面白いくらいに吹っ飛んだ。

「アリサあ!?!」

地面を転がるアリサに向かって、レイリーが叫ぶ。

その一瞬が、勝敗を決する要因となった。

チユンッ!!

レイリーの手に握られていたゲイルホーンが弾け飛ぶ。

原因は言うまでもない。アイリスによる銃撃だ。

狙撃手に一切の手傷を負わせることなく武器だけを狙い撃ちできるその腕前は、レイリーにとっても称賛に値するものだったが、今は生憎それどころではない。

レイリーは地に伏したアリサの元へと駆け寄る。

「アリサ!?!」

「けほっ!?!　なんで…こっちに来るのよっ!?!」

痛みに顔をしかめながら、アリサは寄ってきたレイリーにそう吐き捨てた。

「貴方のっ…。ガードが無くなったら…、希少種は丸裸じゃないっ

!?!」

「…お前っ」

「私の知っている貴方は、そんな腑抜けじゃないでしょうっ!!」  
アリサの叫びと同時に、銀レウスの咆哮があがる。  
振り向けば銀レウスにマリィが対峙していた。

「マリィっ!! お前の刀は使えないと言ったはずだ!!」  
「…知ってますっ!!」

行動と言動が一致していない。

マリィの手は、明らかにライキリの柄に添えられていた。

「くそっ!!… どのつもこいつもっ!!」

レイリィが地面を蹴る。

その間にも、遠距離からの銃撃はやまない。

(…銃弾を迎撃するだけではギリ貧になるだけだ。

銀レウスの息の根を短時間で止められないのなら、時間稼ぎは不要。

ならば……)

銀レウスの頭・首・翼・背・足・尾。様々な部位から火花と鮮血が舞う。

ゲイルホーンを拾ったレイリィは、それを防ぐことなくただじつと見つめた。

(……見切れるかどうかは、賭けだ)

そう考えている間にも、次々と銃弾は銀レウスを襲っていた。暴れまわる銀レウスへと、着実に銃弾は届く。レイリィが視認できる限りでは、一発も外してはいない。それも、近くで隙を伺っているマリィには傷1つ付けずに、だ。

跳弾の場所・音・角度。

その銀レウスへと着弾するまでの時間。

そして攻撃範囲と死角となる部位。

様々な情報が、高速でレイリィの頭の中で処理されていく。

レイリィはゆっくりと目を閉じた。

(大したものだ。伊達にギルドマスターの座に居座ってはいないな。  
“流星”。お前の狙撃の精密さには、本当に驚かされる。



だが………)

口元を歪ませながら、目を開ける。

「それがお前の敗因だ」

ゲイルホーンに矢を装填する。

レイリーはそれを、あらぬ方向へ向かって打ち放った。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「……………うそ」

トリガーから指を離し、スコープから顔を上げたアイリスが呟く。  
年中無休で無表情を貫くその顔は、驚愕の色に染まっていた。

「どうしたの？」

横でじつと成り行きを見守っていたメリッサが問う。

それに数秒遅れて、アイリスが立ち上がった。

「なに？ 仕留めたの？」

「…違う」

ふるふると首を振る。

そして信じられないという顔をして、メリッサの方へ向き直った。

「居場所が、バレた」

「…何ですって？」

メリッサが怪訝そうな顔をする。

「アタシが知っているレイリー様は、千里眼は使えないはずなんだけど」

「…でも、バレた」

「何でそれが分かるのよ」

「……………」

アイリスは悔しげに顔を歪ませると、ゆっくりと答えた。

「私が居る方に向かって、一発だけ弓を放ってきた。」

それは私の居場所が特定された証拠」

それだけ告げると、アイリスはもう興味を失ったかのように銀レ

ウスが暴れまわる方角に背を向けて歩き出した。

「ちよ、ちよつと。アンタ何処へ行く気よ!!」

「金火竜のところ」

「銀はどうすんのよ!!」

「もついい」

「どうして!!」

「狙撃手は、居場所を突き止められたら死。

つまり、負けたということ」

「…あのねえ」

メリッサがため息をつく。

変なところでプライドを出されては困る。メリッサとアイリスは、グランドマスターから直々に命を受けて来ている立場なのだ。勝負に負けたから諦めましたじゃ話にならない。

が。

(…説得するのもメンドクサイし、レイリー様とは対峙したくないし…。

ま、いっか)

ものの数秒で納得したメリッサは、ニヤリと口を歪ませながらアイリスの名を呼んだ。

「アイリス!!」

「…なに?」

「何処へ行く気よ」

二度目の質問に、アイリスは少しむつとした顔を見せる。

「…金火竜のところ」

「アンタ、場所知らないでしょ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………早く視て」

「はいはい」

ほんのりと頬を赤らめながらアイリスが戻ってくる。

それに苦笑しながら、メリッサは両手を合わせて目を閉じた。

(…それにしても、レイリー様はなんでこちらの場所が分かったのかしら)

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

(…賭けには勝てたようだな)

己のプライドより任務を取る者には通用しない手だと思っていたが、早計だったらしい。

ミシリと嫌な音を立てたゲイルホーンに、レイリーは顔をしかめた。

(いや、勝ったとは言えないか…)

“流星”は、一度俺の得物をハジいている。

本来なら、あそこで勝敗は決していたんだからな)

銃弾は一向に飛んで来ない。それを確認して、レイリーは改めて銀レウスと向き直った。

既に満身創痍といった風情だが、銀レウスの瞳からまだ闘志は消えていない。

「さて」

早いところ仕留めてしまわねばなるまい。

アリサはかなりのダメージを負ったようで、地に伏したままだ。

そして今のところは威嚇で収まっているものの、いつマリーがライキリを抜くか分かったものではない。

幸いにして、アイリスの銃弾は息の根は止められないまでも、かなりのダメージを蓄積してくれたようだった。

銀レウスの動きは最初とは比べるべくもなく、明らかに鈍っている。

「まずはマスターブレイドを返して貰わねばな」

そう言つて、レイリーはアリサが取り落としたギルドナイトセイバーを拾い上げた。

「レイリーさん？」

それを怪訝な顔でマリーが捉える。

「お前の片手剣の腕よりは遙かにマシだ。お前はアリサのところへ行つてろ」

「で、でもっ」

「行け。武器が使えない以上、居ても邪魔なだけだ」

それだけ告げて、レイリーはマリーから視線を外した。

ピシヤアアアアアッ！！！！

雷鳴が轟く。雨はいつの間にか本降りになっていた。

限りなく悪い視界の中、レイリーがほくそ笑む。

「散々手間を取らせてくれたが、お前はここで終わりだ」

第9話 “土産” (前書き)

励みになります。評価システムや感想等でリアクションを頂けると嬉しいです。

## 第9話 “土産”

「ぐ…あ…」

どさりと目の前の男が崩れ落ちる。首筋から流れ出る赤い液体は、一向に止まる気配を見せない。それも天から降り注ぐ雨によって、瞬く間に洗い流されていく。

人がゴミのように地面に散らばっている。比喩ではなく。

たった今、最後の一人が“片付いた”ところだった。

長い外套で頭まですっぽりと覆い隠した男が、赤く濡れたナイフを鞘へと収める。それに続いて後ろに控えていた男たちも得物を仕舞った。

「ベルディアさん、粗方片付け終わりました」

そのうちの1人が、離れた場所で傍観していた男へと報告する。

「…ああ」

報告を受けた男・ベルディアは、満足そうに頷くと飛行船にもたれ掛けていた体を起こした。

「が…ぐ…こ、こん…なことを…」

赤いギルドナイトの制服を纏った男が、地に伏しながら息も絶え絶えに喋る。その赤い制服は、元の色よりも遥かに黒ずんでいた。

無論、自分の血で。

「…ただで…済む、と…思うな」

「タダで済むわきゃねえーだろう？」

ベルディアはそうせせら笑いながら、ギルドナイトの男に歩み寄る。その手が自身の腰元に延びた。激しい雨音の中でも、金属の擦れる特有の音は嫌に耳に響く。

「頭から、たんまり報酬は貰ってるぞ」

どしゅっ

躊躇いなく振り下ろされた凶刃は、躊躇いなく目の前の男の命を刈り取った。

「死体はどうしますか？」

「放つとけ。成仏しようがしまいが、俺たちには関係ねーんだ」

「はっ」

「さあて、行くとするか」

そう言って、ベルディアは不敵に笑った。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「はあっ!!」

レイリーの正確無比な太刀筋が銀レウスを襲う。

銀レウスからの攻撃を巧みに躲し、猛撃を続けるレイリーを、マリーは半ば呆然と眺めていた。

「…レイリーさん。双剣も使うことができたんですね」

「……当たり前でしょ」

マリーに助け起こされながら、アリサは面白くもなさそうにそう答える。

「レイは両利き。もともとは双剣使だったのよ。」

私と出会うちよっと前かららしいわ。片手剣と弓の変則に代えたのって」

「…そうだったんですか」

「それでも、まだあの時は双剣の方が強かったんだけどね…」

そこまで言ってアリサは顔を俯かせた。

「双剣は2人いらなくて、自分の得意武器を私に譲って…」

…いつもそう。邪険にするくせに、最後は私に譲ってくれてる。

結局、私はレイの足を引っ張ってるだけ……」

「アリサさん……」

独り言のようにアリサが呟く。

雨足は一向に収まらない。

アリサの頬を伝うものは、雨なのかそれとも別のものなのか。マリーには分からなかった。

だから、気づけなかった。

「私は、“生まれた時から”、レイの心を縛ってる」  
アリサの言葉が、矛盾を孕んでいた事に。

鮮血が吹き荒れる。真夜中、そして大雨の中でも、その液体は鮮やかに舞っていた。

「そこだー!!」

銀レウスの尾を躲し、ギルドナイトセイバーの切っ先を伸ばす。それを銀レウスは、後方へと飛翔することで回避した。  
が。

マスターブレイドが刺さったままの翼は、もはや銀レウスを機敏に浮かすことはできないようだ。バランスを崩した銀レウスは、そのまま地面へと墜落した。

そこへ追撃をかけるべく、レイリーが地面を蹴る。

しかし、その攻撃が銀レウスに届くより先に。

「うおっ!?!」

吐かれたブレスがレイリーの足を止めた。

直撃はしなかったものの、前方すぐの地面に被弾したせいで足元が爆発。その反動でレイリーが吹き飛ばされる。

「レイっ!?!」

「レイリーさん!?!」

アリサとマリーが叫ぶ。

ぬかるんだ地面を転がりながら体勢を整えようとするレイリーの眼前には、既に銀レウスの新たななるブレスが肉薄していた。

「はぁあっ!?!」

不安定な姿勢のまま双剣を振るう。飛来してきた5発のブレスのうち、自身に直撃すると判断した3発を斬り捨てる。対象物に当たると水が噴き出す仕様になっているギルドナイトセイバーだからこ



そでできる芸当だ。じゅわあっという音だけを残し、物理的な効力を掻き消す。

しかし、その体勢では3発が限界だった。残り2発はレイリーを捉えないまでも、直ぐ近くの地面に着弾し爆発する。

「くそっ!!!」

雨で視界が悪い。ぬかるんだ地面で足元も悪い。

再び宙へと放り出されたレイリーが悪態をつく。

レイリーが地面へと着地する前に攻撃すべく、銀レウスが地面を蹴る。

「 来いっ」

レイリーの目が細められる。

空中で体勢を整えながら、レイリーがギルドナイトセイバーを構えた。

「グオオオオオオオツ!!!」

「はああああああつ!!!」

ほぼ同時に叫び声上がる。

銀レウスの噛みつきとレイリーの斬撃。

両者の攻撃が、それぞれの体を襲う。

リーチは銀レウスの方が長い。

銀レウスの一撃が、間違いなくレイリーの体を捉えたように見えたところで。

くんっ

レイリーが突き出していたギルドナイトセイバーの切っ先を下げ、空中で体を捻るように回転した。

銀レウスの歯は、レイリーの体を捉えることなく素通りする。

お互いの体がすれ違う。

瞬間、レイリーが足を突き出した。

その足が、銀レウスの右翼に刺さりっぱなしだったマスターブレ

イドの柄を捉える。

肉を裂き、骨を抉る音が聞こえた。

レイリーの脚力に銀レウス自身の突進の力も加わり、マスターブレイドの刃は右翼付け根を深々と蹂躪する。

銀レウスが再び咆哮を上げた。立ち止まろうと足を止めたが、滑りやすい地面に足を纏れさせ転倒する。レイリーも逆サイドで着地に失敗して転がっていた。

「ふっ」

立ち上がるより先に、レイリーがギルドナイトセイバーの片割れを投擲する。

甲高い音が響く。鱗に阻まれ突き刺さりはしなかったものの、再び攻撃態勢を取ろうとしていた銀レウスを怯ませることに成功した。それを確認するよりも早く地面を蹴っていたレイリーは、弾かれて宙を舞っていたそれを掴み、倒れていた銀レウスとの距離を瞬間に詰める。

レイリーはここまでの戦いで、相対する敵の弱点をほぼ正確に掴み取っていた。

(…どうやら、希少種は通常の火竜と弱点部位が異なるようだな。

こいつの弱点は……)

銀レウスが難いできた尾を躲し、懐に潜り込む。逃れる術はない。レイリーは躊躇いなくギルドナイトセイバーを突きだした。ドシューと小気味の良い音を立て、銀レウスの右翼に刃が突き刺さる。

銀レウスが咆哮を上げる。上を向いた隙を狙い、レイリーは再び翼を斬り裂いた。

弱い部位に相次ぐ斬撃に、銀レウスは一旦距離を取るべく再び尾を振ろうとする。

その動作が、仇になった。

ズバンッ

一際大きい音が鳴り響く。

銀レウスの尾は、宙を円盤のように回転しながら舞い、地面へと落下した。

「動作が短絡的すぎる。出会った頃の方がまだマシだった。死期を感じて急いたのか？」

痛みを崩れ落ちる銀レウスにそう投げかけながら、レイリーはゆっくりと銀レウスの元へと歩を進める。

もはや立ち上がる気力も無いのだろう。銀レウスはそれを迎撃する素振りすら見せず、地に伏したままだ。しかし、その瞳からは微塵の恐怖も感じられない。“呼吸”を探ってみても死の恐怖を感じることはできなかつた。

「流石は“王者”と呼ばれるだけのことはある。

その意気に敬意を表しよう。安心しろ、直ぐに終わらせてやる」

銀レウスは、もはや吠えることもしなかつた。

レイリーの切っ先が天を仰ぐ。

「 “神楽” 」

躊躇いの無い一撃が、銀レウスの命を刈り取った。

○○○○○○○○

「無事か？」

戦いが終わったことを確認し、マリーがアリサに寄り添いながらゆっくりと近づいてきた。

それを見たレイリーが2人に問う。

「私の傷は大したことありません。

ただ、アリサさんが 「

「私も特に問題ないわ」

マリーの言葉を遮るように、アリサがそう告げる。

レイリーは思わず苦笑した。

「やせ我慢するな」

「してないわ」

「…まあいい。少なくとも、今日はここで打ち止めだ」

「合図玉を放りますか？」

「いや、この雨じゃ使えないし、第一この島にAGSは居ないだろ  
う？」

「あ、そうでした」

「銀レウスの死体はこのままってこと…」

「そうなるな。剥ぎ取れる素材は俺が取っておこう。

マリィ。怪我の具合が軽いなら、近くでテントを張れる場所を探  
してくれ。

アリサを安静にさせる場所を作らなくてはな

「分かりました」

「ちよつと、私は大丈夫だって」

「大丈夫じゃないから、こう言ってるんだ」

「いたっ！！」

レイリーがアリサの脇腹を突く。軽く触れただけにも関わらず、

アリサは顔をしかめた。

「あばらを何本か持ってかれてる。無理はするな」

「くううっ」

アリサの顔が歪む。痛み以外の理由で歪んだのは明白だったが、

レイリーはそれに気づかない振りをした。

「…ったく。まさか自分が斬りつけた返り血で不意を突かれるとは

…」

「うるさいわね」

アリサがそっぽを向く。

レイリーはため息をついた。

「“らしくない”のは、お前の方なんじゃないか？」

「……………どういう意味？」

アリサの鋭い視線がレイリーを射抜く。

「……………」

「……………」

無言で見つめ合う。

「…その眼だけは、昔から何も変わらないな」

「…貴方の、その知った風な口ぶりもね」

「減らず口が叩けるなら、まだまだ余裕だな」

「言ったでしょ。平気だって」

あくまでもそう言い張るアリサに、レイリーは再度ため息を付くと、

「これは返しておく」

そう言ってギルドナイトセイバーをアリサの手に握らせた。

返事を聞くまでもなく立ち上がる。

銀レウスの素材を回収しようと思いを向けたところでアリサから声がかかった。

「……………レイ。貴方、もう双剣は使わないの…?」

「……………お前は自分の傷の手当でもしておけ」

振り向きもせず。質問に答えることもせず、レイリーはそれだけ告げた。

ぎしっ

嫌な音が耳に届く。

レイリーは顔を歪めながらその音を聞いた。

音の主は見るまでもなくわかつている。

『角王弓ゲイルホーン』

レイリーの手元に残った唯一にして絶対の弓。

既に矢は6本しか残っていないが、それ以上の問題が発生していた。

(…“流星”め。厄介な土産を残してくれたものだ)

背中に手を伸ばし、長年愛用してきたそれを見据える。

深々と入った亀裂は、これがそう長くは持たないということを雄弁に物語っていた。

（持つてあと1〜2発か。それに、アリサも深手を負っている。

おそらく金火竜は……………）

レイリーもマリーも無傷ではない。

更に、雨が止まない限りマリーの剣も封じられたままだ。

そして極めつけは。

「金火竜の居場所が、まだ特定できていない」

あれだけ捜索にリードしていたにも関わらず、マスター2人にはあそこまで追い込まれた。

おそらく、次は同じ手は通用しないだろう。

“千里眼”が、既に場所を突き止めていたとしたら…。

「…分が悪すぎる」

レイリーの咳きは、誰の耳に届くでもなく、そつと雨音に掻き消された。

## 第10話 不穩（前書き）

お待たせしました。約3ヶ月ぶりの更新です。

お気に入り登録を解除せず、待っていて下さった皆様。

毎日足しげく通いつめて下さった皆様。

足跡は残さずも、実は気にして下さった皆様。

この場を借りてお詫びと共に、お礼申し上げます。

更新頻度は多少落ちるかもしれませんが、これからもよろしくお願  
い致します。

豊島将紀

## 第10話 不穩

「…降ってきましたか」

アイラン島の島長・エルマは、窓ガラス越しに雷を伴う雨雲を見上げた。

既に夜は更け、外の景色は漆黒に彩られている。まるで今の自分の心を表しているようだ、と感じたところで、エルマは自分の考えに苦笑した。

ピシャアアアアアッ！！

雷が鳴り響く。窓の外の景色が、一瞬だけ露わになった。

だから見えてしまった。自分の家に向かって来る集団がいることに。

エルマは思わず目を閉じる。

しかし逃避する間もなく、彼女の家のドアは荒々しく開け放たれた。

「夜分に失礼」

失礼そんな素振りはい少しも見せず、形式的な挨拶だけ告げた男が、何の許可もなくエルマの家へと上り込んで来る。その後ろに続くように、次々と男たちが中へと押し入って来た。

「ノックも無しにいきなり入ってくるとは何事ですか。分別を弁えなさい」

エルマが腰を上げ、毅然とした態度で応対する。

一番最初に入ってきた男がそれを見て、ニヤリと顔を歪めた。

「弁えるのはアンタの方だろうよ。」

「アンタら島の住民どもが、俺たちにいくら借りがあると思ってる」

「っ」  
エルマの表情が歪む。



「それに」

その反応に満足した男がやや大仰に後の言葉を紡いだ。

「ベルディアさんを、雨の中待たせるわけにはいかないだろう？」

「何ですって？」

エルマが目を見開く。

その視線の先。我が家の敷居を跨いで入ってきた男に、エルマは絶句した。

「よお。ご機嫌如何かな？ アイラン島長・エルマ君」

「……………ベルディステア」

「てめえっ！ ベルディアさん呼び捨てにしてんじゃあ」

「あー。いい、いい。気にするな」

ベルディアは、雨でずぶ濡れになった外套を部下に手渡ししながらそれを制す。

「この女は我が組織の常連さん。大切なお客様だ。」

こんな事で目くじら立てて殺しちまったら、俺たちが頭に殺されちまっ」

そう言いながら葉巻を啜える。傍に控えていた部下がすぐさま火を灯した。

「……………それで。わざわざこのような辺境の地へ、なぜ貴方が？」

ゆったりと煙を吐き出す銀髪の男へ向かって、エルマが問いかける。

「いや、なあに……………」

勿体付けるようにもう一度葉巻を口にしてから、ベルディアが答えた。

「俺たちの頭は心配性でねえ。」

いくら我々と契りを結んだお客様であろうと、野放しにやあできねえ性分なのだとさ」

「……………」

「まあもつとも。今回は必要無かったみたいだがな。」

ちやーんとギルドの犬共を迎え入れてくれたみてえじゃねえか。

しかも、あの刻印が入った船はマスターが出勤する際にしか使用  
されない」

その言葉に、エルマの端正な眉がピクリと反応する。

「……………見たのですか？ その船を」

「ああ。もちろんだとも」

くくつとベルディアが笑いを漏らす。

「俺たちの船が着陸するのに、邪魔で仕方なかった」

「まさかっ!？」

俯き加減だったエルマの顔が、勢いよく上げられた。

「はははっ」

その反応に気を良くしたベルディアが、声を出して笑う。

「そう気を荒げるなよ。あいつらはもう二度と剣は握れねえ。それ  
だけだ」

「そんな……………」

悲痛な顔をしたエルマが、よろよると椅子へ崩れ落ちる。

「んで？ 希少種の匂いを嗅ぎつけて、

わざわざこんな辺鄙な地まで足を運んできたのはどいつだ？」

エルマの動揺など気にも留めず、ベルディアが問う。

それに対して、エルマは震える声で応対した。

「…メリッサ様と、アイリス様です」

「……………“千里眼”の小娘か。感づかれるのはまずいな。おい、お  
前」

ベルディアが控えていた部下に声をかける。

「作戦よりちよつとばかし早いが、もういいだろう。“檻”を開け  
る」

「はっ」

命令を受けた男がエルマの家から退出する。

それを見届けたベルディアは、不敵に笑った。

「さあて…。狩りの始まりだ」

○○○○○○

朝起きたら、既に雨は上がっていた。と、いうのはあくまで夜をしつかりと睡眠で過ごした者のみを持ちうる意見であり、残念ながらレイリーはそれに該当しなかった。

朝の陽ざしに顔をしかめたレイリーは、テントの前でゆっくりと目を開ける。

体が重い。昨晚の疲れはとれることなく体にへばり付いたままだった。節々も痛む。問題は山積みだった。

「…おはようございます」

中から寝ぼけ眼でマリーが起きてくる。

「おう。早く顔洗いに行つて来い」

「……はい」

ふらふらと川辺の方へ歩いて行く。

どうやらマリーも昨日の疲労を引きずっているようだった。昨日の朝は、身だしなみを整える女性の顔がどうの言っていたが、今日は完全にそちらへ頭がいつていない。

「まあ、面倒くさい抗議を受けるより遥かにマシか…」

レイリーは現実逃避気味に、そう呟いた。

「で？」

開口一番。アリサはその1音に、自身の疑問の全てを込めた。

「で？ とは？」

対してレイリーはそれを知りつつもとぼけた対応を取る。

「とぼけないでっ！！ これからどうするのかって話よ！！」

「朝から怒鳴るな。騒々しい」

「んな！？ なんですってえ〜 いたっ!?!」

力んだせいで、痛めた脇腹に響いたのだろう。アリサは勝手に吠えて勝手にうづくまった。アバラが数本イッているのだ、ある意味

当たり前の結果と言える。

レイリーは見て見ぬふりを決め込み、何事も無かったかのように、マリーが用意した朝食に舌鼓を打っていた。

それ“も”お気に召さなかったらしい。

「ちよつとは心配してよ!!」

「心配してと声に出せるうちは、心配する必要がない」

「れ、レイリーさんもアリサさんも落ち着いて…」

ヒートアップする2人の会話に、おろおろとマリーが加わる。

「アンタは黙ってて!! 私ハレイに話してんのよ!!」

「俺はお前と話す気がない」

「~~~~っ!!!!!!」

アリサが声にならない悲鳴（奇声？）を上げたところで、レイリーは、ぽつりとその答えを口にした。

「撤退だ」

「……………は？」

「…え？」

アリサとマリーが、その予想だにできなかった結論に、思わず素っ頓狂な声を上げる。

「この島から、撤退する。このクエストは失敗だ」

「ふざけないでっ!!!!」

「きゅっ」

がしゃんと。食器の砕ける音が鳴る。言うまでもない。アリサが勢いよく立ち上がったせいで、周囲の食器を巻き込んだのだ。マリーが用意した朝食も、可哀そうなほど巻き散らかされていた。

それに構う様子もなく、今だ自分に目を合わせないレイリーに対して、アリサはより頭に血を上らせた。

「クエストが!! 失敗!? ふざけんじゃないわよ!!」

成功率10割を誇る貴方が口にして良いことじゃないわ!!」

「自発的に吹聴して回ったものじゃない。

他人の期待に応える義理など、俺は持ち合わせちゃいない」

「そういう問題じゃないでしょ！！　つつう！？」

再び、アリサが脇腹の痛みで顔をしかめる。そこで初めて、レイリーはアリサの顔を正面から捉えた。

「痛いのなら、やせ我慢するな。安心しろ、直ぐ医者に連れて行く」「そういう問題じゃないって言ってるんでしょが！！」

「ダメですよ！！　アリサさんっ！！」

今にもレイリーに飛び掛かろうとしていたアリサに、マリーが抱き着く形で抑え込む。

「ちょ！？　ちよつと離しなさいよ！！」

「落ち着いて下さい、アリサさん！！　重症なんですから！！」

じたばたともがく。が。いつもの力強さは全くと言っていいほど感じられない。マリーが易々と抑え込めってしまうレベルだ。

それを横目で見ていたレイリーは、これ見よがしにため息をついて重い腰を上げた。そのままアリサに背を向け、近くで流れる川辺の方へと歩いて行く。

「待ちなさいよ！！　レイっ！！」

「食事が終わり次第、テントを片付けて撤収だ」

これで話は終わりだとばかりに、レイリーがそう告げる。アリサの体からもすつと力が抜けた。マリーがそれに安堵のため息を漏らすのと、ほぼ同時。これまでとは打って変わり、今にも消え入りそうな声色で、アリサが呟いた。

「私がいるからなの？　私が貴方の邪魔をしてるの？」

そうだよ。そう答えようとしていた口を、レイリーは無理やり抑え込んだ。

過去、クエスト達成率10割を保っていたのは、自分に守るべき対象が無かったから。ただひたすらに、相手を殺すことだけを考えれば良かった。死ぬのなら、所詮自分はその間の人間だったと、思えばいいだけだった。

アリスが付きまとい始めたあの時だってそう。初めにパートナーを断った時点で、自分とアリスの関係は赤の他人のまま動かない。自分に付きまといたいなら、そうすればいい。勝手にしろ。どうなるうかがお前の勝手だし、自己責任だ。そう思っていた。

いつからだろうか。

困っているアイツを見て、手を差し出してしまったのは。

いつからだろうか。

乞われるアイツの話を聞いて、剣術の手ほどきをしてしまったのは。

いつからだろうか。

勇むアイツの腕を信じて、背中を預けるようになってしまったのは。

クエスト達成は、徐々に困難になってきた。別に、相手のレベルを極端に上げているわけではない。自発的に、自分に“枷”を嵌めていっているだけだ。

大切なものを手に入れると、人は弱くなる。

『私の知っている貴方は、そんな腑抜けじゃないでしょうっ!!』  
アリスに言われたあの言葉が、今のレイリーの頭では幾度となくリフレインされていた。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

「はあっはあっはあっ!!」

息が切れる。心臓がはち切れそうなほど痛い。肩で息をするという言葉があるが、ならば肩もしっかりと呼吸を手伝ってほしい。なんてくだらない考えを抱きつつも、メリッサは走っていた。

「…疲れた」

表情にはおくびにも出さず、アイリスが愚痴る。

「それどころじゃ、ないっ!!」

息も絶え絶えにメリッサが答える。

先ほど金火竜を探すために用いた千里眼で捉えた光景。それはメリッサの予想だにしない光景が映し出されていた。

(まさか、アイツらがこの島に来てるなんてっ)

間違いない。“ギフト”の連中だ。

ここまで強硬手段をとってくるとは思っていなかった。

おそらく、停泊した船で待機させていた部下は一網打尽にやられているだろう。

「戦わないの?」

アイリスの問いに、メリッサが立ち止まる。

「はあっはあっ…。無理よ。」

相手が人間だけなら、アタシの千里眼でうまく躲せるけど…。

アイツら、どこから仕入れてきたのか…。 “隠し玉”を持ってる

「?」じゃあ、今はどこへ向かってるの?」

「まずは、レイリー様たちと合流するわ」

「どして? モンスターが襲ってくるなら、撃退すればいいだけの

こと」

「それができりゃこんな走ってないわよ」

やっと息が整ってきたメリッサが、ため息をつく。

そして、言った。

「あんな“化け物”。私たちだけじゃ手に負えない。

レイリー様の力を借りないと、殺されるわ」

第11話 深緑の暴王（前書き）

お待ちせです。



## 第11話 深緑の暴王

レイリーは。その異変を誰よりも先に、敏感に察知していた。

「マリィ。アリスを連れて、先に行っておけ」

「えっ!? あ、はい」

「ちょっと、レイ。どういうこと? まさか」

「先に行け」

「っ」

レイリーから発せられる有無を言わせぬ圧力に、アリスでさえも口を噤む。

「警戒は怠るな。そして癒しの泉は迂回する形で抜ける。直ぐ追いつく」

「…分かりました。アリスさん」

「……………」

何を言っても無駄だと悟ったのだろう。アリスはレイリーを一睨みすると、大人しくマリィに従い歩き出した。レイリーは、それを見届けるや否や、正反対の方向へと駆け出した。

(…振り切るつもりで、進路はそれなりに変えていたんだがな)

なんとなく。後ろからつけられているという感覚はあった。だからこそ、レイリーは目的地へ真っ直ぐには進まず、それとなく回り込む形で歩いていたのだが、無駄だったようだ。

つまり。

(“千里眼”につけられているということ)

だとしたら。逃げようがない。“千里眼”は第3の眼で、対象を肉眼ではなく心の眼で追う。そこに距離や遮蔽物といったものは、一切の障害にならない。レイリーの持つ“呼吸探知能力”の、まさに上位版とも言えるだろう。

最初は眉唾物だと思っていたレイリーも、これまでの“千里眼”

の実績はある程度把握しているし、何より何度か会ったこともある。疑いようなない能力として、レイリーも理解していた。

問題なのは。

(…何の目的でつきまといっているか、だが)

遠くで響いた銃声の音を聞きながら、レイリーは深くため息をついた。

(大方の想像は付くがな)

ゲイルホーンに手を伸ばし、引き抜く。先日の“流星”との戦いで傷つき、打ててあと数発というところまでできていたが、それでも最初にこれを使用することに決めたのには理由がある。

レイリーには、ゲイルホーンを除けば片手剣のマスターブレイドしかない。“千里眼”たちがどんな敵を引き連れてくるかは、現時点では予想も付かない。が、少なくともマスタークラスが応援を要請してくるほどのものであれば(応援を要請しているのである)、ということも現時点で想像でしかないが)、余程のものであることは間違いない。

それほどの敵であるならば、様々な攻撃バリエーションがあるということに敵に理解させ、常に優位に立つておく必要がある。レイリーはその為に、ゲイルホーンの貴重な一発を牽制に使用することに決めた。

ゲイルホーンに弓矢を通し、構える。

「……さて、何が出てくるか」

木々のざわめきと共に、周囲の呼吸も乱れてくる。前方の茂みから、見覚えのある少女が飛び出してきた瞬間、レイリーは弓矢を解き放った。

○○○○○○○○

「はあっはあっ」

息も絶え絶えに、メリッサは走る。並走するアイリスは、その寡

黙さを保ったまま。時折振り返りざまにヘビィボウガンを数発放ち、またメリッサに歩を合わせていた。

「…そろそろ、追いつかれる」

「でしょうね!!」

アイリスの冷静な分析に、メリッサが声を張り上げて答える。

「けど!! 平気よ!! はあっはあっ!! こっちも追いつくわ!!」

メリッサの千里眼は、お目当ての人物との距離を正確に導き出していた。

「レイリー様は、待っていて下さってる!! 取り巻きは先に行っ  
たみたいだけどね!!」

だからこそ、自分たちに協力してくれるはずだ。メリッサはそう  
当たりをつけていた。

「はあっはあっ」

もう少し。あと少しでゴール。そう考え、メリッサは一度だけ後  
ろを振り返る。

それが幸いした。

木の根に足を絡み取られ、前につんのめる。

「きゃっ!?!」

ぐらりとバランスを崩す。しかし、走る勢いは止まらない。上半  
身は慣性の法則に従い、そのまま目の前の茂みに突っ込んだ。

「ふみゅっ!?!」

瞬間。

ガオンッ!!!!!!

自分の頭上を、何かが大きな音を立てて通り過ぎた。

○○○○○○○○

奇妙な鳴き声を上げて少女が茂みから飛び出してきた時には、既  
にレイリーの指から弓矢は離れていた。空間を揺るがすほどの音量

と共に、それは放たれる。ゲイルホーン本体から、亀裂をさらに深める嫌な音が鳴るが、レイリーの表情には特に変化は見られない。

凄まじいスピードで木々をすり抜け、矢は見事目標物にぶち当たった。そこでレイリーの双眼が見開かれる。

「…よりもよって、あいつか」

そう呟いた時には、メリッサとアイリスがレイリーの横に辿り着いていた。

「はあっはあっ！ たっ、助かりました。はあっはあっ！！」

「随分と呼吸が荒いな。大丈夫か？」

「しょ、正直…も、もう無理です……」

それだけ告げ、メリッサがその場で崩れ落ちる。

「おいおい……」

「私には、大丈夫かって聞かないの？」

「………お前には、特に聞く必要はなさそうだろ」

「えー」

ほんの少しだけ不満げな表情を作り、アイリスが抗議の声を上げる。敵が目前に迫っているにも関わらずこの態度。レイリーは精神的な頭痛を何とかやりこめた。

「来るぞ」

メリッサが這いつくばるように移動しながら、レイリーたちの背後に回る。最初から近接の戦力としてカウントしていなかったレイリーは、それを咎めることなく見送った。

「…いける？」

「お前のせいでゲイルホーンがほぼ死んでる。俺に残されているのは近接・片手剣のみだな」

レイリーがジト目でアイリスを睨みつける。

「じゃあ、これ貸したげる」

まるで反省の色も見せずに。かさかさとゴキブリのように這っていたメリッサの背から、アイリスがライトボウガンを取り上げた。

「…流石はギルドマスターだな。スペアで持つライトボウガンが」

鳳仙火竜砲』か」

『鳳仙火竜砲』。リオレウスの素材を使用した、ライトボウガンの中でも上位首。レイリーは、メリッサが戦闘の一切を苦手として知っているを知っている。よって、メリッサがライトボウガンを背負っているのを見て、瞬時にそれがアイリスのものであると悟っていた。だからこそ、それ一機で十分主戦力になり得るライトボウガンを“スピア”として持ってきているアイリスに驚いたのだ。

「レ、レイリー様…これも…」

死に際の人間のように、ひれ伏した体勢からメリッサがぶるぶると差し出してきた布袋を受け取る。じゅらっという音がした時点で、何が入っているかはだいたい想像が付いたが、レイリーはその場で包みを開けた。レイリーの想像通り。中にはこれでもかというくらい弾が詰め込まれていた。

「…鳳仙火竜砲は、状態異常弾と属性弾を除けば全種類の弾が撃てる」

「みただいな」

アイリスの言葉に、通常弾を装填しながらレイリーが答える。

そこまでが、タイムリミットだった。

劈くような咆哮。メリッサが悲鳴を上げるが、レイリーもアイリスもそちらに視線を送らない。茂みから姿を現した標的を見て、レイリーが苦笑いした。

「…恐暴竜。この島は何でもありか」

イビルジョー。別名を“恐暴竜”。非常に凶暴・好戦的であることから、ハンターたちの間では、特に嫌われるモンスターだ。並みのハンターでは絶対に手に負えず、ギルドからも『恐暴竜に遭遇したら、必ず逃げる』とまで言われている。

濃い緑色の皮膚を鈍く煌めかせながら、イビルジョーはゆっくりとレイリーたちに歩み寄ってきた。

「…この島に住んでいる子ではありません」

「なに？」

ようやく息が落ち着いてきたのか、ふらふらと立ち上がりつつ口にされたメリッサのその言葉に、レイリーが眉を吊り上げる。

「この島に、連れ込んだ人間がいます」

「連れ込む？ こいつをか」

口からだらだらと唾液を垂らしながらレイリーたちを物色しているイビルジョーに目を向けたまま、レイリーが半信半疑でそう問うた。

「間違いありません。イビルジョーが、古くからここに生息していたのならば、

とうにこの島の生態系は狂っているはずですから…」

「…その見解に異論はないが。では、連れ込んだ奴の目的は？」

「私たち、ギルドマスターの抹殺でしょう」

「おいおい。物騒だな」

真面目な顔をしてそう答えるメリッサに、レイリーが訝しげに眉をひそめる。

「で？ その酔狂な企みを抱えている人物に心当たりはあるのか？」

「“ギフト”です」

「きたっ」

「っ!？」

メリッサがその答えを告げ終わるまで待つていたかのようなタイミングで、イビルジョーが攻撃に移った。3人目掛けて、その巨体からは想像がつかぬ程のスピードで突進してくる。

「“千里眼”!!! お前は巻き添えを喰らわぬよう離れている!!!」

レイリーはそう叫びつつ、横へと迂回しながらイビルジョーの背後へと回り込む。ぐりと勢いよく、イビルジョーの顔がレイリーの方へと向いた。

「協力ふれい、だね」

脱力するようなセリフを吐きつつ、アイリスが背後から老山龍砲

をぶっ放す。

「ちっ」

その言葉に、レイリーは自分の体温がスツと下がるのを感じた。ギルドの連中と共闘など、あり得ない。それも、自らが積極的に加担するなど今まで一度もなかったし、これからもするつもりもなかった。だが、現に。レイリーは進んでこの2人に手を貸そうとしている。

(…ここでこいつを喰いとめなければ、アリサたちに被害が及ぶ。仕方のないことだ)

誰に言い訳しているのか。それすら分からず、レイリーは心の中でそう吐き捨てた。

イビルジョーの牙が、レイリーへと迫る。それをバックスステップで躲しながら、レイリーは引き金を引いた。

通常弾Lv2。通常弾シリーズの中でも威力重視の弾だ。しかし。全弾がイビルジョーの顔面に着弾するも、本人は首を振るだけでの痛みを払いのけた。

「おいおい、硬いな」

その様子に、レイリーが苦笑する。イビルジョーがレイリーに追撃を掛けようとしたところで、その背中が急に爆発した。流石にこれは痛かったのか、イビルジョーが前進を止めて咆哮を上げる。

「…なるほど。さっき打ち込んだのは徹甲榴弾だったか」

ちらりと視線を向けると、それに気づいたアイリスがピースで返してくる。それに脱力しながら、レイリーは再び鳳仙火竜砲を構えた。

「あまり銃は得意じゃないんだけどな」

そう口にしながら、怯んだイビルジョーの足に向かって何発も打ち込む。

「“流星”、足を狙ってくれ。ひっくり返してくれば、こっちが受け持つ」

「りょーかい」

レイリーの指示に1つ頷き、アイリスが続けざまに徹甲榴弾を放った。その全てが、イビルジョーの左足に突き刺さる。イビルジョーが呻きながらアイリスを睨む。どうやらターゲットを変更したらしい。右足を踏み出したところで、左足に刺さっていた徹甲榴弾その全てが爆せた。

「いいぞ」

バランスを崩し、その場に倒れこむイビルジョーへと駆け寄りながら、レイリーが口元を歪める。転倒したイビルジョーの元へと到達したレイリーは、目を丸くした。

「良い腕だ」

目玉をくり抜いてやるうとしていたが、改める。レイリーはマスターブレイドを引き抜き、イビルジョーの傷口に挿じり込んだ。耳を塞ぎたくなるような悲鳴が上がる。

アイリスの徹甲榴弾計3発は、1mmも狂いなく一点集中で突き刺さり爆発していた。動き回るターゲットに対して、寸分の狂いなく狙い撃ちできるその精密さ。

(…これが、ギルドマスターたる所以ということか)

もはや穴とも呼べる傷口を、レイリーのマスターブレイドが追い打ちをかけるように決る。ぶちぶちつと筋肉が裂ける音が鳴った。鮮血が噴き出す。レイリーは顔に掛からぬよう最低限の動きだけでそれを躲す。直後、イビルジョーが振り払う仕草を見せたため、レイリーは素早くその場から離れた。その過程で、マスターブレイドから鳳仙火竜砲へと持ち替える。

「同じところを狙い続けられれば、身動きが取れなくなるだろう。」

「倒す必要はない。正直、俺がしんどい」

「いいよ。私もこいつ、欲しくない」

レイリーの言葉に、アイリスは素直に同意した。それは、アイリスがレイリーの現状をわずかな時間・所作で見抜いたからに他ならない。レイリーの体は既に満身創痍。昨日からの立て続けに起こった戦闘で、レイリーの体はぼろぼろだった。明らかに、動きにキレ



がない。(とはいえ、並みのハンターよりは動いているのだが)

イビルジョーが、ゆっくりと立ち上がる。左足は重傷を負い血だらけだったが、それでも尻込む素振りすら見せず、刺すような殺気が放てるのは流石といったところだろう。

「焦らず、じっくり追いつめるぞ。無理さえしなければ、回避できない状況じゃない」

「おっけー」

逃亡に目途が経ち、お互いが頷きあつたところで。

事態は、急激に悪化した。

なぜなら。

空から、太陽が舞い降りてきたのだから。

第11話 深緑の暴王（後書き）

と、いうわけで。

イビルジョーでした！。

## 第12話 金色の太陽

「…うそだろ」

レイリーは、思わずそう呟いた。空からゆっくりと舞い降りてくる竜。太陽の光を浴び、金色に輝くそれは見紛うことなく。

「…金レイア」

アイリスが、ぼつりと呟く。つまりはそういうことだった。

「悲運にもほどがあると思わないか…」

レイリーは現状に堪らずぼやいてみる。ぼやいたところでどうにかなるわけではないということくらい、レイリー自身よく分かっているのだが。

「流星””！！」

レイリーが叫ぶ。アイリスは何も言わず、全て分かったと言わんばかりに頷いた。レイリーが鳳仙火竜砲の照準を、イビルジョーから金レイアへと移す。横目で見てみれば、アイリスも既に照準を金レイアへと変えており、レイリーの次の行動に備え待機しているところだった。

(…初めての共同狩猟にも関わらず、こちらのペースに文句無しの動きで合わせてくる。

流星はギルドマスターと言ったところか。個々人のスペックが高い)

そう感心し、レイリーは躊躇いなく装填していた徹甲榴弾を発射した。

(雄の希少種は、翼が弱かった。こいつも同じならば  
ギインツ！！)

甲高い音と共に、徹甲榴弾の弾が金レイアの右翼に着弾する。それを合図に、アイリスも立て続けに徹甲榴弾を放った。全て、レイリーが打ち込んだ場所と同じところに。

金レイアが、下からの攻撃を受けたことで威嚇の咆哮を上げる。

しかし、その咆哮も長くは続かなかった。

凄まじい音と共に、爆せる。計4発の徹甲榴弾は、その全てが各々の命を全うし、金レイアの翼に風穴を空けた。突然の負傷に加え、自身を空中で維持させる機能を失ったことで、金レイアが真つ逆さまに落ちてくる。　　ふらふらと立ち上がったイビルジョーの真上に。

「退くぞつー!!」

叫ぶものの、それが足りないことはレイリーにも分かっていた。メリツサはハナから逃亡の体勢に入っていたし、アイリスも自身の弾を打ち放つが否や結果はもう見えているとばかりに撤退の構えを取っていたのだから。

轟音に次ぎ、咆哮。大地を揺るがす、振動。その波動に若干よるめきながらも、アイリスは迂回しつつレイリーの元へと走ってきた。自身の元までアイリスが戻ってきたのを確認し、レイリーがポシエツトから2つの道具を取り出す。

閃光玉とけむり玉。前者を最初に、やや遅らせて後者を放り、レイリーは踵を返して駆け出した。前方には、先に逃亡を図っていたメリツサとアイリスがいる。眩い閃光が背後から放たれた。2匹の異なる呻き声が聞こえるものの、3人は一度も振り返ることなく森を駆け抜けた。

○○○○

「はっ…はっ…はっ」

最初にダウンしたのは、案の定メリツサだった。ゼーゼー言いながら、大木に手を掛けて崩れ落ちる。

「はぁー…はぁー」

次いで、レイリー。普段は何て事のない運動量であっても、今のレイリーからすれば地獄だった。メリツサが止まっていなければ、レイリーから休憩を申し出ていただろう。

「……………」

アイリスだけが、汗ひとつかかない完璧な無表情っぷりだった。

「はぁ…。逃げ切れたか？」

弾む息を強引に押さえつけつつ、レイリーが後ろを振り返る。今のところ、追って来る姿は視認できない。とはいえ、ここは密林のジャングル。数m先は木々によって覆われており、実際のところどうなのかがはつきりしなかった。

「…少なくとも、今は平気」

アイリスがそう答える。レイリーはそれを聞いて大木を背に座り込んだ。

「はぁ…はぁ」

レイリーの得意とする“呼吸感知能力”を使えば、アイリスに問いかけるまでもなく解決できる疑問。むしろアイリスの五感よりも精度は上だ。この能力を上回っているのは、目の前でげー言っているメリツサの“千里眼”だけだ。それはレイリーも自負していることだし、寡黙なアイリスも知っている。

それでも、聞いた。つまり使えていないということ。普段、それこそ自身が呼吸をするかのごとく自然に扱っていた能力が、使えていない。

「…限界？」

「はぁ…。正直な…。はぁ」

顔を上に向け、目を閉じながらそれだけ返す。

(…さつきから思考がぼんやりしていると思っただが。

ますます酷くなってきたな。手にもうまく力が入らない)

両手を広げてみる。それだけの行動なのに、手はプルプルと震えていた。

「はぁ…はぁ」

睡魔とはまた違う、意識が遠のきそうな感覚。目を開けてもらえない。

(…くそ。相当疲労が溜まっていたらしい)

自分の置かれている現状のこの上ない深刻さに、レイリーはようやく気付かされた。

「……………すーっ」

大きく息を吸い込む。それだけでも苦痛だった。

「…レイリー　　っ！！」

アイリスが、レイリーの名を呼ぼうとしたところで、後ろを振り返る。彼女を纏う雰囲気が、一変した。この雰囲気は、先ほどの共同狩猟の時に見せていた、それ。レイリーは“その反応を見ることですよやく”事態に気が付いた。

「…勝ち残ったのは、凶暴竜か」

半目で、前方からゆっくりと姿を現したモンスターを視認する。鳳仙火竜砲を手に、立ち上がるうとしたところで、目の前にアイリスが立ちはだかった。

「…何、してる」

ぼんやりとした頭で、目の前にいる女性の背中に問う。理由は、聞くまでもなく分かっているというのに。

「レイリーは休んで。私がやる」

「…無茶言っな。お前だけで勝てるわけが  
「今のレイリー、足手まとい。レイリーがいると、寧ろ勝率が下がる」

「……………」

きっぱりと断言された。自分より先に、モンスターの気配を気付かれたのも、戦闘で足手まとい扱いされたのも。レイリーにとって、は久しく経験していないことだった。

「…しかし」

「私が、やる」

アイリスが老山龍砲を構える。その光景に、イビルジョーが目を細めたのが分かった。

(…1人では、無理だ)

そう思い、レイリーが重い腰を上げる(この場合の重い腰とは、

文字通りの重い腰という意)。ふらふらと、アイリスの隣に並ぶ。アイリスは何かを言いかけ口を開いたが、結局何も言わずに閉じた。「…いくぞ。アイツが一步を踏み出したところが勝負だ」  
「分かった」

ふらふらとした体勢は、ほぼ間違いなく左足の負傷だ。そこを突き、自由を奪う。もはや走って逃げる事ができない以上、向こうの動きを奪うしかない。

一瞬の沈黙。イビルジョーが咆哮せんと口を開いたところで。

大量の血を吐き出した。

「!?!」

「…何？」

驚愕するレイリーと、若干眉を吊り上げるものの訝しげにそれを見つめるだけのアイリス。隣で淡白な反応をするアイリスに、心強さを感じながらレイリーが足を踏み出した。

「…レイリー？」

「…平気だ。どうやら、コイツは」

言い切る前に。イビルジョーが前のめりに崩れ落ちた。それを確認すると、レイリーは歩を止め、ふらふらと後退して尻餅をつく。

「…どうということ？」

「…金レイアには感謝だな。どうやら、凶暴竜は毒を貰っていたらしい」

「…ああ」

納得したとばかりにアイリスが1つ頷く。背を向けて逃げてきたので確証はないが、おそらく間違いないだろう。閃光玉により平行感覚を失った2匹は、互いが思い思いに暴れまわったに違いない。金レイアの尾にある毒の刺が、イビルジョーに当たってしまったのだ。

「ただ…。掠り傷程度でコイツが死に至るとは思えない。おそらく、

刺が貫いた場所は……」

「私たちが傷つけた左足、だね」

「……そういうことだ。……はあー。」

今日は運が悪いと思っていたが。……どうやらそうでもなかったらしい」

助かったとばかりに情けないため息をつき、レイリーがそう言う。しかし、そのレイリーの言葉を嘲笑うかのように、それは現れた。

「……本当に運が良いと思う？」

「……いや、訂正させてくれ」

アイリスの問いに、レイリーが呻くように答える。死に絶えたイビルジョーの後ろから、金レイアが姿を現した。ただ、金レイアも五体満足とはほど遠い外見をしていた。左翼が、無い。どうやら、イビルジョーによって食い千切られたらしい。それが、せめてもの幸運だった。

「どちらにせよ、やらねばならなかったということか」

ゆらりとレイリーが立ち上がる。

「レイリー、本当にいける？」

「いくしかないだろう。さもなければ、死だ」

「ん、分かった」

レイリーの言葉を受け、アイリスが頷く。それぞれが、それぞれの得物を手にして応戦の構えを取る。が、“その必要は無かった”。

「……もう十分だ。殺れ」

ガガガガガガガガガガッ！！！！！！

「っ！？」

「！！！」

痛いほどの沈黙の中、小さく響いた男の声。直後響き渡る、連射式の銃声。これには流石に、アイリスも息を飲んでいて。目の前の金レイアが、ゆっくりと崩れ落ちる。体には幾重にも打ち込まれた



銃弾が、痛々しい程に抉り込んでいた。

「…き、来た」

今まで呼吸を整えるのに精一杯で、碌に話もしなかったメリツサが、震えた声でそう呟く。その声に、レイリーは前方の茂みから歩み寄ってくる集団に気付いた。

「やあ、ご機嫌麗しゅう。ギルドの犬どもよ」

その中でも一際存在感を放つ男が、集団の最前列を押しつけて現れた。灰色の髪をオールバックにし、口には葉巻を啜えた男。年は50〜60くらいだろうか？ 観察眼が限りなく低下しているレイリーには、その程度の見たとおりの情報しか頭に入り込んでこなかった。

「…何か用かしら、アンタみたいな人がこんな辺境な地までやってくるなんて」

メリツサが、若干震えながらも口調だけは強気に問いかける。それを見やったベルディアは、いやらし笑みを浮かべた。

「くくく…。“千里眼”のお嬢ちゃんに“流星”の箱入り娘が網にかかるとは…。

正直想定外だった。血の気の多い“破壊神”“爆撃王”辺りだと踏んでいたんだが」

「残念ね。アンタの足りない脳みそじゃ、正確な予想なんてできないわよ」

「この餓鬼、ベルディアさんに向かって」

「あーあー、よせよせ。早まるんじゃねえよ」

隣で威きりだった男を、手で制しながらベルディアがそう言う。

「……………」

完全に傍観を決め込んでいたレイリーは、働かない頭でもこの事態がどのような結末を迎えるのかを、ほぼ正確に掴んでいた。

『網にかかるとは』

つまり、この希少種争奪戦の舞台となったアイラン島に入島してしまったこと自体が、罠であったということ。金・銀の両方が突如現れたという話自体がおかしなものだと思っていたが、どうやら悪い方にレイリーの勘が当たっていたようだった。

(…ユクモ村長・アゲ八がこれに関与しているかは、正直分からな  
い。

が、少なくともアイラン島長・エルマは、黒)

こいつ等の手引きをしたとしか考えられない、と。そこまで推察が至ったところで、レイリーはゆっくりと息を吐く。どちらにせよ、今この現状でそれを考えても仕方がないと思ったためだ。ふと、メリッサの言葉が頭を過ぎる。

このままでは。。。

『ギルドマスターの抹殺でしょう』

『“ギフト”です』

確実に、殺される。

### 第13話 混乱

差し込んでいた日差しが、雲に陰る。ベルディアの後ろに控える男たちは、金レイアが死んでいるにも関わらず尚もその銃口を下げようとしなない。その理由は、明白だった。

「10人の選ばれし者、ギルドマスター」。

それぞれがそれぞれの武器で、常人には辿り着けない領域にいる超人たちだ。

兼ねてからうちの頭は、お前たちの存在を危惧し続けてきた」

ベルディアは、そこまで喋るとゆっくりと葉巻の煙を吐き出した。「中でも特に危険視されたのが、“心眼”“流星”“千里眼”の3人。」

殺せるなら真っ先に殺せとまで命じられている最優先事項だ。

そして…。別件でもう1人」

ちらりと視線を移す。その仕草が嫌にわざとらしい。

「お初に。“異端”レイリー。なぜ君の様な者がこのような島においでで？」

「…依頼を受けただけだ。希少種を狩って欲しいとな」

取り敢えずそう答えておく。嘘は言っていない。ギルド本部までの足が欲しかった、という事実までは話す必要は無いと考えたためだ。

「…ほう？　して、そのクライアントは？」

「お前に教える義理は無いな」

「貴様あ」

そのレイリーの言葉に、ベルディアの後ろに控えていた男の1人が威きりだった。が、それも一瞬のこと。

ドゥンッ！

「!?　っぐ!?　ぐああああっ!？」

「ひっ」

「……………」  
「…ほう」

突然鳴り響いた銃声。狙いはレイリーたちじゃない。その男の膝だった。それにメリッサは小さな悲鳴で、アイリスは無言で、レイリーは片眉を吊り上げることで反応した。

「二度目だ。早まるなって言ったろ。俺の言葉が聞こえなかったのか？」

崩れ落ちる男に目をくれることなく、ベルディアは心底呆れた言葉でそう呟く。

「どけとけ。横にいられちゃ、俺の服が汚れちまう」

「はい」

「つくうつつ。ぐ…」

ベルディアの指示に従い、控えていた男2人掛かりで撃たれた男を下げる。

「さて、部下が見苦しいところを見せた。申し訳ない」

心が欠片も籠っていない、形だけの礼をしたベルディアが、再びレイリーに向き直る。

「お頭は、君の腕を相当評価しているよ。正直、妬ましくらいにな」

「そうか」

嫉妬の色が混ざった視線を、レイリーは事も何気に払った。いや、それは外見上はそう見えるというだけ。実際のところレイリーはそれどころではなく、既に立っていることすら限界だった。ぼんやりとした思考には更に拍車が掛かっており、視界は白く霞ががっている。乱れた呼吸も、徐々に浮き彫りになってきていた。

「ふ　　っ」

大きく息を吐く。正面衝突になれば、勝ち目はない。ベルディアの後ろには20人ほどの男たちが控えており、皆が皆銃口をレイリーたち3人に向けている。全快の状態であっても勝てないだろう。この距離でこの人数が放つ弾を、弾けるはずもない。

「君も危険人物ということでは変わりない。

それもお頭曰く、危険度はその小娘どもより数段上、だ。

殺しておきたいというのが本音。ただ、君“だけ”には選択肢がある」

思わせぶりな喋り方をするベルディア。レイリーはこの言葉を聞いた時点で、動かない思考の中でも次の問いに予想を付けていた。

「……“流星”“千里眼”」

レイリーが、ベルディアたちには気付かれないよう小声で呟く。アイリスとメリッサも、その声掛けに視線を動かすことなく全神経を集中した。

「俺がアイツらの注意を引き付ける。タイミングを見誤るな、真っ先に逃げる」

「…え」

「……」

「俺たちの仲間になれ、“異端”。お前の力が、俺たちには必要だが、ベルディアが両腕を広げてそうのたまう。レイリーはそれを見ながら、ゆっくりと足を動かした。ベルディアの元にはない。後退したわけでもない。迂回するようにゆっくりと、横へ。無論、アイリスとメリッサを相手の視界から外す為である。

「お前たち、“ギフト”と言ったか。

この世界の狩猟業、その全てを牛耳るギルドに相反する組織の名称だ。

非合法たるその組織は、無法者たちの集団によって形成されており、

モンスターの違法狩猟の他、人殺しや薬の売買等、黒い噂が絶えない」

「その通りだな、噂とは言うものの大半は事実でもある」

レイリーの言葉に、ベルディアが事も何気に頷く。

「この島を舞台に選んだのはなぜだ？」

「ここはギルドの数少ない管轄外の場所だね。それも孤島ときた。

ギルド本部からかなり離れている。網を張るには格好の場所だったというわけさ」

「アイラン島長・エルマはそこを付け込まれ、抱き込まれたというわけか」

「なかなかどうして、鋭いな。実にその通りだ。」

「ここはギルドの保証の一切が受けられぬ場所。簡単に釣れたものだよ」

「希少種はどこで捕まえたんだ？」

「おいおい、そんな貴重な情報、教えられるはずがないだろう？」

「もちろん君が俺たちの仲間に加わってくれるならば話は別だが」

ベルディアがおどけた口調でそう答える。レイリーは特にそれを気にした素振りも無く、次の質問に移ることにした。本当に聞き出したいのは、次。他はこれを隠すためのフェイクでしかない。

「凶暴竜はどうやって捕縛した？ アイツを捕えるのは、容易ではなかっただろう」

「うちにも手練れはいるさ。あの程度、どうとでもなる」

その発言。つまり、ベルディアが捕えたわけではないということ。(…お前に、凶暴竜を狩るだけの実力があれば終わっていただろうが。)

少しでも見込みがある以上、やれるだけやるしかないな)

ベルディアたちに勘付かれぬよう、レイリーは後ろ手にそつとポシエットの中へと手を伸ばした。

「…それで」

それを悟られぬよう、レイリーがゆっくりと口を開く。

「アイツ等の処分はどうする？」

顎で指し示す。その先には、アイリスとメリッサ。その所作に、自分たちの仲間になるのであると考えたベルディア含め一同はある種の緊張を解きつつ、皆が皆2人ギルドマスターへと目を移す。

反対に、信じられないといった表情でメリツサが、感情の欠片も読めぬ表情でアイリスがレイリーの方へと目を向けた。

そして。それはレイリーのまさに思惑通りだった。自身を見るアイリスとメリツサに向かい、目で頷く。それと同時に、レイリーはポシエットから抜き出したものをベルディアたちに放り投げた。

カッ！！

眩い閃光が、一帯を照らす。それを事前に知ることができたのは3名。投げた張本人・レイリーに、その動作を見ていたアイリスとメリツサ。不意を突かれたのは相対する“ギフト”の面々たち。閃光をまともに喰らった男たちは、次々に得物を取り落とし目を押さえて蹲る。

それを見計らい、アイリスとメリツサが走り出した。

「レイリー様！！」

「レイリー！！」

「先に行け！ 直ぐに追いつく！」

ふらふらとした足で。それでも目標は見失わず。レイリーはお目当ての人物との距離を、瞬時に詰めた。

「くそおおおおっ！！ あの野郎おっ！！ 殺してやるっ！！」

ベルディアが未だ回復しない視界のまま、懐から銃を取り出す。

そしてレイリーは、その行動に半ば予想を立てていた。

「満足に見えぬ状態で、そんなものは扱うべきじゃないな」

ズバンッ！！

躊躇いなく、レイリーはマスターブレイドを振り抜いた。ベルディアの握っていた得物が、その腕ごと地面へと転がり落ちる。

「ぐあああああっ！！？ き、貴様ああああ！！」

「そ、そこか！？」

ベルディアの咆哮の陰で、ベルディアとレイリーの声により場所を特定した1人の男が銃を構える。それを冷徹な目で見据えていた

レイリーは、隣にいた目を覆う別の男の胸倉を掴み寄せた。

「へ？ な、なに…」

ドウンツ！！

「ぎゃああああああ！？」

男の発砲した弾が、レイリーが引き寄せた別の男の足に着弾する。盾にされた男は、絶叫しながらその場で蹲った。その男が持っている銃が、転がる。それを拾い上げたレイリーは、誰を狙うでもなく空へと銃口を向けて全弾を打ち放った。

「な、なんだっ！？」

「何が起こってる！？」

「ひいいいいっ！？ や、やめてくれええっ！！」

絶え間なく響き渡る銃声。視界を奪われた男たちは、視覚から全てを想像するしかない。よって、この銃声によって生まれし恐怖は計り知れないものだった。

「くそおおっ！！」

「よせ！！ 仲間内で打ち合うことになる！！」

闇雲に銃を乱射しようとした男を、隣にいた別の男が声で制する。

(…勝手に自滅してくれるのが、一番楽だったが)

思いの外冷静な奴もいたものだと感じつつ、レイリーは弾切れした銃を投げ捨てて、メリッサとアイリスが逃走した経路に足を向けて走り出した。

レイリーの取った行動は、概ね“正しい”。どんな理由があれ、人に暴力を振るってはならない。ベルディアの腕を斬り落とした件については、“良いこと”だとは言えない。が、あの場を混乱させる為にはそれ以外に方法が無かったのは事実。

レイリーからしてみれば、ベルディアとは名も知らぬ赤の他人であり、これまで一切の面識がない。その為、彼がどれほどのリーダーとしての資質を持っているかについては、まったくの謎だった。

閃光玉を放り、視界を奪ったとてそれはあくまで一時的なもので



あり、直に回復する。仮にベルディアが率先して事態を收拾させることに努め、視界が回復するまでの間に戦闘態勢を整えられていた場合、どれだけメリッサとアイリスが逃亡するに当たり距離を空けられたかについては不明である。

よって、確実に逃げ切れる方法をとる必要があつた。出した結論が、場の混乱とリーダーの有する統制力の奪取。ベルディアの腕を斬り落とし、銃声を視界が奪われた者たちに聞かせることで混乱を助長させる。生き残る為に形振り構わず行つたそれは、この場においてはベストの選択であつたと言わざるを得ない。

ただ。誤算があるとするのならば。

○○○○○○○○

「はあっ!! はあっ!! くっ…くっ…はあっ!!」

どさりと。何の受け身も取れぬまま、レイリーは成す術なく地面へと前のめりに倒れ込んだ。先日より続く、度重なる戦闘。十分な睡眠時間も取らぬまま酷使し続けていた体は、文字通りの限界を迎えた。

「っ!? はあっ!! っほっ!! っほっ!!」

もはや、満身に呼吸すらできず。レイリーは地に伏したまま目を閉じた。

(…げ、限界か)

薄れゆく意識の中、言わずとも分かっている事実が頭を過ぎる。

(くそ…。こんな、ところで…)

ギルドの本部へと向かう道中、寄り道気分で立ち寄つた場所でのような事態に陥るとは。今更公開したところでもう遅いことは重々承知の上で。それでも思う。気付くべきだったのだ。『希少種の番いが急に現れ暴れている』等という酔狂な話は、あり得ないのだ。

真っ白にぼやけていた視界は、もはや黒ずんできており。“呼吸感知能力”はおろか、本来目で見えるべき光景、そして耳で聞こえるべき音すら、レイリーの思考に流れ込んでこなくなった。

ここで、終わり。

そう感じたところで、レイリーの意識は完全に途絶えた。

なぜか、“あいつ”の音が聞こえた気がした。

## 第14話 遅れてきた増援

「レイっ!!」

「レイリーさんっ!?!」

「ちよつと、嘘でしょ!?! レイリー様!?!」

「……レイリー」

レイリーが地に伏し、動かなくなって直ぐ。メリッサ・アイリスが、2人の更に先にいたアリサとマリーを引き連れて戻ってきた。倒れたまま動かなくなったレイリーを見て、それぞれがそれぞれの反応を示しつつ駆け寄る。

「レイっ!!! レイっ!!!」

真っ先にレイリーの体を抱いたのは、言わずもがなアリサ。普段の彼女からは想像できぬほどの形相で、力無く横たわるレイリーを抱き寄せる。

「っ!!! まだ息はありますっ!!! 急いで応急処置を!!!」

傍に駆け寄っていたマリーがそう叫びつつ、バックの中身を大胆にぶちまけた。

「貴方たちがっ!!!!!!」

それを手伝うべく近寄ってきたギルドマスターの2人に、アリサが咆哮した。

「貴方たちが!!! ついていながらレイがこうなったのは!!! どういうこと!?!」

「貴方たちが!!! レイを1人取り残して私たちの元へ来たのは!

! どういうこと!?!」

「っ」

「……」

その叫びに。メリッサは小さく息を飲み、アイリスは相も変わらぬ無表情で応えた。その態度は、アリサの怒りにさらなる拍車をかけた。

「何がギルドマスターよ！！ 人1人救えないマスターなんて、いてたまるか！！！！！」

「アリサさんっ！？ 抑えて！！！」

何も言わぬメリッサとアイリスに飛び掛かるうとしたアリサを、マリーが抑え込む。

「っ！？ 何すんのよ！！ 離しなさいよ！！！」

「お、落ち着いて下さい！！ レイリーさんはまだ死んでないんですっ！！！」

それに、アリサさんだつて怪我人なんですから！！！」

「関係無いわよ！！ こいつ等が！！ こいつ等がああ！！！！！」

「レイリーは……………」

アリサの、今にも掴みかかってきそうな光景を目で捉えつつ、アイリスが口を開く。しかし。

「私たちに、先に行けと言った。だから、行つた」

それは、完全に逆効果な発言だった。その淡泊な発言を聞き、血が昇り真っ赤になっていたアリサの顔から表情が抜け落ちる。

「……………こ、殺してやる」

「……………え」

思わず鳥肌が立ちそうになるほど、底冷えした声色に。標的にならないマリーが、間の抜けた声を上げた。

「殺してやるっ！！！！！！！」

「ひっ！？」

「……………」

「わわわっ！？ ダメですって！！ アリサさんっ！？」

ギルドナイトセイバーに手を掛けたアリサを、マリーが信じられないといった顔つきで羽交い絞めにする。その問答無用の殺気に当てられ、メリッサは弱々しく尻餅を付いた。

「殺してやるっ！！ 殺してやるっ！！ 殺してやるっ！！！！！！！」

「アリサさん！！ ストップストップストップ！！！！」

マリーを斬り捨ててまで特攻をかけないのは、僅かでも良心が残っているが故か。はたまた怪我による無意識下における抑制か。アリサの激昂とマリーの抑え技は、完全に拮抗していた。

「……貴方が」

「アンタもう喋んじやないよ！！」

再び口を開いたアイリスに、メリッサが呻き声を上げる。本来ならば物理的に口を塞いでも止めさせるところだが、生憎メリッサは腰を抜かしており立ち上がることができない。よって、メリッサの抑止声は空しく消え去り、アイリスはマイペースなまま自身の言葉紡いだ。

「私を殺したいと思う気持ちは、正常。権利もある。殺してくれていい」

その発言に、アリサの動きが止まる。その代り、表情が皮肉に歪んだ。

「腐った根性してんじゃない。そう言えば私が許すとも思ってるわけ？」

「私は、それだけの事をしたと思う」

「偽善者っ！！」

「けど」

「なにっ！！」

アリサの再びヒートアップしかけている声色には、顔色1つ変えることなく。アイリスは、見当違いの方向へと目を向けた。

「あれを、どうにかするほうが先だと思う」

「レイリイイイイイイイイイイイイイイイイッッッ！！！！！！！！」

アリサ・マリー・メッリサが視線を向け、それを視認するのと。ベルディアが怒りの咆哮を上げたのは、ほぼ同時だった。

その声を聴いた瞬間。アリサの全身から、力が抜ける。

「ア、アリサさん？」

「……離しなさい。マリー」

「け、けど……」

「このまま抑え込んでいたら、恰好の的よ？ 私たち」

「……」

このまま離したら、自分の目の前でギルドマスターを血祭りに上げるのではないかと心配するものの、アリサの発言には納得せざるを得ず、マリーはそつとアリサの腕から手を離れた。

ゆっくりと、アリサが立ち上がる。アリサ・マリー・メリッサ・アイリスの視界の先には、片腕を失ったベルディアが率いるギフトの集団が、草木を押し分けながら向かって来るところだった。

「誰、アンタたち」

一歩進み出たアリサが、抑揚のない口調でそう問う。

「くくつ……くくく……。 “可憐”アリサ嬢か。」

まさか、貴様もこんな辺境の地を訪れているとは。

まあ、“異端”とセットの女だ。いても不思議ではないか」

「質問に答えなさい。誰よアンタ」

「おやあ？ そこに転がってるのは何かな？ “異端”は死んだか？」

アリサの質問は完全に無視。自らの腕を抑え、脂汗をかきながらベルディアがせせら笑う。普段なら先ほどのように激昂するところであるが、もう既に怒りの臨界点を3回くらい連続突破したアリサの思考回路は、逆に彼女を冷徹にさせていた。

アリサの視線が、ベルディアの右腕へと向く。斬り落とされたそこは、自身のマントによって包まれてはいるが、抑えきれない出血により黒ずんでいた。

「アンタ、右腕どうしたの？」

おそらく、レイリーだろう。おそらくと思いつつも、アリサはほぼ確信していた。

「相当な間抜けね、どっかに落としたんじゃない？」

鼻で小馬鹿にしたような口調でそう告げる。ベルディアは、その単純な挑発に劇的な反応を見せた。

「こ…このアマあああ!!!」

「来るなら来なさい。正直、今の私イライラしててしょうがないの。腕も足も耳も鼻も。残ってる部分、全部削ぎ落としてアゲル」

「殺せつ!!!」

アリサの挑発が、引き金となった。ベルディアの命により、後ろに控えていた男たちが一斉に銃を構える。その時だった。

「いや、お前さん等。みんな武器は捨てて貰おうかねえ」

ガガガガガガガッ!!!!!!

ベルディア率いるギフト陣営、そしてアリサ・マリー・メリッサ・アイリスの足元を、無数の銃弾が打ち抜いた。

「だ、誰だっ!?!」

「誰だ、とはご挨拶じゃねえーかあ?」

がさがさと音を立てながら、茂みから1人の男が姿を現した。その突然の訪問者に、アリサを除く両陣営の誰もが息を飲む。

「……今度は誰」

「あららあ、こりゃあ手厳しいぜえ。俺を知らんのかい、お嬢ちゃん」

ぼさぼさの髪をぼりぼり掻きながら、訪問者がけらけら笑う。

「ロイ……」

信じられないモノを見るかのように、腰を抜かしたままのメリッサが呟く。

「“爆撃王”っ」

メリッサの呟きと、その男を自身の目で見たことで。ベルディアの口からは、憎らしげな声色でその単語は漏れ出た。

背には鈍い光を放つ『王牙剣斧【裂雷】』。ジンオウガ素材を用いたスラッシュユアックスの上位首。“爆撃王”の2つ名を持つ彼も、

“流星”アイリス・“千里眼”メリッサと肩を並べしギルドマスターが一角。

これで、このクエストにはギルドマスターが3人投入されたことになる。

「なぜ、ここに貴様がいる……。間に合うはずが……」

「なぜってえ、そんな不思議な事でもないだろおよ」

ロイが、パチンと指を鳴らす。その音にこちら一帯を包囲していたギルドの面々が突如姿を現す。

「こ、これはっ!?!」

「お前さん等とはとくに包囲されてるってえことだい」

その数は、不明。ロイの合図によってその存在を現した面々は、皆銃を構えいつでも攻撃できる状態になっている。まさに360度。全方位を死角無く配備されていた。

「……いつの間に」

その光景に、ベルディアが苦々しげに呻く。

「それが分からんようだから、お前さん等は二流なんだよい」

「……貴様あ」

「まあまあ、そう怒りなさんなってえ。

これから俺がするのは脅しじゃない。提案だあ」

「……? どういうことだ」

ロイのその言葉に、ベルディアが訝しげな視線を向ける。

「ここはお互い、見逃すことにしないかい? これ以上は無益な争いを生むだけだあ」

「何ですってっ!?! ロイツ!! アンタ、コイツ等のこと見逃す気!?!」

ロイの提案に、メリッサが信じられないとばかりに叫ぶ。しかし、ロイはあくまでも冷静にメリッサの言葉に反論した。

「メリッサ、おめえ。そこに伏してるのは“異端”だろお。



相手の攻撃から、動かぬ“異端”を守り切れる自信が、おめえさんにあるのかい？」

「っ！？　そ、それはっ！？」

言い返そうとして、口をぱくぱくさせるメリッサ。しかし、言葉は紡がれなかった。

「オヤジグランドマスターは今回の件に、最初っから疑問を持つてたんだあ。

だからこそ、後続組にもギルドマスターである俺を抜擢した。

“異端”がやられているのは正直予想外だったがあ……”

ロイは、伏したまま動かないレイリーを興味深そうに眺めてから、ベルディアの方へと視線を戻した。

「ってーなわけで、どうだい。ここは引いちゃくれないかねえ」

「く、くくく……。ふざけるなよ？」

ベルディアが、低くくぐもった笑い声を漏らす。そのまま、大声で怒鳴りあげた。

「ふざけんなよ！？　アイツはこの俺に何してくれたと思ってる！！

腕だ！！　腕を一本持つていかれた！！

このまま『はいそうですか』と帰れるわけが

「

ドオオオオオオンッ！！！！

突如の轟音に。皆が息を飲み、肩を震わせた。瞬く間にロイの背から抜かれたスラッシュアックスは、落雷にも等しき電撃を生み、彼の横にそびえ立っていた大木を一振りで切り崩した。

ベルディアがぐくりと喉を鳴らす。ロイはそれを冷徹な目で見据えながら、得物を地面に突き刺しもたれ掛りながら口を開いた。

「正直な話、俺としてはどっちでもいいんだよあ」

何の話か。この一言だけでは、この場にいる誰も分からなかった。

「この“提案”はさあ。オヤジグランドマスターが出したものでさあ。

オヤジグランドマスターは“異端”をえらく気に入ってるからよーお？

死なせたくなみたいなんですかあ……ふわあ」

欠伸を1つ。にも関わらず、ロイから発せられる殺気はやまない。「だから提示したただけだあ。お前らが乗らねえのならそれもよし。

こっちもリスクさえ考えなけりゃあ、君の首1つ飛ばすのくらい直ぐなんだぜえ？」

「……くっ」

無意識の内に、自身の足は後退していた。それに気付いたベルディアが、苦虫を噛み潰したかのような顔を作る。

「帰んな。ビビったら、勝負は終わりだあ」

「ちいっ！！ 必ず、殺してやるからな！！」

そう吠え、ベルディアが踵を返した。誰の返事を待つでもなく、ロイに背中を向けずんと森の奥へと歩を進めていく。それにベルディアに仕えていたギフトの面々も、慌てて続いた。

「どけっ！！」

精一杯の虚勢を張り、囲んでいたギルドの人間を押しつけながら。

ギフトの面々は、森の中へと姿を消した。

## エピソード

ギフトの面々が姿を消した後。後ろに控えていたAGSたちは、アイルー・ギルド・サポーターズ直ぐに行動を開始した。無論、レイリーの治療の為である。アリサが制止を掛ける前にレイリーに飛びついたアイルーたちは、傷を治療し、熱を計り、薬を飲ませていく。

最初はその周りをうろろしていたアリサだったが、偶然脇腹を抑えたところを他のアイルーに発見され、その場で押し倒された。

「我慢はよくないニヤー！　ここ、折れてるニヤ？」

「ちよつと、勝手に触らないで!？」

アリサとAGSがぎゃーぎゃー騒いでいる中、レイリーの容体に大幅の目途がついたのか、リーダーがギルドマスター3人の所へと歩み寄った。

「どうだい？」

「良いとは言えないニヤ。命に別状はニヤい。

けれども、肉体的ではなく相当の心労も溜まっていたようだニヤ。完治するにはそれなりの時間を要するニヤ」

「ふうむ」

ロイが顎を撫でる。

「……心労？」

「その辺に関しては、メリッサが良く分かるんじゃないかい？」

アイリスが首を傾げたのを見て、ロイがメリッサに振った。

「……うん。多分、レイリー様が使った“呼吸感知能力”のせいだと思っ」

「え？　その能力って、そんなに負担が掛かるんですか？」

包帯でぐるぐる巻きにされたマリイが、話に加わる（アリサと違い、素直に治療を受け入れた為早く終わった）。

「当たり前でしょ」

マリイの問いに、メリッサが何言っちゃってんのかという顔をした。

「レイリー様の“呼吸感知能力”ってのはね。言い方は悪いけど、言うなればアタシの“千里眼”の劣化版みたいなものよ。」

自身の五感の感度を、必要以上に敏感にし周囲の気配を探るの。これにより、常人には捉えられない相手の呼吸・気配・拳動を感知する。

場合によっては、相手の動きを先読みすることもできるわ。けどね……」

メリッサは、ちらりとレイリーを見た。

「常人には感知できない情報が、自身に流れ込んでくる。

本来ならば感知“せずに済む”ような微々たる情報まで全部、無制限に頭の中に入り込んでくる。言ってる意味分かる？

膨大な情報が、絶えず頭へと無制限に流れ込んでいたらどうなると思う？」

「……まさか」

マリーの呟きに、メリッサは感情の籠らない顔色で頷いた。

「自分の頭のキャパシティをオーバーした時点でパンクするわ。

脳がイカれたら、当然使い物になんてならない」

「……レイリーは、頭がイカれたの？」

「いんや、そうは言っていない」

アイリスの問いに、メリッサが首を振る。

「そこが流石はレイリー様と言ったところなのかしら。

AGSが言ってたでしょ、時間は掛かるが完治はするって。

いくら劣化版とは言え、私なら半日使ってれば発狂する自信があるのになあ」

「……それは、メリッサの頭が弱いからじゃない？」

「うん。やっぱアンタは後で殺すわ」

ギルドマスター2人の軽口を余所に、マリーは無意識の内に唾を飲み込んでいた。常人には感知できない情報が、無制限に頭に入り込む。レイリーは、その能力を今回どれだけ利用していたのか。マ

リーには知る術は無い。だからこそ、背筋に伝う嫌な汗は止まらなかつた。

「しょうがないねえ」

ぼりぼりとロイが頭を搔く。

「おい、そのお」

「何ですかニヤ？」

丁度横を通り過ぎるところだったアイルーを呼び止めた。

「異端”の応急処置が終わったんなら、担架だせ担架。」

続きは飛行船の応急室でやれえ」

「……え？ それって」

メリッサの話で、固まっていたマリーが再起動する。

「乗せてってくれるって事ですか？」

「そうだあ。聞いた話じゃあ、

“異端”が倒れた原因つてーのは、ウチにもあるみたいだしなあ」

その言葉に、メリッサとアイリスは揃って顔を背けた。

「お前らあ、<sup>オヤツ</sup>ブランドマスターの説教くらいは覚悟しとけよあ」

「くっ」

「ええー。めんどい」

2人が露骨に顔をしかめる。

「……それにい」

それを無視したロイは、目を細めながら。

「俺も“異端”に興味が出て来たからなあ」

そう、呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9530q/>

---

異端者の狩獵物語

2011年10月4日03時31分発行